

浦添市立図書館紀要

BULLETIN OF THE URASOE CITY LIBRARY

No. 8 1997・3

□グラビア	伊波普猷顕彰碑について	栗国 恭子
〔図書館学研究論文〕		
10周年記念事業報告	浦添市立図書館の歩みと今後の道標	資料 係 (3)
すべてのこどもに読書の喜びを!		奉仕係・児童サービス (14)
ー児童サービスの現場からー		
〔短信〕	10周年記念事業の光と影	遠山 満 (25)
〔短信〕	図書館雑感	与座 文子 (26)
〔短信〕	沖縄学研究室の特色	又吉 栄喜 (27)
〔短信〕	平成8年度沖縄県地域史協議会の研修	長間 安彦 (29)
〔研修報告〕	中国泉州市での浦添市職員派遣事業の報告	上間 尚二 (31)
〔評定所文書覚書(7)〕		
評定所文書にみる浦添		金城 功 (36)
神父たちの散歩道		徳元 剛 (39)

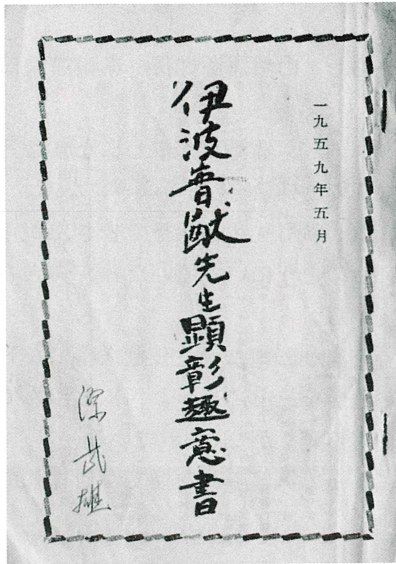
特集 伊波普猷ー没50年記念ー

伊波普猷と浦添と沖縄学と	栗国 恭子 (46)
我が伊波普猷	高良 倉吉 (50)
「琉球民族」への視点	屋嘉比 収 (55)
ー伊波普猷と島袋全発との差異ー	
伊波普猷と末吉麦門冬(安恭)の交流	栗国 恭子 (72)
ー明治末期から大正末期にかけてー	
沖縄学研究室所蔵の伊波普猷関係資料	栗国 恭子 (82)
「沖縄学講座・物外忌記念講座」概要	栗国 恭子 (89)
新発掘の伊波普猷論文について	岸 秋正 (95)
「琉球史料叢書」の出版記事紹介	小野まさ子 (98)

□沖縄学研究室寄贈受付図書資料一覧(1994年後半～95年前半)	(100)
□『琉球王国評定所文書』既刊分の紹介	(110)

浦添市立図書館

伊波普猷顕彰碑について



伊波普猷の13回忌にあたる1959（昭和34）年に、有志達によって顕彰事業が計画された。事業内容は「伊波普猷先生顕彰趣意書」としてまとめられている。「今年は十三年忌に当たりますが、御遺骨はまだ東京築地本願寺に安置されたままであり、葬るに御墓もなく、冬子未亡人たった一人に見守られております私共は先生の御霊を故山にお迎えし度い。浦添城址は先生が嘗つて“浦添考”を書かれて、その歴史を明かにされたゆかりの地であります。城址の南面、はるか首里那覇を展望し、慶良間の島影の見える景勝の地点に先生のお墓と顕彰碑を建立し、永く先生の遺徳を偲び業績をたたえ度いと存じます。それで左記の業績を計画致します。皆様の御賛同をえ、この事業が完遂出来ますよう御協力を御願申し上げます。」と趣旨が述べられている。発起名簿には、沖縄（5名）、東京（43名）、関西（11名）、九州（6名）、ハワイ（7名）の各地の有志達が記されている。寄付金を募り、事業経費の

計画がたてられた。

1961（昭和36）年、第一期工事の完成を迎え8月12日午後4時から15周年忌をかねて、遷骨式と顕彰碑除幕式が催された。（広報「うらそえ第30号」1961年9月15日発行、浦添村役所総務課広報係）

伊波冬子未亡人ら遺族、顕彰会発起人、地元からは山城浦添村長ほか代表、また大田琉球政府主席ほか来賓など約百人が出席しておごそかに行なわれている。

顕彰会を代表して、源武雄氏が「郷土の大先輩のため、立派な墓と碑ができたことは、喜ばしい、各方面のご協力を感謝する」とあいさつ。名幸芳章氏の読経で参加者の焼香がおこなわれた。

顕彰碑除幕式では、浦添小学校6年生・新城光枝さん、吉田悦子さんの手で紅白のヒモがひかれて、白布が落ち「おもとと沖縄学の父伊波普猷」と大書した、高さ2.36メートルの碑があらわれた。1959（昭和34）年に遺骨を抱いて沖縄に戻った伊波冬子夫人は、この時の事を回想し「ことに小・中学校、高校の何千、あるいは何万という生徒さんが、参加されたのは感謝にたえません。故人の



名前さえおわかりにならないであろうと思われる、この幼い方達が大きくなって、〈沖縄史〉や〈おもろ〉などについて思い出すことがあるかもしれません」（『白菊の花 伊波冬子遺稿集』）と述べている。

除幕式の後、引続き経過報告、会計報告などがあり、墓地建立に協力した山城浦添村長、赤嶺浦添前村長の両氏に感謝状がおくられている。

その後も宮里栄喜、国吉真哲、源武雄、川平朝申等の顕彰会のメンバーと、浦添市が中心になり命日である8月13日には、伊波の雅号である〈物外（ぶつがい）〉にちなんで物外忌を行なうようになる。

こうした伊波を慕う人々について夫人は「先生もやっと陽の目をみた。私も先生の余徳で皆さんからも大事にされ、こうして生きていられる。思い残すことはない」と口癖のようにいっていたと、夫人の従妹の比嘉美津子さんは「伊波冬子の詩」（『白菊の花』）で述べている。

郷土史家の東恩納寛惇は、先達である伊波の死後の弔いについて「適当な勝地に伊波普猷之墓でなしに、彼の業績を永遠に伝ふべき”おもろ碑”を建てたい」（伊波君の遺骨を故山に迎へよ）」と望んでいた。ちなみに浦添市には、他市町村に先がけて市内の数ヶ所に“おもろ碑”がつくられている。

顕彰碑には、生涯を通して沖縄研究を深めた伊波を慕う、東恩納によって捧げられた撰文が刻まれている。



伊波普猷顕彰碑の前の伊波冬子（『白菊の花』より）

彼ほど沖縄を識った人はいない
彼ほど沖縄を愛した人はいない
彼ほど沖縄を憂えた人はいない
彼は識ったために愛し、愛したために憂えた
彼は学者であり
愛郷者であり
預言者でもあった

伊波を慕う多くの人々の思いがよせられ浦添城址の中に霊園が造られてから35年余の時間が流れた。

現在その場所は、亜熱帯の木々がこんもりと繁げり、木陰をつくる静かな佇まいである。

ここ数年の物外忌は、比嘉美津子さんと一緒に浦添市立図書館沖縄学研究室のメンバーで、伊波の好きだった煙草とコーヒーとサーターアンダーギー等を供えてささやかに行なっている。（栗国恭子）

浦添市立図書館の歩みと今後の道標

浦添市立図書館資料係

1. はじめに

1995（平成7）年度は浦添市立図書館にとって意義深い年であり、関わった職員にとって貴重な「時」を刻むことのできた年であった。さらにその年は、戦後50周年という等閑視されてならない歴史の結節点にも重なっていた。

浦添市立図書館が、呱呱（ここ）の声をあげたのは1985（昭和60）年4月23日で、1995（平成7）年は開館からちょうど10年目の佳節であった。大型の単独館であり、またコンピュータを導入した公立図書館としての誕生は、当時市民を初めとして各方面に刺激を与え、県内における図書館建設への胎動の第一歩を記したものであった。

開館以来営々として築かれた経験の蓄積を経た10年目というこの年に、奇しくも遭遇した図書館職員として、今後この図書館の歩みを引き継いでいくためには、どうあらねばならないかという思いとの出会いなくして、10周年記念事業の展開は実現しなかったといっ

てよい。

これまでの歩みを辿るとともに今後の展望を開く意味で、1995（平成7）年は、市民はもとより職員にとっても、不可避で運命的な年であったといえよう。

「いつかは目的地に到達しようなどぐらいの気持ちで歩んでいては不十分です。その一步一步が到達地であり、その一步としての価値があるべきだ。」⁽¹⁾とのゲーテの箴言をまつまでもなく、図書館機能の価値ある進化の

ために、10年の歩みを振り返るということは今後の歩みを続けるために不可欠な行為であり、またなによりも図書館を真に図書館たらしめた草創の精神のあり様を確認することは重要なことであった。

その意味で10周年記念事業は、単なる一過性の事業ではなく、静止的な祝賀や顕彰の対象でもない。それは図書館運営を支えてきた原点の確認と今後の進展を左右する未来に開かれた新たなる起点なのだ。しかも、図書館という社会的遺産自体も絶え間なく未来へ動き、創造しながら、そのことを永遠に問い続けなければならない。この精神の流れそのものに触れることが、記念事業推進の本質的な意義そのものである。

ゆえに図書館が今後歩む道筋は、10年の歩みの底から突き上げる精神を持続する中にこそ、その原動力を求める以外にない。何故なら過去は現在に影響を与え、未来といえどもすでに現在の瞬間の堆積なのだから。

「歴史に対する問いかけは、究極において、いわば自分自身を賭けるという厳粛な行為を行うことになる」⁽²⁾と指摘されるように、既に実施された記念事業は過去の出来事との会話というより、それはこの図書館の未来を背負うという自覚との対峙であり、21世紀への創造的応戦の始まりなのである。

この小稿では、1995（平成7）年度に実施された数々の10周年の記念事業への取組み状況を記録にとどめることにより、21世紀へ向かうこの図書館の歩みに対する一筋の道標になればと思う次第である。

尚、各章とも当時の事業担当による分担執筆を試みたことをあらかじめお断りしておく。
(遠)

2. 記念事業の推進にあたって

記念事業の素案がほぼ固まったのは、1994（平成6）年の7月であった。その後、事業の実施計画書を作成し、企画課との調整をへて財政当局との予算折衝が始まった。事業推進の決定と最終的に予算がついたのが、12月。予算総額は、4,890,000円であった。

事業の骨格と予算が獲得されたとはいえ、事業推進に当たっての課題と各事業のイメージ化という困難な作業が要請されていた。それは内外の合意をどのように形成し、市民参加をどのように得ていくかという課題とともに、記念事業に対する思いをどのようなイメージとして構想するのかという課題であった。

そのためにも、早急に内部の推進体制を作り、意見の擦り合わせをする必要があった。その作業が本格化したのは、1995（平成7）年の2月頃。その後は文字どおりイメージとの格闘であり、試行錯誤を繰り返しながら手作りの突貫工事を強いるようなものであったが、それにかかる職員の熱意こそが、事業推進の最大の原動力であった。

以上の取組みの経過から、各記念事業の体系化を試みると以下の通りになる。

(1) 合意形成の事業等

- ①10周年ポスターの制作
- ②作文・シンボルマークコンクールポスターの制作
- ③10周年記念、大看板の設置
- ④10周年記念誌の発行
- ⑤10周年記念壁面の制作
- ⑥10周年記念展示会の開催

(2) 図書館利用の促進を図る事業

- ①10周年記念品の作成・配付

(3) 図書館運営に対する理解・協力を図る事業

- ①作文・シンボルマークの公募
- ②10周年記念講演の実施
- ③10周年記念式典・祝賀会の実施

(4) これまで図書館運営を追体験するとともに今後の課題をつかみ、今後の指針とするための事業

- ①市民フォーラムの実施

(5) 未来の図書館事業のための先導的事业

- ①図書館ネットワークの事業化

となる。

記念事業をこのように分け、その実施状況についての主な事業を時系列順に報告していきたい。
(遠)

3. 作文・シンボルマークコンクールについて

10周年記念事業の先陣をきって、当事業は実施された。当初は市内小・中学生を対象とした「作文・イラストコンクール」を予定していたが、市民参加により事業そのものの裾野を広げることと、恒久利用可能なものをとという観点から、一般市民もふくめた「作文・シンボルマーク」公募への変更となった。

作文は「図書館や本をテーマとしたもの」、シンボルマークは「明るく・楽しく・親しみやすい未来の図書館をイメージ化したもの」、という当館からの要望に基づき、5月中旬から8月初旬までの募集期間が設定され、県内各紙や市広報紙・ポスターにて広報された。

当初の出足がにぶかったものの、結果的に市内外、遠くは石垣市より作文26点、シンボルマーク120点がよせられた。どの作品にも応募者各人の図書館に対する思いがあふれ、審査は困難を究めたが、厳選なる審査の結果入賞作品は次のようになった。

〈作文〉

小・中・高校生の部

最優秀賞『読書が創りえるもの』

優秀賞 『ぼくととしょまる』

一般の部

最優秀賞『図書館のある街に住む娘へ』

優秀賞 『図書館と私』

〈シンボルマーク〉

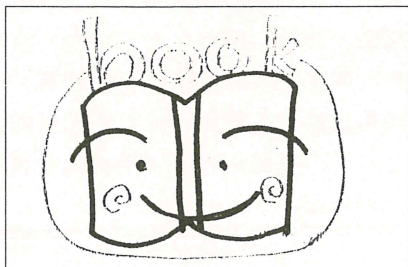
最優秀賞 2点

美術館 とけい
¥5,000 ~ ¥10,000



「うらそえ」の「う」と、「てだこ」
の太陽をイメージ

※シンボルマークとして使用



愛称「ぶっくまん」

※マスコットとして使用

最優秀賞の作文は2点とも10周年記念誌⁽³⁾に掲載。上記シンボルマーク2点は、1995（平成7）年10月15日より正式使用されている。

（伊良・森）

4. 記念展示・壁画作成について

「市民が支える図書館のあゆみ展」を統一テーマに、7月16日から10月29日までを4期にわけて、手作りのパネルを中心とした記念展示が図書館エントランスホールにて開催さ

れた。

第1期は、「図書館よひらけ」というテーマで、図書館構想から建築、開館風景までの様子を当時の写真を中心に紹介した。「図書館と同じ日に生まれたお友だち」ということで、利用者である2人の小学生に展示会オープンセレモニーのテープカットをしてもらった。その際朗読されたそれぞれの、「ぼくととしょかん」の作文は、心暖まるものであった。



記念展示会オープニング7月16日

第2期は、「ステーションから夢をのせて」と題してBM（移動図書館）の構想から稼働までの様子を中心に、図書館のサークル活動、障害者サービス等次々と動き始めた諸活動について紹介した。主として運行7年目を迎える『としょまる（当市の移動図書館名）』の歩みに重点を置き、各ステーションの紹介をするとともに、実際に利用している方々からの生の声をよせていただいた。

第3期は、「夢がふくらむ知識の空間」をテーマに、当館定例の行事である読書週間の風景や、利用者から受けたレファレンス（質問事項）、図書館での講演会等を年度でまとめ、更にその年の全国のベストセラーと、当館のベストリーダーをあわせて紹介した。各年度で話題となった本を思いおこすとともに、図書館の本棚が市民の本棚として根付いてきていることを感じさせるものとなった。10年という年月の中で“浦添市立図書館の本の森”

は着実に育っている。

第4期は、「Library is growing」（図書館は成長する）⁽⁴⁾と題し、第1期から第3期までの展示ダイジェスト及び、作文・シンボルマークコンクールの応募作品を全点紹介した。約3カ月間に至る展示会のしめくくりとして、“10年の歩みと今後の発展を願う”ものとした。100点を越すシンボルマークは、本格的なものから色使いの鮮やかなもの、夢あふれるデザインのものなど多種多様な作品があり、展示会に華を添えた。

この展示会は長期間にわたる大掛かりな取り組みとなり、職員の苦労も多かった。しかし、稚拙ではあるが、想いを伝える内容であったのではないかと自負している。

またこのほかに、「展示活動にも市民参加を」ということで企画されたのが、市内の2工業高校（浦添工業・那覇工業）の生徒による壁画の作成であった。作品の内容については、“高校生の感性や独創性を大事にしたい”という思いから、製作趣旨を『図書館のイメージなどを強くアピールするもの』と簡単に伝えるにとどめた。学校行事のたてこむ時期で、関係者の負担は大きかったと思うが、縦183cm、横276cmの大作が2点、3ヶ月余で無事完成した。

浦添工業高校の作品はデザイン科の2、3年生6人による“チャンプルランド”。いろいろな物語の主人公たちが今にも飛び出してくような夢のあふれるものとなった。那覇工業高校の作品は、グラフィックアーツ科の3年生8人によって制作された。和紙を使い立体的に表現した独創性なもので、生命の誕生を連想させる構想であり、当館がめざす“成長し続ける図書館”のイメージと一致するものがあつた。

これらの作品は記念式典会場で2日間掲示された後、図書館2階エレベーターホール壁画にそれぞれ設置された。両校ともボランティアという形ではあつたが、快く制作していた

だいた。次代を担う高校生の芸術性やパワーに感心するとともにそのご労苦に対し、この場をかり、深く感謝したい。（米）

5. 市民フォーラムについて

「市民フォーラムinうらそえーその歩みとゆめ21ー」が、1995（平成7）年10月14日（土）午後3時、近接の浦添市社会福祉センターで開催された。

このフォーラムは、これまでの図書館活動の歩みを振り返りながら、今後、浦添市立図書館のめざすべき方向性を市民及び図書館関係者と共に考える場として企画された。

多面的な意見をいただくために、パネリストを次の方々をお願いした。図書館サービスのあり方、図書館職員の資質等についての助言者として、埼玉県より大澤正雄氏（鶴ヶ島市立図書館準備室長当時）、市民代表の一人として利用者でもある長堂英吉氏（作家）、図書館構想、開館に関わった立場から宮城篤正氏（初代館長、現浦添市美術館館長）、図書館建設委員長から開館、そして図書館協議会会長としての立場から石川清治氏（琉球大学教授）の各氏。

コーディネーターは高良倉吉氏。（第2代館長、現琉球大学教授）

市民フォーラムのテーマは3つあつた。

1点目は、浦添市立図書館10年の歩みを振り返る。2点目は図書館の現状、問題点、抱えている課題などを検討する。そして3点目はこれからの図書館、浦添市立図書館の方向性について、それぞれパネラーの方々とフロアの参加者からの発言を待つことにした。

初めに、開館に携わった宮城氏、石川氏に加え、当時の職員の一人であつた名護正輝氏から図書館への変わらぬ熱い思いが語られた。

「文化都市の拠点として開館した浦添市立図書館は、県内初のコンピューター導入をした。そのおかげで“迅速かつ正確に資料提供”が

でき、他の市町村の図書館建設の機運を高める効果をあげた。図書館職員の情熱と浦添市民が、実績のある図書館に育ててくれたのではなかろうか。」と。

次に、図書館側から現状報告がされた。年々利用者が増加している。1994（平成6）年度の利用者登録は約4.8万人で市民の半数の登録率に達している。貸出冊数は約32万冊。市民1人当たり3.3冊を数える。しかし、図書館購入費が年々減少。開館当初7,800万円あった予算が、平成7年度は全館で1,000万円の状況である。職員体制については、正規職員10人、嘱託職員6人、臨時職員12人の計28人。全職員に占める正規職員の比率の低さ等があげられた。これに対し、西原廣美教育部長から浦添市の事業や財政状況の報告がなされた。

また、大澤氏は年齢別の利用状況から「大きな特徴として30代、40代の利用が35.6%を占めている。これは目まぐるしく変わる社会のなかで、図書館が生涯学習の場として活用されているため。」と分析した。また、「読みたい本が大体揃っている」と長堂氏。

その他フロアから「（当館と）学校図書館と連携がとれるようになり、教員、生徒に喜ばれている。」「制度として正規職員司書の配置を」と学校図書館に勤務する饒平名洋子氏は提言。「サークルの人材育成についてどうすればよいか」とは、親子読書サークル代表、石川絹江氏。作文コンクールの最優秀賞受賞者の仲西正子氏は図書館から比較的遠い勢理客地域に住む立場からも、「分館設置」を切望した。

いろいろな問題点、課題などが浮き彫りになるなか、これらの現状を踏まえながら、第3のテーマである今後の図書館の方向性が壇上、フロアと一体になり論議された。

「人的なものはまだまだ問題を抱えている」という宮城氏と同様に、高良氏は「臨時職員は2年間程度で、制度上辞めざるをえない。

腰を据えて仕事ができる環境が最大の課題」と職員体制の問題を指摘。

大澤氏も専門の立場から、「図書館の3要素（施設）、（人）、（資料）」⁽⁵⁾のなかの「人に最も投資すべきである。」と強調。正規職員の配置などによるスタッフの強化を要望した。

石川清治氏は、図書館と美術館など公共施設との有機的に統合した形の連携の重要性を強調。

長堂氏もまた、分館設置は急務であるとし、所蔵目録の完備と作家の文学活動の活性化の必要性を語った。

名護氏は在住の具志川市の例をひもとき、貸出点数の検討、高齢者サービス、障害者サービスなど諸サービスの再検討を示唆した。

「これからは図書館を拠点として、他関係機関とネットワークをつくり、地域社会の質を高めていくことが問われる時代。社会を作っている一人一人がもっと豊かになってほしい。その市民を育てる拠点が当館であるという形にすべきだ」と高良氏はまとめた。

こうして市民フォーラムは図書館の諸問題・課題・今後のあり方などを含みつつ、幕を閉じた。⁽⁶⁾

提案された事柄を反芻し、これからの図書館の方向性、生涯学習における図書館の役割など再認識の上、具体的に解決策を提示していきたいものである。（伊）



市民フォーラムの様子

6. 記念講演について

市民フォーラムの終了後、引き続き同会場にて記念講演が開催された。講演者は北海道在住の作家、小檜山博（こひやま はく）氏。小檜山氏は『光る女』で、第11回泉鏡花文学賞を受賞。人間の精神風土を粘着性の強い文体で書きつづるという作風が広く知られている。今回のテーマは「文学と現実のはざままで〜『さりげなく北の街』から〜」⁽⁷⁾と題して講演がもたれた。

小檜山氏は「沖縄へ来るのは数年ぶり。県内紙に1年程度連載エッセーを書いていたことがあり、沖縄は心情的に大変好きだ。」と言う。また、文学について、「今後、小説のできる素地は関東にはもうあり得ない。本当の文学が生まれるのは沖縄、関西、北海道からだ。」と話し、「沖縄がアメリカに接収されて30年近い年月があった。そのことが人間の意識的にも文学的にも、解決されていない。関西は部落の問題。これも文学的に手が付けられていない。北海道はもともと蝦夷地であり、日本に併合されてまだ120年しかたっていない。そこの開拓の問題と北海道が植民地化された問題が解決されていない。各々の地から作家はでてはいるが、そこに住む人の心がまだ解決されていないということもあり、沖縄と関西と北海道にしか文学的な要素は残っていないだろう。」との自論を熱く語った。

更に、「現代文学に欠けているものは何か」というと、たったひとつ、精神風土である。」「人間の心の中にあるべきものがなくなっているため、人間関係の崩壊にまで到っている。」と、小檜山氏自身の体験をふまえて語り、「文学というのは、結局テーマは人間であり、人と人との関係を綴ることである。今の社会は金さえあれば一人で生きられる、また、自分さえよければいいという考え方で乱れている。その社会の中で、文学において

も社会を反映させたものを描き、人と人との関係を回復させる方向にもっていきたい。」と、力強く言葉を結んだ。⁽⁸⁾

記念講演にふさわしく、心に訴えかける感動的な内容だった。

余談であるが、小檜山氏は懇談の席で色紙に次のように書き記し、浦添市民に贈って下さった。

沖縄よ 日本を背負う沖縄よ、その重さは
日本の重さだ

浦添へきて飲む酒 ふるさとの味
(友)

7. 図書館10周年記念式典・祝賀会

日の改まった10月15日（日）、浦添市社会福祉センターを会場に、記念式典・祝賀会が開催された。

県内図書館関係者や市民、市長、市議をはじめ、市内婦人会・サークル等各団体の総勢200人余で当館10周年の祝宴が催された。

式典では厳粛ななか、当館の歩みがあらためて確認され、多方面から過分な祝辞を賜った。一転して祝賀会は、リラックスした楽しい語らいの場となり、その中でも当館の今後に対する期待の声が寄せられた。

10周年はひとつの節目である。しかし、ゴールではない。祝賀会の舞台アトラクションで、職員による八重山舞踊を披露した際に、館内展示に使用したテーマパネル（前出）を掲げ、当館の決意表明にかえた。「図書館よひらけ」、「ステーションから夢をのせて」、「夢がふくらむ知識の空間」、「Library is growing」。

どれをとっても、けっして忘れてはならない大切な言葉であり、当館にとって永遠の指針といえる。
(崎)

8. 記念誌編集について

記念誌の編集及び発行は、沖縄学研究室の担当となった。「目で見えてわかりやすい記念誌」と目指して写真を多用し、活字はできるだけ省き、当館のイメージや特徴を伝えたいというコンセプトがあった。

目次立て及び構成の検討を重ねた結果、次のように決定されてた。

1. グラビア
2. ご挨拶・祝辞
3. 歴代館長の思い
4. としょかんの10年－浦添市立図書館10年のあゆみ
5. 10周年記念公募作文とシンボルマーク
6. 目で見える図書館風景
7. 「私の一冊」－1993年秋の読書週間企画展より
8. 図書館刊行物の紹介
9. 図書館の運営体制図、分掌事務

「としょかんの10年」は、記念誌として資料的な意味をもたせることを目的としている。その年表部分は、過去の館報と業務日誌から事項を抜粋し、写真は日常行事の膨大なアルバムの中から年表と照らし合わせながら選択。ここでは、図書館の年毎の中身を明確に、かつ各係の行事を偏りなく載せるよう留意した。

「目で見える図書館風景」の項では、施設案内を意図し、各コーナーを紹介写真で飾った。編集スタッフで新たに写真撮りを行い、新鮮なアングルから20枚余りを選択、掲載した。

表紙の赤瓦は、当時のイメージを象徴するものとして取り上げられ、瓦上の数カ所の緑と苔で10年という歴史を表した。

10月15日式典当時、当記念誌が配付され、好評を得た。

このような編集作業の結果、今後への反省

として、日頃から業務日誌や記録、写真アルバムの整理などといった、事務用資料管理の大切さを痛感した。

今後も、今回の反省を活かし、よりよい記念誌にしたいものである。（我）

9. 図書館10周年記念手提げバック

開館10周年を記念して、益々の利用促進をという趣旨のもと、市民に記念品として“記念手提げバック”の配付を企画した。

デザインは、今回のシンボルマークで決定した当館のマスコット、“ぶつくまん”を正面に大きく配したもので、沖縄の青い海と空を思わせる青地に白ぬきの爽やかなものになっている。

市民に平等に配付できるように考慮して、配付期日・配付方法等を事前に『広報うらそえ』及び「館内掲示」等で知らせ、予算に限りがあるので先着順で、各利用世帯につき一枚ずつ配付することとなった。また、市内各小・中学校の図書館と、BM運行先（23ステーション）での配付用についても一定枚数用意した。これを除き、約300枚が館内配付用となり、2月17日（土）、18日（日）の2日間で各150枚ずつの配付となった。（尚、BM割当分に関しては、2月運行の各ステーションでそれぞれ配付した。）

事前の広報が奏功したのか、利用者からの反響は大きく、カウンターと別に設置された受付も、列を作るほど好評であった。（崎）

10. 図書館ネットワーク事業

10周年記念事業の中でも、特に将来に向けた先導的事业として構想されたのが、図書館ネットワーク事業であった。

市立図書館と市内の小・中学校をコンピュータでネットワークすることにより、当館の蔵書を即時に検索等ができるシステム化を通じ

て、蔵書の有効活用を促進し、児童・生徒の学習・読書意欲の向上に資することが当事業の目標であり、ネットワーク形成の目的であるリソース・シェアリング（資源の共有）と資源の活用を意図している。

当初の計画は、1995（平成7）年度から市内の小・中学校の全16校（小学校11校、中学校5校）に年次的にシステムの設置をし、最終的には1998（平成10）年度までに完了を目途に計画された。しかし、諸般の事情により、当面、1995（平成7）年度に2校（神森小学校、浦西中学校）、1996（平成8）年度に4校（仲西、港川、浦添、神森中学校）を取り敢えず設置し、残り10校については、今後既存システムの運用効果の推移を踏まえ設置を推進することとなった。

このシステム導入の契機として、図書館協議会における図書館分館構想についての答申があげられる。開館以来の懸案になっている図書館サービスの地域化という問題（分館構想）であるが、財源等の諸問題によって、この構想が引き続き課題となっている。また、本市においては、学校図書館へのコンピュータ導入整備事業が進められている（1996（平成8）年度中に完了予定）。比較的早く導入されたある意味での自己完結型の教育機器整備は、ネットワーク事業の合意形成の下地になっていよう。さらに、1995（平成7）年に開始された当館による図書館集配サービス事業の展開は、ネットワーク事業を推進するための物流手段の確保としての役割を担うという結果をもたらすことにもなった。

ネットワークの形成の要素として「①合意形成、②ネットワークの運営組織、③システム資源、④協力事業を円滑にするための制度・機構」⁽⁹⁾などの要因があげられている。またなによりも、「態勢の決定、諸経費の負担体制、サービスの形態」⁽¹⁰⁾をどうするかという条件整備の必要性も指摘されているが、先にも触れたように、図書館分館構想が物理的な

諸条件によって阻まれている状況であればなおさら、「構想の決定」と「合意形成」という現実的な知恵を駆使して対応していくことが求められているのではないだろうか。また、このある意味で開放型であるネットワーク事業導入には先の要因が伏線となっている。

「図書館の本来の使命は、資料の記録・保存」⁽¹¹⁾から知る権利の保障と情報の開放にあるといえる。それはある意味で、公立図書館にとって、情報化への進展に伴って、多様な情報を取り入れ、活用することのできる条件整備（市民と情報を結びつけるための手段の確保）をいかに図るかという課題を突き付けていよう。

この事業の本質的意義として、「何にもましてそれが自発性を発揮し、自分が自分であることを可能にする環境を提供する」⁽¹²⁾と指摘されるような、市民の自立を保障するための手段の一つとして考えられるのである。

先導的なのがゆえに、システムのあり方、そのシステムの現実的な運用体制や利用の促進は、困難な作業を伴うことが当初から予想されることではあったが、県内初の試みの評価は、今後の実践次第であり、努力を傾注していきたい。

今後の課題として、当面、学校での活用限定したものとしているが、「子どもが、コンピュータを利用する際に真理の探究それ自体に真理の所有と同じ価値があることに気づかせる」⁽¹³⁾という教育的観点との現場での対応などを含め、あくまでも手段としてのこの事業の利用促進をどう図るのか。中長期の課題としては、他の機関や一般市民への開放があげられる。またさらに、町づくりの中での位置付けなどの整合性をいかに図るかという課題も引き続き抱えている。

「社会的な記憶を生み出し、貯え、利用する方法を根本的に変えることは、人類の運命の根源に触れることになる」⁽¹⁴⁾と指摘されるように、情報へのアクセスとその活用等が、

ますます進化をとげつつある昨今、このネットワーク事業は、その意味でまだ端緒にいたばかりである。(遠)

11. おわりに

前章までが、図書館ネットワークを除き、1995年(平成7)年度中に終了した当館10周年記念事業の全てである。

『10周年記念誌』に加え、この小稿が当事業の輪郭及びメッセージ性を明らかにし、他館の事業計画や市民の当館理解の一助となれば幸いである。

ある青年の話をする。向学心に燃え、常日頃から人の役に立ちたいと考えていた彼が、たまたま訪ねた図書館の有様に感銘を受ける。書架の木肌のぬくもり、新しい図書の香り、絶え間ない利用者、その前で笑みを失することのない洗練された職員の姿。彼は、「自分の住む町にもこんな図書館を」と決意し、木を一本一本確実に植え、わき目もふらず美しい図書館づくりに勤しむ。

青年の図書館が市民に喜んで受け入れられたある日、彼は原点である場所へと戻り驚愕する。「憧憬の的であったあの図書館はどこへ行ったのか。」とひと気もなく、うっすらと埃のつもる書架の前に立ちつくすのであった。

無論、これはフィクションである。

が、しかし歌を忘れたカナリアはどうなるのであったか。

初心を忘れた図書館は、また。

市民フォーラムにて繰り返された、職員問題を始めとする諸問題は、分館建設や資料費の減少を含めて日本の図書館界の抱える悩みそのものでもある⁽¹⁵⁾。どの問題にも早速な対応が望まれるが、特に、「資格はなくとも善意のインテリなら誰でもやれるなどと近頃言

われるが、間違いである。(中略)司書の仕事は、その業務に専従する人の、長い蓄積が必要なのであって、やはり専門職の勤続者が必要不可欠、この点を軽視してはいけない。」⁽¹⁶⁾と指摘される有資格者及び非常勤問題については尚一層の努力を要する。

また、その必要性が叫ばれつつ県都那覇市に定着を見るのみの分館建設や、国内の出版点数の増加⁽¹⁷⁾に反比例し、減少の一途を辿る資料購入費についても、より積極的な策を講じなければならない。

重ねて、日常の些末かの様に見えながら実は本質的な、山積する事柄にも、確実に解決の糸口を見い出したいものである。

よりよい図書館サービスをめざさんとすれば、10周年はやはり寿ぎの場である以上に、厳然たる自己評価の好機であったわけだ。

時は移り、新年度からの図書館等建設補助金打ち切りが新聞紙上を賑わす昨今(1996・平成8年12月末現在)だが⁽¹⁸⁾、53市町村中36の図書館未設置町村を抱え、情報の地域隔差のある当県にあって⁽¹⁹⁾今後の町村図書館設置の索引役・相談役としても当館が果たす役割は大ききろう。

内も外も充実してこそ、である。

当市とも縁の深い伊波普猷に次の言がある。

「(前略)図書館は〔知〕識の燈台です。趣味の源泉です。老若男女を問わず何人も自分に適する、また自分の好きな書物を自由に読むことが出来るというのは重宝至極な文明の機関ではありませぬか。

学校教育を受けることの出来〔ぬ〕人でも此処にすれば立派な師友が求められます。学生諸君は参考書をここで繙き、教科書以外の新知識を吸収することができます。専門家は疑義を此処で解決して、益々自家の素養を深くすることが出来ます。日々の勤務に身心疲労した方は出来ます。日々の勤務に身心疲労した方は暇な折、ここに来て好きな本でも読

むと深い慰藉を得て、更に努力する元気がでます。(中略)」

「閲覧料もいりませぬから、散歩の序にでもお寄りなさい。読書□〔に〕倦むだ時は松風涼しい館前のベンチに腰をかけて眺望を楽しむのも諸君の御勝手ですから。〔傍点等筆者〕」²⁰⁾

これは沖縄県立沖縄図書館開館の折り、新聞紙上で市民に対し利用を呼びかけたものだが、平易な文章の中に伊波の近代的な図書館思想が脈打ち、そこに私たちの原点と標(しるべ)をも見て取れる。

伊波の時代にも、来たるべき電子メディアの時代にも不変であるはずの、「図書館の役割は文献へのアクセスを容易にすることであり、図書館の使命は奉仕対象者の活動を支援することにある」²¹⁾という、基本原則を忘れてはならない。

このような先見性を持ちつつも、決して奇をてらわず²²⁾、堅実な運営と加齢による適正な蓄積こそが市民の誇りとなり、そして後年、更なる記念の日には、「利用され、愛され、要求され続けている」という“最大の讃辞であり祝辞”が頂戴できればこれ以上の喜びはない。(森)

〔註・参考文献〕

- (1)『歴史をみる眼』堀米庸三著
日本放送出版協会 1964年 P179
- (2)『ゲーテとの対話・上』
エッカーマン著 神保光太郎訳
角川書店 1965年 P44
- (3)『浦添市立図書館10周年記念誌』
浦添市立図書館 1995年 P36-40
- (4)『図書館学の五法則』より
『図書館用語辞典』図書館問題研究会編
角川書店 1982年 P540
- (5)『図書館ハンドブック 第5版』
日本図書館協会 1990年 P3
- (6)『市民フォーラム in うらそえーその歩み

とゆめ21ー〔筆耕資料〕

浦添市立図書館編 1996年

- (7)『光る女』小檜山博著 集英社 1983年
『現代日本 朝日人物辞典』
朝日新聞者 1990年 P683
『さりげなく北の街』小檜山博著
河出書房新社 1994年
- (8)『記念講演「さりげなく北の街～から」
〔筆耕資料〕』浦添市立図書館編 1996年
- (9)『相互協力事業を推進するために』
『図書館雑誌』(1989年 vol 83 No4)
牛崎進 P180
- (10)「『ネットワーク』を整理する」
『図書館雑誌』(1989年 vol 83 No4)
柴田正美 P175
- (11)『新図書館学概論』椎名六郎著
学芸図書 1973年 P31
- (12)『ネットワーキングへの招待』金子郁容著
中央公論社 1986年 P10
- (13)『コンピューター時代が求める教育』
ハラルド・G・シェーン著 佐藤三郎 矢
野裕俊監訳 東信堂 1989年 P108
- (14)『第三の波』アルビン・トフラー著
鈴木健次〔ほか〕訳 日本放送出版協会
1980年 P255
- (15)「市区町村図書館の課題」『図書館はいま
白書・日本の図書館 1992』
日本図書館協会 1992年 P51-53
- (16)「生涯学習と司書職の専門性」
『社会教育』1993年 2月号
高橋徳太郎 1993年 P4-5
- (17)『出版年鑑 1996 資料・名簿編』
出版ニュース社 1996 P121
- (18)『読売新聞(東京版)』『毎日新聞(東京
版)』1996年12月15日
- (19)『日本の図書館 1995』
日本図書館協会 1995 P324 ほか
- (20)「図書館と趣味智識」
『伊波普猷全集第11巻』平凡社 1976年
P240-241 (「沖縄毎日新聞」1910(明治

43) 年8月4日)

(21)『図書館サービスの再構築－電子メディア
時代へ向けての提言－』

M. K.バックランド著 高川正也、桂啓壮
〔共〕訳 勁草書房 1994年

(22)『目立ちたがり』『図書館を考える』 前
川恒雄著 「公立図書館の管理委託を考え
る」実行委員会 1996年 P99-102

ほか

『10周年記念事業関係事務用資料集（仮称）』

執筆担当：（五十音順）

伊波 民子

伊良波裕子

我謝 薫

崎原 弥佳

遠山 満

友利 幸子

森田 牧子

米盛 恭子

すべてのこどもに読書の喜びを！

—児童サービスの現場から—

浦 添 市 立 図 書 館

奉仕係・児童サービス

1. はじめに

児童サービスが日本で活発に行なわれ始めたのは、70年代であった。『市民の図書館』（1970年発行）によって、公共図書館がそのサービスの在り方を具体的に示したことに前進の大きな因を見ることができよう。すなわち「貸出」「全域サービス」「児童サービス」を、図書館サービスの最重点目標として各公共図書館では実践が活発化したのである。特に、乳幼児から高齢者に至るまで利用できる生涯学習の拠点として、なかでも将来の利用者であるこどものサービスが、成人のそれ以上に大きな比重を持って実践されたのである。

翻って、浦添市立図書館においてはどうかであろうか。1995年に10周年を迎えた当館は、コンピューター導入では県内の先陣を切り、何かと注目を浴びた。県内では図書館の建設ラッシュの様相であるが、当館がかつてその活性化に一石を投じた存在であることは、誰しも認めるところではなかろうか。また1995年2月、市内学校図書館司書との交流の中から、学校への「図書集配サービス」、1996年7月には「図書館ネットワーク」がスタートするなど、その前進は揺るぎないものと確信するところである。

しかしながら、10年を振り返るとき、事業の見直しを迫られることが多々あることに気付く。私たちは、児童サービス担当という立場から課題を確認し、新たな10年に向け児童サービス全般にわたって検証を試みている。

2. 児童サービスの概要

(1) 児童サービスを基本サービスに

開館と共に発行された館報は、これまでの軌跡を知るのに有力な資料のひとつである。

館報に掲載された12項目にわたる館の運営方針の中には、「貸出」「全域サービス」「成人・高齢者・障害者」へのサービスと共に「児童・青少年へのサービス」ということが当館の方針として明確に掲げられている。「市民の図書館」、「児童も一市民として成人と同じようにサービスを受けるべきであることはもちろん、将来の読者は児童期における読書によってつくられる」のであり、「成人における読書普及活動以上に児童に対するサービスを強化しなければ、図書館の未来は暗い」（『市民の図書館』39P）と述べられている。つまり『市民の図書館』で提示されたこのような理念を、一公共図書館として具体化することに使命感を自覚することから当館の歴史が始まっているともいえる。それ以来10年余、こどもたちに図書館の存在を知らせ、本とこどもを出会わせるためのさまざまな試みがなされてきている。「おはなし会」「親子手作り教室」「学校訪問」「一日図書館員」「館内施設見学」「展示会・講演会」など、その詳細は後述の「資料編」にゆずるが、積極的に取り組んできた。現在に至るも、これまでのサービスを継続しながら、ひとつひとつの活動の練り直しなどを行なっているところである。

(2) 児童室のフロアのようにすから

浦添市立図書館は、正面玄関を左手に行く
と一般開架室、右手に児童室が位置する。大人
の空間とは距離をおき、独立した部屋になっ
ている。ここの主人公は0歳から12歳までの
「こども」たちであるが、もちろんこどもを
取り巻く大人たちや、中高生たちの出入りも
活発である。ヤングアダルトコーナーの設置
も県内でいち早く行なわれた当館であるが、
小さなコーナーには椅子やテーブルがないこ
とから、試験前や宿題など調べ学習のときは
よく“児童室が占領”されている。入口を
入るとすぐ左側に「おはなしコーナー」があ
り、大きな白い壁を手作りの壁画が飾って
いる。この空間はブラウジングコーナーが隣
接しているため、こどもたちのにぎやかな声
が響いてしまい、利用者から注意を受けるこ
とも少なくない。「おはなし会」のときなど、
カーテンによって視線を遮っているが、なん
とか音の漏れない方法に変えていけるよう考
慮中である。館内を見渡すと、絵本架や0類
から8類までは低書架になっている。しかし、
郷土児童書、参考図書、9類はぐるりの壁一
面、それも高い位置までぎっしり詰め込ま
れていた。そこで最上段の本を全部抜き取り、
各棚も複本やあまり読まれていない本を整理
し、ゆったりした排架にした。また、手作り
ブックスタンドに本を平置きし、著者表示板
を入れ、本を探しやすいように工夫した。

当館は「一般開架室」「レファレンス室」
「児童室」の3つのカウンターを職員全員の
ローテーションで担当しており、児童サー
ビス担当といっても児童室カウンターの担当
とは限らない。現在は極力児童室の担当にな
るよう考慮してもらい、以前より多い回数で
入れるようになった。各カウンターには「カ
ウンターメモ」を置き、カウンターでの出来
事などを記録し、全職員に伝える努力がなさ
れているところであるが、そこからこども
たちへのサービスに反映させていくことが多々あ

り、担当にとってはとてもありがたい。

児童室では、新刊案内や企画展示なども積
極的に行なっている。こうした取り組みが、
こどもたちはもちろん、まわりの大人たちや
Y.A諸君の目もくぎづけにし、図書館利用
者へ、またY.Aコーナーの利用へとつなげ
ていけたら幸いである。

(3) 児童サービスの実践

イ. 本を選ぶということ

児童サービスを実践するうえで「こどもを
知ること」「こどもの本を知ること」「こど
もと本を結びつける技術を持つこと」は重要
である。「本をえらぶ」と「であわせる」
「てわたす」ことが不可分の関係であると言
えようか。

現在、当館では2係制をとり、資料係、奉
仕係に業務分担が行なわれている。本来サー
ビスや選書など、両者の協力は必要不可欠で
あるにもかかわらず、数年前まで各係間の連
携は現在ほど密接には行なわれていなかった。
たとえば選書については、全体に出版目録の
上での選書が習慣化しており、現物見計らい
は皆無の状態であった。児童書の選書にお
いては、図書館専用取次店から配送され、箱
を開けるまで、奉仕係はもちろん資料担当者
でさえどんな本が納品されるのかわからず、装
丁や内容について粗悪な絵本や児童書が混ざ
っていたことも少なくない。それはなんとも残
念な選書体制であった。

児童サービスの目的は「図書の貸出その他
の活動を通してこどもが成長していくのを助
けていくこと」である。こどもの読書は「身
近な世界や見知らぬ世界を知り、自分や他人
についての理解を深め、よりよく生きようと
する心を育てるのであり、「成長を助けるた
めのひとつの要素」である。そして、なぜ選
ぶのかということについて問われるなら、そ
れは「内にあるあらゆる可能性を持っている
こどもの成長を願うからである」と『子ども

の図書館の運営』の中で選書の重要性について言及している。

図書館員は日常のフロアワークの中で、子どもと関わり、こどもの要求を的確に把握していくことで、本の購入に反映させていくことが必要なのである。そして「児童サービスに関わる者こそが選書をすべき」であるとしている。1995年から当館でも長年の習慣を変え、館内見計らいを実現し、資料、奉仕と店頭への見計らいも定期的に行なうようになった。これは、児童書はもちろん一般書においても、当館の蔵書構成を、全職員一体となった責任のもとに行なっていくための大きな“改革”であった。現在児童書は、1、2週間に一度、選書ミーティングを持ち、厳正な選書を心がけている。しかし行事や他の業務が切迫してくるとミーティングが持たれなかったりと安定しないので、システム化する必要を感じている。予算が厳しい中で、より確かな選書を行なわなければならない。こどもの本を選ぶということは、さまざまに論議もあり悩むところであるが、館の選書基準に沿いながら、お互いの経験を持ち寄り研鑽を重ねる以外にはない。なにより、「こどもを知る」ことでこどもに最良の一冊を出会わせる、より確実な方法になりうるのではないか。「選ぶ目」もその経験の積み重ねの中で培われていくのだらうと思うのである。

こどもにとっての”良い本”とは、

「①楽しく読めるもの

②こどもの成長に有益なもの

・心に何か残すもの

・知識が与えられるもの」

という2つの条件を満たすものだとされている。

ともあれ、図書館員は優れた児童図書を選ぶこと、どの子にも人類の文化史、知的財産を送り継いでいく役割を担っていることを忘れてはならない。その使命感のもとに、日常のこどもとの交流から着実に信頼関係を作り

上げていくことが重要であるといえるだろう。

ロ. 児童サービスの体制

当館の児童サービス担当は、奉仕係の中に1995年から3人体制をとっている。各自他の業務を持ちながらの体制である。他に資料係、BMの担当を含めると児童関係者は5人いることになる。サービスに関する限り、全館協力体制は当然だが、専任として複数体制を採用することは、より広範囲にサービスを広げていくのに有効であるといえるだろう。選書においては、5人の経験や情報を集約活用することが期待できる。しかし、いまだこの5人の連携もベストとは言い難い。ミーティングは常に行なえるようシステム化し、児童サービスにおける理念や行事の取り組み、またはサービスの在り方など、いつでも意見をたたかわせる中からより良いサービスを心がけねばならない。忙しさの中で流されては、サービスすべき地域の全てのこどもたちへ申し訳ないというものである。複数体制という可能性を充分に利用していかなければならない。

1992年当時までは、Y.A・児童サービスを担当する“専任”1人と他の担当2人をサポートとしておいていた。しかし常にひとつのチームとして活動することができないため、対外的活動を行なう場合にはかなり不自由であった。更に、担当司書の多くが臨時職員であるために担当がかなり早いサイクルで変わったりと、記録や資料による積み上げがないこともこの体制に起因するのか。有資格、無資格を含め臨時職員が重要なサービス業務を担当する現状は充分検討されるべきではなかろうか？児童サービスにおいても、こどもの成長の面から長期的に実践に取り組み、実績を積み上げていく点で、担当が短期間で変わっていくことは好ましくないといえるだろう。何故なら、サービスの継続が難しいばかりでなく、そこにこどもとの信頼関係が育ちにくいからである。この問題への対策として、図

書館業務専門嘱託員を置くなど、サービスの向上のための内部努力は行なわれている。『子どもの図書館の運営』は、児童サービス担当が「その役割を充分に果たし、的確に仕事をするためには、それ相当の専門性が要求される」としている。そして、「その本来の役割を果たし、的確に仕事を処理するためには、その養成、研修が非常に重要である」と述べ、その根元には「司書職制度の確立」こそが必要であると説明している。残念ながら、まだ当館にも司書職制度は確立されていない。職員制度の安定に向けて努力は続いているようであるが、行政の壁は厚いということを感じる。それでも現場からは司書職制度確立の要求を訴え続けていく必要があるのではないだろうか。図書館におけるサービスを担当する者として、自己研鑽というまでもない。内部の意識変革によって、県内外の研修への参加の道が、ここ数年積極的に開かれたことは何よりも幸いである。

ハ、「いつでも どこでも だれにでも」

児童サービスといっても、大人へのサービスと基本的には何ら変わるものではない。しかし、こどもの特性を考えると、自ずとその特性に応じたきめの細かいサービスが必要とされることは当然であろう。浦添市立図書館の児童サービスにおいても、その地域性や図書館を取り巻く状況によって、サービスの方法や対応を考えなくてはならない。

当館の児童サービスの内容は、

- ①貸出
- ②カウンターワーク・フロアワーク
- ③レファレンスワーク
- ④お話や読み聞かせ
- ⑤展示・ブックリスト・新刊案内の作成
- ⑥対外的活動

である。①から⑥のどれをとっても、現場に即していきながら、日々生じる課題や悩みとのたたかいである。ここでは、①から⑤まで

の館内的活動に対し、新たに取り組みたいと考えている⑥の対外的活動について述べてみたい。

対外活動において、当館がその中心に考えているのは、市内公立の小中学校である。図書館ネットワーク、学校集配サービス、学校訪問（読書週間や図書館開きなどに学校からの依頼を受けて行なう訪問サービス）などが、主な内容である。

図書館ネットワークと集配サービスに関しては、学校側と密に連携しながら円滑な運用を目指しているが、まだかなりの時間を要する気配である。さらに学校訪問については、現在の学校主導型から図書館主導型へ変えていこうと考えている。というのは、学校からの依頼は年間1、2件と希少であるにもかかわらず、館の業務との兼ね合いから十分な対応が難しい場合がある。そこで、年度始めに学校や保育所にあらかじめアンケートを行ない、学校訪問を年間業務計画の中に組み込み、実施計画を綿密にし、確実に実践できるようにしていきたい。

これと平行して取り組まねばならないことのひとつに「こどものいる場所」を知る活動がある。市内に認可・無認可の保育所、学童保育施設はどれくらいあり、どのくらいのこどもたちがいるのか。細かいデータ把握の元に、私たちができるサービスを考えねばならない。また、病院や養護施設なども視野に入れていきたいと考えている。浦添市にはまだ分館が無く、約10万の市民が公平にサービスを受けられるようになるには、まだまだ整備しなければならない課題が多い。BMが1ヶ月で市内ステーションをくまなく巡回してもなお、市内全域への公平なサービスとは言い難い。それならば、こどもたちがいる場所だけでもこちらから出かけて行き、本の貸出や読み聞かせをしなければならない。こどもたちに図書館の存在を知らせ、おはなしの楽しさや本を読むことの面白さを感じてもらうに

は欠かすことのできないサービスであろう。この点に関して市内の「こどものいる場所」を「出かけていく必要のある場所」とし、また市内全域が図書館のフロアであるという決意で取り組んでいきたい。

3. こどものまわりの大人たちへ

ある地元紙の「声」の欄に「2人のこどもを連れていった図書館で、こどもが泣いて他の利用者にならまれ、いたたまれずに飛び出した」というのがあった。「声」は「利用者の方迷惑をかけてごめんなさい」と結んであった。

当館の平日、それも午前中は利用者もまばらだが、児童室はちょっと違う。育児真っ最中の若い母親や大人たちの出入りが活発である。児童サービス担当として、こどもたちへのサービスと共に考えていきたいのが、周りの大人たちへのサービスである。前述したような若い母親やこどもを囲む人々が、信頼と期待のもとに図書館に足を運んでくれることを考えねばならない。こどもに本を読んでやるなどの日常のサービスを大事にすることで信頼関係を積み上げ、そこから母親や保母や教師へとサービスの輪を広げていく必要を感じている。また、絵本サークルとして館内で活動する人々へ本や資料の提供、または活動しやすい場所の確保など、手助けの方法も見落としてはならない重要なサービスのひとつであろう。現在当館で活動する絵本サークルは、ほとんど全員が乳幼児を連れた若い母親が中心となっている。そのため幼いこどもたちが、生活の中に図書館を自然に受け入れていけるように、相互に協力する中で、こどもの読書環境づくりにも心していきたい。乳児に適した読み聞かせの本の紹介を、いちばん活発な3、4歳のこどもに読んであげる本を、それぞれのこどもに適した本のアドバイスをさりげなくできるように心がけているところ

である。またこの2ヶ年、こどもを取り巻く大人向けに講演や講座などを行ってきたが、参加はあまり芳しくなかった。広報や企画の内容など充分検討していきながら、より積極的に取り組んでいきたいと考えている。

また、これは何も児童室だけとは限らない。カウンターを隔てたこちら側で、気付いているようで気付かないサービスの抜け落ちた部分がありはしないか。それを解決するカギは、日頃の徹底したフロアワークの実践の中に見つけるしかない。「ひとりひとり」の利用者に適したサービスを、心がけていきたい。包容力に知性を包み込んで、「その人」「そのこども」のためにカウンターからフロアへ、フロアからカウンターへ軽やかに動きたいものである。そして、多くの利用者が図書館との良いつきあいを築いていくことを望みたい。

4. まとめとして

こどもや大人たちが、図書館の扉を開いたその時から「本との出会い」のものがたりはすでに始まっている。何万冊と存在する本や資料と、それぞれがどんな会話をかわし、どんな時間を過ごすのかは知りようもないが、彼らは心地よい出会いを望んでいるはずだ。求める本をその手につかむ瞬間を期待しているはずなのである。私たちはその「出会い」を用意する優秀な演出家でなければならない。種々紹介したこれらの活動は、はたして満足できる内容であろうか。活動のひとつひとつは“演出”のための小道具であるが、うまく“演出”できているのだろうか。しかし、目的意識や使命感のもと、“香り高いものがたり”の演出を目指す毎日である。

コンピュータ化が押し寄せる中、学校ネットワークなどサービスの先取りで衆目を引いたが、データの往来だけでなく“心のネットワーク”から図書館がこどもにとっての生涯

の友たりえることを望みたい。一冊の本にこめられた、限りなく広がる世界をこそ求めてもらいたいと思うのである。そのことのためにネットワークもまた活かされるべきであろう。

さまざまに試行錯誤を繰り返しながらも、サービスの方向性を見出しつつあるように思う。児童サービスまたは図書館サービスは、成果を目の前に見ることのできない仕事だと言われる。こどもたちの未来、30年後、50年後に豊かに花開くことを信じて、今をサービスしていきたい。そして、こどもたちと関わることで、私たち図書館員も成長できる機会を持てることを幸せに思う。どんな完璧な機械にも取って変われないもの、「本」と「人」との出会いの“演出家”として、「ひとり」のこどもに誠実にサービスすることから「すべてのこどもの読書の喜び」につながっていくことを願いたい。

〔資料編〕

(1) 一日図書館員

一日図書館員は、今年度10回目を迎えた、児童サービス2大夏休み行事の1つである。このねらいは、こどもたちに実際に図書館の業務を体験してもらうことによって、図書館にもっと親しみを持ってもらおうということにある。今年の一日図書館員の参加者は定員10名であった。昨年、今年と連続で参加したこどももいる。

平成8年度の参加者のスケジュールは、職員と同じく朝の返却・排架作業、書架整理をし、開館前に館内見学と各設備・場所の説明を受けたのち、午前是一般利用者を相手に貸出・返却作業と、児童室おはなしコーナーに飾る壁画のデザイン・作製を行なった。

午後は移動図書館としよまるに乗車した。交替で三ステーションを巡回し、2カ所目のステーションでは、一日図書館員によるおはなし会も行なった。また、平行して本の装備作業も体験してもらった。

こどもたちには少々ハードなスケジュールだったようだが、終了後の感想には、来年も参加したいというこどもが多数おり、現在もよく図書館を利用しているようである。

(2) 人形劇

企画・広報係により、年に2、3度公演している。人形劇団や大学の児童文化研究会などに公演依頼をして行っており、図書館2階の視聴覚室で開催している。

人形劇に対するこどもたちの反応は大きく、毎回100名から多いときには200名ほど集まることもある。頻繁には見るができないだけに、こどもたちにとって魅力のあるものであり、動きのない絵本とはまた違う楽しみがあるようである。

図書館にこどもを近づけるためにも、こういった催しは、欠かせないものといえる。

(3) 講座・展示会

こどもや、こどもを取り巻く大人たちに向けて、講座・展示会を行なっている。

開館当初から行なわれてきた講演会・展示会を以下に挙げる。

年 度	内 容
昭和61年	全国郷土玩具展
62年	紙ひこうきの世界 スライドで見る虫の世界 おもしろい絵の世界 ロボットの世界
63年	手作り教室・絵本展 外国の絵本展 絵に見る子供たちの世界 おもしろい虫の世界 絵本講座
平成1年	手作り絵本展 英語の絵本展
2年	手作り絵本展
3年	手作り絵本展示 浦添市立図書館講座 子どもの本と私 子供の国から大人の国へ(読書週間)
4年	手作り絵本展 手作り絵本ミニ講座 絵本ふれあい講座(全11回)
5年	手作り布の絵本展 手作り民謡の絵本展 〃 子育てと手作りの絵本 (布の絵本作り) 子育ての中の絵本 私の中の絵本体験
6年	七夕祭り 夏休み親子手作り教室 アメリカンスクールの子供たち 現代児童文学と宮沢賢治 手作りクリスマスリース
7年	せんそうってなんだろう 「つるちゃん」 絵本の読み聞かせ ほか 親子手作り紙しばい教室

(4) 映画会

映画会は、基本的に日曜日の午後に行なっている。児童向けだけで月に1、2回上映しており、こどもたちに人気がある。

〔開館当初からの児童向け映画会集計〕

年 度	回 数	人 数 (延べ)	平均 (人)
昭和60	14	661	47.2
61	12	1224	102
62	17(5)	2010 (935)	118.2
63	20(6)	1513	75.7
平成1	17(7)	2107 (580)	123.9
2	19(7)	2095 (950)	110.2
3	21(9)	2696 (1719)	128.4
4	19(8)	2108 (1143)	110.9
5	17(9)	1777 (1065)	104.5
6	21(7)	1982 (706)	90.1
7	13(4)	1181 (329)	90.8

() 内の数字は、夏休みおたのしみ映画会の数字
(平均は小数点第2位を四捨五入)

(5) 親子手作り教室

一日図書館員と並び、大変人気のある、夏休みの特別行事である。夏休み前から参加者を募集し、当日は講師を招いて、職員はその手伝いやサポートに回る。

この行事が企画された理由は、平成3年度の利用状況調査がきっかけであった。

平成3年度において行なった開館後6年間の利用状況分析で、児童サービスに関連して次のような特徴が見つかった。①幼児に比べて小学生の利用が低下している。②中・高校生の利用が芳しくない。③それに伴って児童室においても、利用率が年々低下している。以上の点から、講座講演会等の定例化及び内容を多様化し、児童サービスを強化するといっ

た奉仕計画が設定された。そのひとつとして一番初めの手作り教室は、平成4年5月24日に行なわれた手作り絵本ミニ講習であった。その後の手作り教室については、前述の資料「講座・展示会」の項を参照されたい。

この手作り教室のねらいは、親子で図書館に親しみを持ってもらうということにあり、毎年行なっている。最近では、利用者の間でも浸透してきている。

(6) 学校集配サービス

このサービスは貸出、返却された資料を委託業者に配送してもらうものである。学校図書館に所蔵していない場合や資料数が少ない場合に、市立図書館の資料を提供している。その場合、学校司書からの電話やFAXで資料検索を行ない、市立図書館に所蔵していれば貸出となる。しかし、ここまでの作業がスムーズに行なわれても、学校司書はひとりでその運営にあたっているため、市立図書館まで資料を取りに来ることができない場合が多くある。以前は当館の職員が各学校まで届けるケースもあったが、それでは両者とも時間的、物理的に制約があった。

その問題を解消するとともに、児童、生徒及び教師の学習または読書啓発等を促進することを目的とし、開館10周年記念事業の一環として、平成7年2月にスタートした。これは学校司書研修会からの要望もあつてのことである。

初年度は利用件数が年間27件だったのに対し、今年度は12月現在で約50件に増えている。これは図書館ネットワークの件数に比例しての増加であり、ネットワークが稼動していない学校の利用は少ない。今後の課題として、学校全体としての利用が充実していないため、これについて検討していく必要がある。

レファレンスの内容をいくつか紹介すると、「ハトが飛び立っている写真・絵が掲載されている資料」、「空手に関する資料」、「論

文の書き方に関する資料」などである。

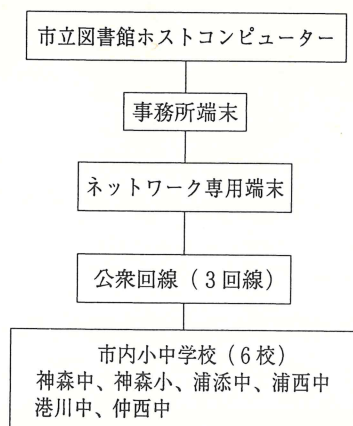
(7) 図書館ネットワーク

平成7年度に迎えた10周年に伴う記念事業として、4年計画で現在も引き続き実施されている。

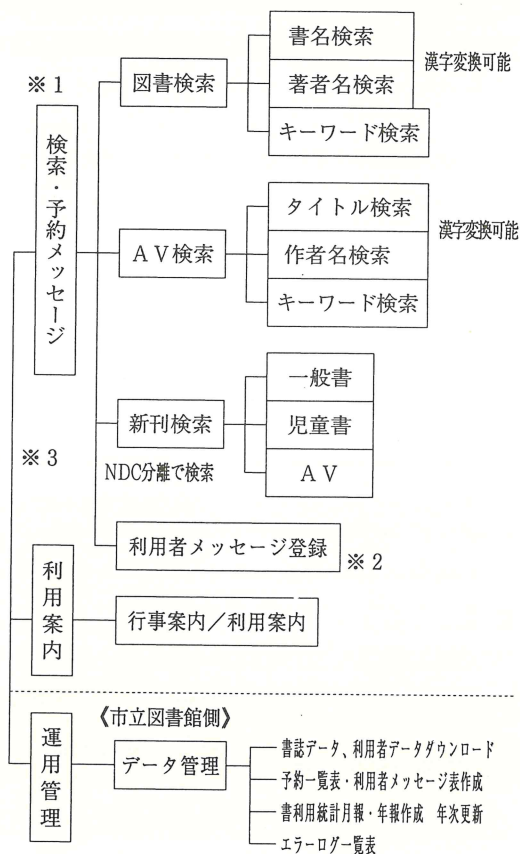
『図書館／情報ネットワーク論』のなかで、「図書館のネットワーク化とは、コンピューターと通信技術の進歩によって初めて可能になったものではない。図書館では、はるか昔から、その時代に利用可能な技術の制約の中で互いに協力することによって、情報・資料の入手の効率化、重複努力の軽減を目的とする活動が行なわれてきた。」と記されており、ネットワーク化の利点として7項目を挙げ、その中で「限られた資料を有効に利用することができる」「利用可能な資源を、例えば相互貸借などで拡大することにより、サービスの向上を図ることができる」としている。児童サービスとしては、これらをふまえ、図書館の本を学校にいながらにして検索でき、学校図書館だけでは充分に対応できないこともたちの要求に応えること（サービスの拡大、全域サービス）、そして、閉架書庫の複本等の資料を有効に活用し、提供していきたい。

このネットワークシステムは、図書館側に設置したネットワーク用パソコンと、同じく学校側に設置したパソコンとの間を電話回線で通信し、市立図書館の資料を検索・予約することができるものになっている。現在は画面が立ち上がるまでは学校司書が管理しているが、随時、生徒に向けての利用も始まっている。

最近では、利用の面でも安定している。平成8年11月分月報を例として出すと、総検案件数は179件、書名検索は118件、キーワード検索は37件、著者検索は24件となっている。今後も各学校図書館司書とミーティング等を持ち、改善すべき点や要望を検討し、充分稼動するべく力を入れている。



〈学校側〉



- ※1 現在1回の検索で1冊の本しか予約できないため、まとめて予約できるようなシステムにしてほしいという要望が出ている。
- ※2 今後のリクエスト受付画面としても利用していく予定。
- ※3 機動時に、他のメニューもたくさん出てくるため、すぐにネットワーク画面にしてほしいという声もある。

(8) おはなし会

こどもと本を結びつける。これが児童奉仕活動の大きな目的であり、その方法のひとつとして「おはなし会」がある。

日常のカウンター業務だけでは、図書館を利用しているこどもたちとの会話や交流が少ない。そうしたなかで、読書の楽しみ、喜びをこどもたちにどう伝えていくか、どういったコミュニケーションが必要となるかを考えると、おはなし会がどれだけ重要かがわかってくる。また、おはなしを読み聞かせることによって、言葉だけでは十分に物語を味わうことのできない幼いこどもたちに、目（絵）と耳（言葉）の両方からその楽しさを伝え、本を読む喜びに結びつけることがねらいである。

こどもにとって小さなときから本に親しみ、読書の楽しさや喜びを知ることは、とても幸せなことである。私たち児童サービス員が、良い本をこどもたちに手渡していくためには、不斷の努力と研修はかせせない。読み聞かせる絵本の選定という過程で、これまで以上に多くの本を著書を知っておく必要がある。たくさんの絵本を読んでいくことで絵本についての知識を深め、児童サービスとしての力を貯えていかなければならない。

① 職員による「おはなし会」

当館でおはなし会が行なわれるようになったのは、開館した昭和60年度の12月からである。毎月一度、日曜日に行なわれるもので、職員が全員で行なっている。おはなし会の内容は、絵本の読み聞かせやパネルシアター、折り紙など導入の部分から成り立っている。参加人数は月平均20～40名ほどである。導入では、季節にあわせて歌を歌ったり、なぞなぞやクイズを出したりして、集中力の乏しいこどもたちがより楽しく過ごせるようにしている。

②「おはなしのへや」

おはなしのへやは平成3年度から毎月第二木曜日に行なっている。当館2階の視聴覚室において、4歳以上のこどもを対象とし、古謝恵さん、小林恵子さんが語り手となって行なっている。初年度は開始時刻を午後3時30分からとしていたが、次年度からは午後4時30分として現在に至っている。内容は、絵本の読み聞かせ、語り聞かせ、指遊び等。おはなしの始まりのときにろうそくを灯し、終わりにその月の誕生日のこどもに代表でろうそくを吹き消してもらう。これを楽しみにしてくるこどももいるが、絵本の読み聞かせや語り聞かせのおもしろさに、毎月こどもたちが集まってくる。

参加者数が下降気味だが、広報・宣伝等に力を入れているところである。

年 度	回数	人数(人)	平 均
平成3	11	382	34.7
4	10	224	22.4
5	12	206	17.2
6	11	207	18.8
7	12	232	19.3

(平均は小数点第2位を四捨五入)

③「空とぶじゅうたん」

児童サービス担当が主催するおはなし会で、フロアワークの一環としてとして日常的に行なっている。今年度10月より始まったこのおはなし会「空とぶじゅうたん」は、毎週金曜日午後4時30分より約30分間、児童室のおはなしコーナーで、絵本の読み聞かせを主体として三人の児童サービス担当者で行なっている。しかし、まだこどもたちに定着していないのが現実で、広報活動を密に行なうことが大切である。また、状況によっては開催曜日、時間などの調整も必要であると思われる。

(9) 館外サービス

現在、当館で行なわれている館外サービスに、学校訪問がある。

これは、学校や図書館司書からの依頼で児童サービス担当者や図書館職員が学校へ行き、児童、生徒に本の読み聞かせや紹介を行なうものである。これまでの活動として平成3年度から、記録の明確なものを紹介する。

年 度	訪 問 先	会 場
平成3年度	屋富祖幼稚園 県立森川養護学校 前田小学校	集会室 視聴覚室
平成4年度	浦西中学校	多目的ホール
平成5年度	浦小学校 浦城小学校	視聴覚室
平成6年度	神森小学校 浦城小学校	体育館 〃
平成7年度	沢岬小学校	体育館

(10) その他のサービス

図書館だより『はながわら』（毎月発行）の「こどものページ」にて、新着図書や“今月の本”など紹介し、同時に児童室に展示している。また児童室の雰囲気づくりも大切で、毎月行事や展示本に合わせた壁画を飾っている。

市内の各小学校の新一年生に向けて、読んでほしい本のリスト「いちねんせいにおすすめしたい本」として5月頃に配布している。これまで夏休みに向けて行なっていたが、父母への啓蒙の意味もあり、新学期に時期を変更した。リストを持ったこどもたちが、カウンターに多く訪れる。

さらにBM（移動図書館）では児童向けに「としよまるイラスト展」（平成6年より年1回）を行なっている。各ステーションのこどもたちからとしよまるのイラストを募集し、下は3歳から、小学校高学年のこどもたちまで、思い思いの「としよまる」の姿や「貸出

図書」などを描いている。

[参考文献]

- ・『本はともだち』文部省 1996年
3～16P, 19～27P, 44～48P, 73～77P, 89
～93P
- ・『市民の図書館』日本図書館協会 1970年・
『ストーリーテリングと図書館』竹内哲著
日本図書館協会 1995年
- ・『図書館を考える』前川恒雄著 「公共図
書館の管理委託を考える」実行委員会
1996年
- ・『子どもと本 いま・これから』子どもと
本の出会いの会編 小峰書店 1996年
i～iiP, 74P
- ・『子どもの図書館の運営』小河内芳子編
日本図書館協会 1996年 89～91P, 258P
- ・『子どもの図書館』石井桃子著 岩波書店
1984年
- ・『われらの図書館』前川恒雄著 筑摩書房
1987年 138～168P
- ・『個人別図書館論選集「佐野友三郎」』
石井敦編 日本図書館協会 1981年
- ・『こどもの図書館 復刻版 第1巻～第14
巻 1954～1967年』児童図書館研究会
1974年
- ・『現代図書館学講座6 図書館活動』埜上
衛 [ほか] 著 東京書籍 1983年
- ・『図書館／情報ネットワーク論』原田勝著
東京 勁草書房 1990年・『浦添市立図書
館報』創刊号～第12号 浦添市立図書館
- ・「『ネットワーク』を整理する」『図書館
雑誌』1989年 vol.183 no.4
- ・『図書館ハンドブック 第5版』日本図書
館協会編 1994年 61～68P, 105～111P

執筆担当

慶田城 朝子 (けだしろ ともこ)
石川 あきの (いしかわ あきの)
畠山 しのぶ (はたけやま しのぶ)

〔 短信 〕

10周年記念事業の光と影

1995年度は、浦添市立図書館にとって「開館10周年」という佳節に遭遇した時でした。本号の『紀要』には、10周年記念事業報告が掲載されています。

当館では、脚光を応援団とした記念事業が推進された渦中にも、今まで顕在化しえなかった「困難な事態」、いわば様々な「影」の部分が次第に自覚されつつあります。

その最大の影は、何と言っても図書館を動かす「制度の脆弱化」です。それは、職員の絶対数の不足という不安定化と短期雇用職員の代替という流動化の難問に収斂します。しかし、敢えて言及しないつもりです。

ここでは、より現実的な二つの影だけを追ってみようと思います。差し迫った一つの影、それは、膨脹する「資料」とその「スペースの確保」という物理的な空間との格闘であり、二つ目の影は、資料の「保存・廃棄」というある意味で技術的な試練との対面です。

最初の「影」は、開館以来、購入、寄贈された資料が膨れ上がり、置き場のない状態が経験され、絶えずその都度書架を増設するなどの工夫を余儀なくされていることです。

個人的な人の「脳」という空間には、膨大な知識を入れ過ぎても限界はありませんが、客観的な「資料」は、置き場を必要とします。何故なら「脳」は、無尽蔵でありながら、自ずと情報を整理し、必要な「情報」を瞬時に出し入れできるからです。しかし、市民の、「資料の保管庫」である図書館は、「資料」を、即時に出し入れができるというわけには参りません。故に、利用に供するためには、「管理・保存」する場所とその段取りに時間を要するものなのです。したがって、その解決は、所詮、「狹隘化の打破」に求めなければなりません。もちろん、全ての資料が「機械的暗記」に取って代れば、物理的に「コンパクト」

になれるのかも知れませんが。

また、新庁舎完成（1997年6月完成予定）に伴う行政文書や文化課の関係文書の移管等が今後も予想される中で、「資料」の保管場所に事欠くということになれば、利用者への資料提供という図書館の本来の使命を果たし得ないという深刻な状況が懸念されるのです。

しかし、それらの状況は、1997年度に、図書館の施設外に新たな「書庫」を、「新設」ではないものの、「賃借」という道を開きました。とはいえ、新たな書庫確保に伴う資料の棲み分けの問題や『絶対的空間の拡張』という永遠の課題に今後ともつき合っていくことに変わりはありません。

資料の適切な「保存・廃棄」という次の影は、開館当初は豊かな床面積に支えられていたためか、「資料の収集」に意識が集中し、資料の「保存や廃棄」に伴う資料選択が機能しなかったように思います。それは、せっかく収集した資料を捨て切れないという思いを誘発し、「新聞」、「雑誌」等に代表される資料は、開館以来書庫を占領しています。殊に「雑誌」については、主に市レベルの公共図書館関係者では、社会的共有資源としての「分担保存」という手法が模索されてきていますが、実現の目途が立っていません。

要は、膨脹する資料で、利用者にとり、～は廃棄するもの、～は残すもの、という空間を超越する価値判断でしょう。

それは、図書館のみが背負う決断でなく、市民の合意が大前提です。それでいて、空間と資料との闘争の終りはありません。10年で培った資料管理の『技術』そのものを根本的に見直す時期だといえそうです。

10周年記念事業という光輝ある「節目」を経て、21世紀の図書館であり続けようとする限り、「光」と「影」の綱引きは今後も生じてくるでしょう。1997年度以降、私達は、具体的にこれらの「影」に果敢に挑戦していかなばならない地点に立っているのです。

（遠山 満）

〔 短信 〕

図書館雑感

図書館勤務をして一年目を迎えようとしている。先代の館長が卓越した方々だったので荷が重く当初はためらいもあった。勤務してみると月日は否応無く過ぎ、6月の戦争史料展、9月の曝書のための特別資料整理、11月の読書週間と年間行事が続く中、沖縄学研究室を中心とした沖縄学講座も実施された。そのため目白押しに実施される事業で悩む暇もなくあつと言う間に時だけが過ぎたように思える。

ある上司から「貴方は図書館がきつと好きになれる」と言われたのを鮮明に覚えているが、他人の評価はどうであれ今その感になっているのは確かである。

さて、当市立図書館は今年11年目を迎え、20万余の蔵書を有し内外でも高い評価を受けていると言われている。どんなすばらしい資料が豊富にあっても「積ん読」では無意味であり、この蔵書を市民の皆さんに如何に利用していただくかが私に負わされた課題である。また、当図書館の特色として沖縄学研究室があり、そこには郷土資料は勿論のこと、中国、アジア関係資料等も備えている。この研究室にはトートーメのことや、自分のルーツ探しのために相談に見える利用者もいると言う報告を職員から聞くと興味深い。また、この研究室の主催する「沖縄学講座シリーズ」が年16回持たれているが、この講座には定評がある。平成9年は「伊波普猷」没後50年に当たると言うことで、伊波普猷・物外忌記念講座「伊波普猷と近代の言論人」と題し、「普猷をみつめる学識者たち」をサブタイトルに講演を開催した。講師に屋嘉比収、伊佐眞一両先生と、当図書館嘱託職員・栗国恭子が、当時普猷と関わりのあった島袋全発、太田朝敷、末吉麦門冬のことについて熱っぽく語り、満席の人達をクギづけにしていたと自負している。

その前日の命日、浦添城址内にある伊波普猷霊園に先生の身内の方と沖縄学研究所の関係者とお墓参りをおこなっている。その日は台風12号の襲来直後で回りの樹木は折れ、伸び放題になった草木を職員が香取線香を炊きながら、8月の太陽の熱気と台風明けの湿気、そして蚊との悪戦苦闘をしながらの大掃除となった。きれいになった墓前に生前先生の好きだったと言われるお餅と砂糖テン普拉が供えられた。永年、公務員生活を続けて来た中で、業務としてこのような仕事をするのは新鮮な驚きであった。日ごろ家庭で何げなくやっていた行事を、改めて仕事のなかに見つけた時、何か自分が文化人の仲間に入ったような錯覚をさえ覚えたものだが、先生は果たして喜んでくれたでしょうか。

また『琉球王国評定所文書』の刊行事業と言ういかめしい職務がある。簡単に説明すると、近世の琉球王国の政治行政組織首里王府を「評定所」といい、地方行政の文書はここに集中、文書の整理、保存管理をしていたという。当時の文字の解説、刊行する事業である。全巻18巻で今年度は13巻をおこなっている。近世琉球歴史研究者にとって、第1級の史料と重宝されている。沖縄学研究室は浦添の歴史に関する事のみならず、名前の示す通りグローバル的に全域にかかわっている。そこにはいずれも専門職の先生方でとても心強い。

ところで、これまでの私の感を述べたが、図書館は嘱託職員と臨時職員の力に頼っている現状は否めない。この事は今後の図書館運営について充分検討すべきだろう。

今、我が国においては、高齢者社会にむけ生涯学習が叫ばれている。情報化時代となり、周りはコンピュータ化によって、慌ただしく変化している。そのような状況のなかで図書館まで足を運び自分の好きな本探しは如何でしょう。素敵な本との出会いによってあなたの心の癒しの場所になるかも知れない。多くの市民の利用を期待する。 （与座文子）

〔短信〕

沖縄学研究室の特色

各地の図書館がしっかりとしたレファレンス室を完備し、利用者に応えているのだが、この場合、たいていは文献を通してのレファレンスである。文献以外のレファレンスは時間も労力もかかりすぎるとい実情がある。最近は電話でのレファレンスも増えている。先日も「カマジサー」の語源を知りたいという電話があり、当館のレファレンス室、沖縄学研究室の担当者が懸命に探したが、どの文献にも出ていなかった。このような事例はむしろお年寄りの体験（頭）に案外解決の道が隠されているのかもしれないと考えられる。

当室では時々、ルーツというか、先祖を探したいというレファレンスを受ける。この場合、何か文献資料、例えば、系図とか家譜を持参していると担当者も解決の端緒がみつかるのだが、半分のケースは記憶や考えを披露するだけである。来室者のいわば頭の中に入っている情報だけがたよりである。

先祖探しは沖縄のある人々にとっては切実な関心事である。だが、内容は個人的な部分が多く、既成の文献ではレファレンスが不十分のように見受けられる。沖縄各地の図書館でもこのようなケースには図書館側の時間と知識と労力の確保の必要性を実感しているという。

もちろん文献資料を持参するケースもある。あるケースでは中国の家畜と沖縄の家畜の比較のレファレンスを受けに来た。担当員の対応からまた新たな何かが触発されたく、たびたび来室するようになったが、来室するたびに中国の人から貰ったという新しい文献資料を提示した。担当者は資料をもとにさらに対応し、担当者と利用者が互いに親身になった。すると、しだいに利用者の問題や課題が形をなし、膨れあがってきた。解決の糸口が

見つかり、最初うかぬ顔をしていた利用者も明るく、元気になってきた。しまいには中国の研究者から貰ったという漢文の図や手紙などのコピーを当室に寄贈したいと申し出るようになった。

このように当室のレファレンスは他と少し趣を異にしている。解決を求め、はるばる沖縄各地から来室する利用者に対し、膝をまじえ、じっくりと話を聞き、所蔵している知識のみならず、各地の図書館、資料館などの情報を探し、また（可能なかぎりの）担当者の頭の中の知識を取出し、利用者に応えるように努めている。

上記にコピーの寄贈の話をしたが、レファレンスをしながらの情報収集も可能である。例えば、先祖探しでも、たしかに利用者は先祖探しを目的だが、担当者がじっくりと話を聞くと、直接関係しない様々な情報が出てくるものである。情報収集に関心がいき、レファレンスがおろそかになるというのは杞憂だろう。熱心にレファレンスをすればするほど情報も豊かに積み重なる。

当室には本土などから、沖縄研究の原資料（著者が分析などをする前の資料）を求め、来室する人もいる。このような人たちは「本場だから、原形や原資料があるだろう」という期待をしている。この場合、「生の」資料がレファレンスの時に収集できる当室の特色が生きと考えられる。

利用者の「生」のレファレンスは様々だし、切実だが、分析すると、いくつかのパターンに分類できる。つまり、体系づけられた学問（例えば、民俗学とか神話など）になりうると思われる。

レファレンスを受ける担当員は学問が拾い落としたような知恵、知識を蓄積する努力も必要だろう。例えば、「カマジサー」の語源がわかったら、資料ノートのようなものに、百科事典と同じ「か」の項目を設け、カマジサーを新規登録する方法も有効だろう。この

ように日々収集する「生きた」資料はいつのまにか、かなりの量に達する。この資料を製本化し、利用者に提供するのである。もちろん、この場合、仮名とかを用い、あるいは論に支障がおきない範囲内での修正を施しながら、利用者のプライバシーには細心の注意をはらわなければならないだろう。

一方、このような沖縄に特有の民俗、信仰などの領域のレファレンスに対応するためには、このような体験をしてきた、主に年配の人々の図書館への配置も一考を要する。気鋭な専門家と、体験に裏打ちされた「生き証人」的な人のコンビは利用者の問題、課題により一層豊かに対応できると考えられる。

(又吉栄喜)

〔短信〕

平成8年度沖縄県地域史協議会の研修

沖縄県地域史協議会（略称・沖地協）の研修が、宮古島上野村で開催された。本年度の研修会はこれで2回目である。

第1回目の研修は総会を兼ね、5月31日に佐敷町のシュガーホールで開催された。テーマは地域の昔話や歌謡のCD化についてである。

かつて昔話・歌謡をテープで収集・保存してきた地域にとって、いかにCDに再録変更するかが問題になるが、これから作業する地域にとっては、記録の保存を考える上で非常に参考になったのではないだろうか。但し、この場合、昔話・歌謡を伝承（詠唱）するインフォーマントと収集する側がよほどの信頼関係が成り立っていなければならない。つまり、インフォーマントの自宅や集会場などでテープ収録し、それをCD化すれば良いという安易な方法では、録音された歌謡などの資料的価値（音質・語り・保存状況等）が自ずとその差がでる。やはり、それなりの設備も備えたスタジオでの記録化が要求される。となると、インフォーマントをスタジオに伴い、昔話・歌謡などを録音、CD化を進めることになる。これまで以上に、語り部との心の繋がりがなければ、緊張度の増す「スタジオ」での記録化は難しい。勿論、研修会で紹介された『平安座の歌謡』（CD2枚組）のように市販・永年保存を目的とする事を前提にした場合である。CD化へ向けた予算の獲得と説明も又、編集事務局の大きな仕事になる。という感想をもった第1回目の研修会である。

この佐敷町研修で一番ユニークな企画は、全国的にその名が知られるシュガーホール音楽堂で研修が開催されたこと。さらにホール

氏（民族音楽研究家）の講演「文化としての歌謡」と併せ、比嘉氏によって童謡が歌われたこと。同時に「特別ミニコンサート・ピアノとヴァイオリンの共演」も行なわれ、共催側の佐敷町史編集スタッフの粋な計らいに、参加者全員、感激。沖地協にとって初めての企画ではなかろうか。午前中は雨天にもかかわらず町内の史跡巡見を実施する。

* * *

2回目は宮古での宿泊研修である。沖地協は本年度の課題テーマを「海外交渉」としている。近世末期の異国船漂着・遭難に関し、その対応の延長線上にセットされた＜博愛＞精神並び、国際交流を積極的に地域の文化行政の一端に取り組み推進する宮古、特に上野村の協力の下、「海外交渉」を実地学習。

10月2日から2泊3日、「ベルリンの壁」や中世ドイツの古城が建つ上野村ドイツ文化村を主会場にしての研修会である。参加人数、48人。



宮古研修会講演

文化村には、1873（明治6）年に当村宮国沖で座礁・難破したドイツ商船R・Jロベルトソン号救助を記念し、その遭難碑が建立されている。碑は1936（昭和11）年、当時の外務省と宮古郡教育会が共同で建立したものである。そのキーワードは＜博愛＞。これより先、遭難・救助されたドイツ船員が帰国して3年後の1876（明治9）年には、ドイツ皇帝

(ウィルヘルム1世)の命により、宮古島民の勇気と博愛の精神を讃えて、漲水港近くに独文・漢文併用の碑文『ドイツ皇帝博愛記念碑』がすでに建立されている。

研修会2日目、この両碑に読み取れる意識、〈博愛〉をポイントに平良勝保氏(城辺町史編集委員)によって「ロベルトソン号漂着事件の世界史的背景」の演題で講演があった。当時(明治初期)の日独の関係、ドイツ植民地主義の台頭とアジア進出などを提示。さらに、琉球王国の異国船来航(遭難救助も含む)への処遇方針を継続する当時の琉球藩の対外



バラスト

政策を掲げ、ロベルトソン号救助に対しての上野村民の対応を説明。現在、上野村の文化行政、国際交流のキーワードである〈博愛〉への批判ではなく、その歴史的推移を確認すべき内容の発表であったのではないか、と思う。

初日は、尚家・堀内家所蔵文書に含まれる宮古関係史料の紹介を、外間政明氏(那覇市歴史資料室学芸員)が報告。次いで、池間島沖合の八重干瀬で遭難した「プロヴィデンス号」(1797年・英国探險船)の残骸探索を通して、地域の活性化を図る仲間章郎氏(プロヴィデンス号を語る会会長)の発表がなされた。探索の結果、遺物である「バラスト(鉄製の重石)」を2個発見。現在池間島の離島振興センター内に保存・展示されている等が報告された(後日、見学・調査)。

巡見は2日目に実施され、来間島の拝所・遠見番跡などを中心に宮古島南部の史跡約13か所を廻る。上野村文化財調査審議会会長の佐渡山安公、村教育委員会主事岩井洋一の両氏によって、懇切丁寧な説明がなされた。

(長間安彦)

〔研修報告〕

中国泉州市での浦添市職員派遣事業の報告

上 間 尚 二

1996年10月2日から12月10日までの80日間、浦添市（中国名 Putianshi）と友好都市である中国福建省泉州市（中国名 Zhongguo Fujianxing Quanzhoushi）で国際交流を図る目的で研修しました（研修員2人）。現在の中国（泉州市）は次のとおりです。



中国の基礎データ

首都	北京（人口約 1,000万人）
宗教	仏教、道教、イスラム教、キリスト教など
面積	約960万Km ² （日本の約26倍）
人口	約12億 1千万人（1995年現在）
通貨	元（1元=13.8円1996年12月現在）
民族	漢民族他55の少数民族（漢民族は約93%）

日本との国交開始 1972年日中共同声明
（1978年日中平和友好条約締結）

日本との時差 - 1時間

1. 中国の自然と地理

中国は国土が広いうえに地質構造が複雑で地下資源が多く、加えて多様な気候帯があります。また、アジアのいろいろな国と国境を接していますが、インド、ベトナム、日本（尖閣諸島）との間に領有権問題があります。しかし、私が研修した泉州市においては、尖閣諸島の領有権問題について質問されたことはありませんでした。

2. 中国の産業・経済と文化

中国の主な産物は、米、小麦、綿花、木材、石炭、鉄鉱石などで世界でもトップクラスです。

現在中国は「経済開放政策」により、資本主義的市場経済への移行を明確化し、年々経済発展を遂げている反面、沿海部と内陸部、都市部と農村部の貧富の差が拡大しています。

また、中国は国土が広大なためにさまざまな地域で工芸、料理、習慣、言葉、伝統文化があり、少数民族も独自の文化をもっています。

福建省と沖縄県（中国名 Chongshengxian）の文化を比較してみますと、共通することが多いと思います。例えば料理（豚料理）、建

造物（墓、シーサー）、行事（旧正月、ハーリー）、楽器（三味線）などはとても沖縄県と似ており興味深いです。

3. 泉州市（中国名 Quanzhoushi）の概要

浦添市と友好都市である泉州市は、中国福建省南東部の台湾海峡側に位置し、人口おおよそ630万人、古くから諸外国との交流の歴史があります。農業が盛んであり、米、小麦、落花生、サトウキビ、お茶などが代表的な産物です。近年は医薬品、石油品などの化学工業、衣服、靴、プラスチックなどの軽工業、ラジオ、テレビなどの電子工業、石材などが伸び経済発展が著しいです。

本市と泉州市との交流は、今から約600年前にさかのぼり、琉球王朝時代の1372年、察度王の入貢が最初で、（通説ではありますが、それ以前の6世紀～7世紀頃から民間レベルで交流があったとの説もあります）その受け入れ先が泉州市だったといえます。

泉州市内の現在の状況は、ビルディングの建築や道路の新設、改修など開発ラッシュが続き、日々変貌しています。市の中心地区は車、オートバイ、自転車、人が多く、歩行者

は交通の激しいところでも横断し、運転者はクラクションをよく鳴らし、センターラインも平気でオーバーするなど、騒々しいと同時に交通ルールがあまり守られていません。この騒々しさは、泉州市だけではなく北京や廈門においても見られます。また、中心地区はホテル、レストラン、食堂、デパート、洋服店、おみやげ店などがありにぎやかです。市内の交通は、バス、タクシー、人力車がありますが、タクシーはメーターがあるにも関わらず、運転者と利用者との事前交渉で決まります。（北京、桂林はメーターどりの料金）

泉州市内には、国の重要文化財として開元寺（686年創建された仏教寺で福建省最大規模）、清浄寺（1009年創建されたイスラム教寺院で中国に現存する最古のイスラム建築のひとつ）など11カ所があり、文化財の保護を大切にしています。

また、1996年5月に駅が供用開始（現在は貨物のみ、今後旅客列車を予定）、その年の12月には、泉州市晋江空港も供用開始（現在は国内線のみで北京他5都市）され、交通機関が発達しています。

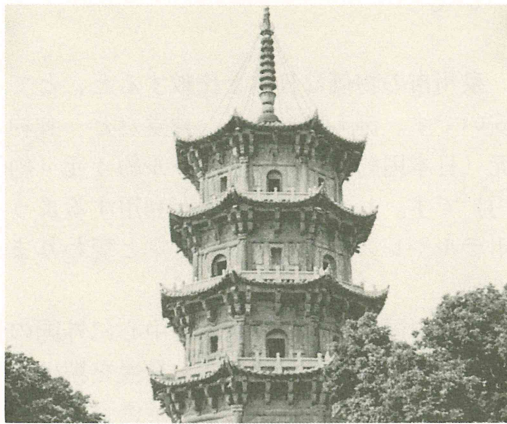
本市との友好都市締結は、1988年9月に行っています。



泉 州 市



泉州 市



開元寺

4. 泉州市の友好都市との交流について

泉州市は外国との友好都市として、浦添市のほか、アメリカのモントリパーク（ロサンゼルス区88年締結）、イタリアのソレント（92年）、フィリピンのマカティ（93年）、ドイツのローイスタト（95年）の5の都市と友好都市を締結し、外国との交流を大切にしています。中国国内での友好都市は十数カ所とのことです。今後の友好都市との交流については、人材、文化、経済面で積極的に交流をしたいとのことでした。

1994年には、泉州市人民政府職員が6ヶ月間、浦添市で研修しています。

5. 泉州市人民政府の組織、勤務時間及び公共事業の契約方法等について

泉州市人民政府は、市長に何立峰氏、副市长は現在7名、公安（警察）やパスポートの発行業務は市人民政府で行っています。また、市人民政府と市議員（任期5年）との兼職が可能とのことです。

泉州市人民政府の会計は、1月にはじまり12月に終わり、（勤務は月曜日～金曜日）、勤務時間は午前8時～午後5時です（休憩時間12時～午後2時）。事業や予算等は、前年度で計画を立て執行しますが、緊急の場合や、やむおえず予算の範囲を越える場合には、市長の決済で予算を確保するそうです。文書等の決裁方法は、担当者が文書を作成し、上司の決裁を受けますが、印鑑は使わずにすべてサインで決裁します。

公共事業での契約方法は、日本と同様に入札と随意契約があり、（最近の入札による契約が多いとのことです）工期、違約金等も契約上定められています。



泉州市人民政府入口のシーサー

6. 華僑大学（中国名 Huaqiao daxue）の研修について

私たちは、10月3日に国立華僑大学へ行き、校長の莊善裕氏を表敬訪問し、その後入学手続きを終え宿舎に入りました。その日の夜には同大学主催の歓迎会があり、副校長をはじめ関係者多数が出席し、すばらしい歓迎会でした。

今回の研修は、華僑大学で中国語を学びながら国際交流をしましたが、同大学には中国、マレーシア、タイ、インドネシア、香港、日本などの国と地域から約6,000名の生徒が在学しています。沖縄からも6名の留学生在学しています。大学内には病院、招待所（宿泊施設）、公安（警察）、食堂（数カ所）、売店（数カ所）、理髪店などがあります。また、教師、事務員などの大学関係者（約1,500名）のほとんどは大学構内に住んでいます。

大学での授業は、私たち研修員2人の個人授業で（月曜日～金曜日）、教科は実用漢語、初級口語、読写練習の3つに分かれます。先生は中国人（最初は4名で進むにつれて先生が変わります）で日本語は話せないため、中国語で説明します。最初の授業は、中国語の発音ピンイン（AOEIU）からはじめ、次に你好（Ni hao）、謝謝（Xie xie）、再見（Zai jian）など日常会話に進み、だんだんと難しくなります。中国語で特に難しいのは、発音と声調だと思います。発音は日本語に比べるとかなり複雑で、日本語にまったくない音があります。

華僑大学での授業は、10月4日～12月13日で終了しましたが、その間に日本や東南アジアの多くの留学生と友人なれたことはとてもうれしいです。



華 僑 大 学

7. 中国（泉州市）の物価や制度等について

泉州市の物価は日本と比較すると、とても安いです。例えば食事は、食堂だと一食約7元（日本円約95円）、缶ビール約4元（約55円）です。しかし、外国人が利用するようなホテルやレストランでは、日本と変わりません。

現在中国は、経済特別区を中心に外国の資本・技術・制度等を導入し、発展を続けています。泉州市内においては、華僑資本・香港資本・台湾資本が加わり、各種工業を中心に経済発展が著しいです。また、泉州市に隣接する廈門市の鼓浪嶼島（グランユイダオ）は、車の乗り入れは禁止、チリを捨てたり唾を吐いた人は罰金という制度の地区もあります。

中国の車は右側通行ですが、交通ルールが日本と違うばかりでなく、交通マナーがあまり守られていません。同様に中国人は列を作って順番を待つことは苦手ようです。バスに乗るとき、食堂で食事を注文するときなど列を作って順番を待つことは少ないように思います。

また、中国で交通機関等を利用する場合に、外国人料金制度というのがあります。例えば国内線の飛行機は、中国人が10,000円とすると外国人は15,000円など、列車や施設入場料についてもこの制度があります。

8. 今後の泉州市との交流について

今後の両市の交流としては、スポーツ、教育、文化・学術、経済、衛生・環境保護等の分野での交流が望まれます。具体的にスポーツや教育面においては、小・中学生を中心にサッカー、バレーボール、ハンドボール、語学等の交流が期待されます。文化面においては、引き続き古典芸能の交流や、新たに史跡の共同調査、経済的な面では、基礎となる海・空の輸送ルートを整備し、中国物産展、沖縄物産展の開催をはじめ、農業分野（花、野菜、果物）、工業分野（自動車、オートバイ、機械）、製造業分野（食品、加工業）等の事業協力（交流）が可能と思います。また、交流事業を発展させるために浦添・泉州友好会館や泉州市公園（泉州市の文化財、建築物等を取り入れる）の建設を考えることも興味深いです。

浦添市と泉州市の図書館の交流としては、双方の図書館が所蔵している郷土資料や歴史・文化関係資料及び図書館が発行する出版物を相互に送付し、必要な情報・資料の交換を通じて、両市の友好事業を発展させるのも可能と思います。

しかし、どの分野の交流においても、中国語の通訳が必要であり、今後は語学力を身につける教育（人材育成）が最も望まれます。

9. まとめ

私は、今回の中国泉州市での研修で多くの中国の方々の親切を受け、とてもお世話になりました。特に泉州市人民政府の方々、華僑大学の先生方が非常に親切でした。日本と中国は、昔から友好関係にあり、日本は中国からたくさんのことを学び、今日の発展に大きく影響を与えてくれたと思われます。私たちが現在使用している漢字も中国から学んだ一つであります。しかし、過去の不幸な戦争に

より、中国国民がこうむった損害が極めて大きなものであったことを忘れてはならないと思います。最近の両国間の問題として、尖閣諸島の領有権問題、吉林省等における旧日本軍が残した化学兵器（毒ガス弾）の処理問題等がありますが、平和的な解決方法を見つけだしてほしいです。

※ 今後、日本と中国が恒久的に平和で、浦添市と泉州市がますます友好関係が深まるよう、私もより多くの貢献をしたいと思います。

※ 印の中国語訳

今后、我希望日本和
Jinhou wo xiwang Riben he
中国永恒的平和、浦添市
Zhongguo yongheng de heping Putianshi
和泉州市更加加深友好
he Quanzhoushi gengjia jiashen youhao
関係、我也想为友好
guanxi wo ye xiang wei youhao
做出更多的贡献。
zuochu geng duo de gengxian

評定所文書にみる浦添

金 城 功

(1)

浦添市立図書館では現在『琉球王国評定所文書』の編集刊行をすすめている。1996年3月末に、『琉球王国評定所文書』第12巻を刊行し、編集は計画通り順調に進捗している。『琉球王国評定所文書』に収録されている文書記録は、咸豊6年(1856年=安政3年)のものである。

それは、幕末期の文書記録であり、それを通して異国船の渡来、異国人の滞在が琉球王国の諸々の面に影響を及ぼしていたことを知ることができる。異国人の滞在が、当時の浦添間切にどのような影響を与えたのか、『琉球王国評定所文書』第12巻から浦添間切に関する文書記録を抜き出して考えてみることにする。

(2)

『琉球王国評定所文書』第12巻には、浦添間切についての文書記録が何点か収録されているが、その中から硫黄のことを取り上げてみることにする。

(ア) 明十七日牧湊江南表之洞より我如古村江硫磺持越被仰付候処、異国人目ニ懸リ候而者差障候間、通路筋之村より掟頭より辻より江遠目附置異国人来候ハ、早速右場書江詰居候役より并持越候者共江致通達候様、浦添間切江可申渡旨取納奉行江可被申渡候。以上。

辰六月十六日

見里親雲上

亀川親雲上

御物奉行

右通有之候間無間違相達候様可被申渡候。以上。

辰六月十六日

大田親雲上

宮平親方

取納奉行

牧港橋の南の方にある洞穴から我如古村に硫黄を持ち運ぶように指示されているが、異国人に見られては困ることになるので、持ち運びの通路にあたる村々の辻々に遠目附を配置し、異国人が行きかようなことがあれば、すぐに詰めている役人、運搬にたずさわっている人に知らせるようにしなさい。そのことについて浦添間切へ通達するように取納奉行へ伝えなさい、と御物奉行あての文書である。

それをうけて御物奉行は、取納奉行に相違なく浦添間切へ伝えるように、と文書を発っていることになる。

(イ) 覚

夫五人

但、石細工勝手之者

右者 浦添間切牧港湊江南表之洞江格護被仰付置候生硫磺、明十七日硫磺焼方江渡方被仰付候間、同日早朝さはくり并所之掟頭より宰領ニ而彼之所江差越居申口方筆者罷下候ハ、引合相勤候様可相渡旨取納奉行江可被申渡候。以上。

辰六月十六日

里見親雲上

亀川親雲上

御物奉行

右通有之候間浦添間切堅可被申渡候。以上。

辰六月

大田親雲上

宮平親方

取納奉行

石細工に秀でた者5名を浦添間切から出すようにとの文書である。17日の早朝にさはくり等の宰領で、彼の所（牧港南表の洞穴）へ連れていき、申口方筆者の指示で仕事に従事させるようにとのことである。

『琉球王国評定所文書』第12巻の198Pと199Pには、上記文書と同じ内容のものが収録されている。牧港の洞穴から運び出した日にちが違っているだけである。

1800年代の後半の時期には、牧港橋近くの洞穴に生硫黄が保管されており、焼調えのために我如古村に運ばれていたことがわかる。

『琉球王国評定所文書』第12巻の262Pには、我如古村での硫黄の焼調えのために必要な物資の調達のことと共に、硫黄の精製がおこなわれたために生じた作物への被害のことが記されている。即ち

役々衆并焼人共多人数御差越御宿拵又者御所望野菜・薪木其外諸雜費者 勿論焼調方之砌、村中用水差支候上硫磺洗水田畠杯江流落作毛之障ニ茂相成候段、彼ノ村申出趣有之候付、去子年一往御断之願為申上事御座候得共御取揚無御座、云々

とある。

硫黄の焼調えのために、我如古村では、硫黄の洗水が田畠に流れ込み、作毛に支障をもたらしていたことを伝えている。即ち硫黄の焼調えのために生じた水によって農作物への

被害があったことを伝えている。今でいえば、「硫黄公害」ということになる。

硫黄精製のために多人数の人々が集められたため必要なものの調達で、宜野湾が困っており、浦添・西原・宜野湾・中城の四ヶ間切で負担するようなことになっている。

浦添の牧港橋近くの洞穴に硫黄が保管され、我如古村で硫黄の焼調えがおこなわれるようになったのは、異国人の琉球滞在にその原因があることが、文書を読めば分かって来る。もともと硫黄の保存、精製は泊で行なわれており、異国人の滞在という異常な状況の中で牧港での保管となり、我如古での精製となったことになる。

泊で硫黄の焼直しがおこなわれていたことは、『近世地方経済史料』第10巻の「古老集記類の二」（360P）に、次のような記録がある。

鳥島船之儀、毎年二三月比硫黄積登、五六月比には飯来積入帰島いたし候。琉球へ積渡候は、於レ泊焼直申候。

但飯米は人数高に応じ、船手より相渡候事。

硫黄の焼直は泊において行なわれていたことが、上記の史料で分かる。保存のことについては直接記されていないが、前掲の史料を素直に読むと、生硫黄保存も同じく泊においてなされていたことになる。

では何故硫黄を浦添の牧港の洞穴に保存し、宜野湾の我如古村で精製したのかということになるが、それは『琉球王国評定所文書』第12巻に収録されている文書・記録にみることができるよう異国人の滞在中にあったことになる。王府は、硫黄の保存と精製を異国人の目にとどかないところでおこないたかったことになる。その場所に選ばれたのが浦添であり、宜野湾であったことになる。

(3)

次に漂流朝鮮人とのかわりで見ることにする。

- (ウ) 漂流朝鮮人共召置候木屋之儀磯近ニ而冬向寒気強可有之候間、泊頭取申談牧湊村後去年唐人等召置候所江木屋作替召移候様、最寄之間切江可被申渡旨御差因ニ而候。以上。

辰十一月廿七日 阿波根親雲上
御物奉行

右通有之候間最寄之間切々々江堅ク可被申渡候。以上。

十一月廿七日 嘉手納親雲上
嘉味田親方

取納奉行

- (エ) 此節漂着朝鮮人之儀漁獵人之由ニ而釣具等所持有之、就而者万一磯辺江走出漁獵としてくり舟伝間等江乗り方々漕出候儀茂難計候間、右者共木屋近辺伝間くり舟等格護方可入念旨、浦添・宜野湾間切江可被申渡候。此旨御差因ニ而候。以上。

辰十一月廿七日 阿波連親雲上
御物奉行

- (ウ) 漂着朝鮮人に提供している家は浜の側にあり、冬場に向うと寒さが厳しくなるので、唐人が住まっていた牧港村の後の方に木屋を作り移すことにした。そのことについて、浦添に近い間切々に伝えるようにとの文書である。

また、(エ)の文書は漂着朝鮮人は漁獵する人々であり、くり舟や伝間に乗って海にでることがあっては困るので、浦添とその隣りの宜野湾間切にくり舟・伝間の管理をきちんとするようにと、指示した文書である。

漂着した人たちは、普通泊に木屋を作り、そこに住んでもらっているのだが、1856年辰

年に漂着した朝鮮人は牧港に宿泊所が与えられている。前の年の卯年には中国人も牧港にとめおかれていたことが、(ウ)の文書から分かる。文書には直接的に異国人のことが記されていないが、他巻の文書・記録に目を通すと、異国人とのかわりで漂着した中国人や朝鮮人を牧港に住まわせ異国人の目から隔離していたことになる。

(4)

硫黄と漂流朝鮮人にかかわる以外の浦添関係記事が、『琉球王国評定所文書』第12巻には収録されているが、あえて硫黄と漂流朝鮮人を取り上げたのは王国時代に浦添はどのような役割を担わされていたかを考えてみたかったためである。

結論を先にいえば、浦添間切は異国人の渡来、滞在時に緊急避難所的な役割を担わされていたのではないかということである。

もともと泊で処理されていた硫黄や漂着人の保護にかかわることが、異国人の滞在により泊周辺ではその業務の遂行ができなくなった。が、王府としては硫黄の保存・精製、漂着人の保護の業務は放置できないものであった。ために、泊の役割を浦添に移したことになる。その際、何故浦添なのかということになるが、浦添が首里、泊から近いということと共に、当時の交通事情からやすやすと異国人が行けないということもあったのではないか。異国人が浦添に足をふみ入れた場合でも監視のしやすいということがあったものと思う。

浦添には硫黄を運ぶための港もあり、泊にかわり得る条件を備えていたことになる。

『琉球王国評定所文書』を読む一つのきり口として異国人渡来・滞在時の浦添を紹介することにした。

神父たちの散歩道

徳元 剛

1. はじめに

1855（咸豊5）年1月10日、那覇沖に異国船が1艘姿を見せた。それまで何度も異国船来航を経験しているだけに、琉球側の対応は素早く、その日のうちに関係部署へ手配、三重城・宗之崎・あかつら・塩台の4ヶ所に異国船監視のための関番所が設置された。また、当時護国寺に滞在していたイギリス人宣教師モートンの妻が、望遠鏡によりその船がフランス船であることを確認した。

琉球側はさっそくその船に役人を派遣、来航の理由を尋ねさせた。船長のボンネがそれに対応、この船は商船であり、乗組員40人（内、唐人10人）で香港を出帆、上海へ向かう途中だったが、風が不順で琉球に立ち寄ることになった、と応答した。さらに、神父や医者をも5～6人滞在させて、琉球・フランス両国の友好を図りたい、との要請が出された。琉球側の役人はその要請に対し、寄港中の物資援助については協力できるが、神父・医者の滞在については応じがたいと断った。

しかし1月14日、フランス船からボートが1艘泊台瀬にこぎ着き、滞在のための大量の荷物を天久寺に運び込みはじめた。そして翌15日、神父3人・唐人1人を残し、船は出帆してしまったのである。琉球滞在を開始した神父3人の名はジラル、フェウレ、メルメである。そして唐人の名は葉桂郎といった。

『琉球王国評定所文書』第11巻収録文書「仏船来着并仏人逗留付而之日記」は、フランス商船リオン号が琉球に寄港した咸豊5年

1月10日から、同年9月16日までの、上述した3神父と1唐人に関する史料である。彼らは頻繁に泊・那覇、時には首里辺を歩き回り、そのつど追行役人が彼らの行動を監視した。

上記史料にはその関係の報告が多くある。それらを使って彼らの行動を概観する。

2. 護国寺を訪ねる

咸豊5年1月18日、ジラル、フェウレ、メルメの3神父はそろって、護国寺に滞在中のモートンを訪ねている。自分たちも滞在を始めるにあたり下記の手土産「玉瓶之様成もの一ツ」持参でのあいさつが目的であろう。

昨日七過時分天久寺逗留之仏人三人玉瓶之様成もの一ツ風呂敷包ニ而持出、泊高缸・湯原・若狭町道通ニ而護国寺江入、冒耳敦相逢右品相渡嘶等いたし、日入時分本之道筋通ニ而罷帰候段、通事役ニ首尾申出有之、御仮屋方江茂御届申上、此段致問合候。以上。

正月十九日

嘉数親雲上

国吉親雲上

（第11巻、25P）

彼らは、天久寺→泊高缸→湯原→若狭町道→護国寺というルートをとっている。「旧那覇の歴史民俗地図」（那覇市史資料編第2巻中の7「那覇の民俗」付図）を参照すると、天久寺から護国寺までの最短ルートを通ったことがわかる。

『泊前島町誌』（平成3年）に、「一条の

海水潟原を横断して美栄橋辺で久茂地川に通ずるものは球陽尚敬王二十一年の条に「前渚内開一江」とあるものに相当する。若狭町から泊前島にかかる浜街道はこの小流を徒渉して泊高橋の浮道に出たもので、その徒渉地は潮渡口と称していた」とある。

上の文の「潟原」とは、現在の国道58号線のうち、泊高橋から松山2丁目にかけての道路に相当する。その浜街道の途中にあった「潮渡口」については、現在でも美栄橋から久茂地川を分流し、潮渡橋、夫婦橋をくぐり、若狭市営住宅の側を海へ流れ込む上水道があり、これが上の潮渡口に相当する。

「若狭町道」は、だいたい現在の若狭大通りに相当する。

また2月2日、3月8日、3月22日、5月8日にも同ルートで、彼らは護国寺を訪ねている。

昨日七時分天久寺逗留之神父二人寺立出、潟原通ニ而護国寺江入暫間ニ而本之道通罷帰候段、追行役々首尾申出有之、御飯屋方江も御届申上候。此段致問合候。以上。

二月三日 兼城親雲上
国吉親雲上

(第11巻、40P)

昨日日入時分天久寺逗留之神父一人唐人召列、潟原・若狭町通ニ而護国寺江入、冒耳敦相逢嘶等いたし、入相時分本之道通ニ而寺江罷帰候段、追行役々・関番人共首尾申出有之候。御飯屋方江茂御届申上、此段致問合候。以上。

三月九日 渡名喜親雲上
兼城親雲上

(第11巻、52P)

今日四ツ過時分仏伝間と渡来之小官三人・水主一人、天久寺逗留之神父二人召列寺立出、泊大道・新缸通ニ而若狭町学校所江参り地方官相逢用事申出、九ツ時分学校所立出上之蔵・

通堂・那覇町罷通、引帰本之道筋と護国寺江参冒耳敦相逢暫嘶いたし、天久寺江罷帰八ツ時分伝間江乗付出帆いたし候由、通事役々首尾申出有之候。御飯屋方江茂御届申上、此段致問合候。以上。

附、天久寺逗留之神父三人者内一人所持道具・荷物大小五ツ・寝具右伝間江乗付列帰候由。

三月廿二日 賀数親雲上
国吉親雲上

(第11巻、60P)

(前略) 今月(5月-著者)八日ニ茂右同断外出、潟原・若狭町通ニ而護国寺江差越、暫間ニ而本之道筋より帰(後略)

五月廿一日 諸見里里之子親雲上
国吉親雲上

(第11巻、72P)

「泊大道」とは、泊前道(又吉通り)のことであろう。泊前道は、泊高橋から崇元寺橋までの道であり、現在国道58号線(泊高橋)と国道330号線(安里十字路)を結ぶ県道40号線(又吉通り)の北西側ほぼ半行程にあたる。

「新缸」は美栄橋のことで、方言読み of 「ミーハシ」に、現在「美栄橋」の漢字があらわれている。

「那覇町」は東町市場のことであろうか。写真集『那覇百年のあゆみ』には「那覇の大市(ナーファヌウフマチ)」とでている。

ところで3月22日の報告文は、フランシスク・マルナス『日本キリスト教復活史』(久野桂一郎訳、みすず書房、1985年)の中の記述(132~3P)にも関連するものである。3月20日フランスのフリゲート艦シビール号が来琉、翌々22日にはフェウレ神父を乗せて日本へ向け出帆した。附の文に「一人……列帰」とあるのは彼のことである。また、『日本キリスト教復活史』には、海軍大尉シブウ

ルが首里を散策した話がでていますが、上の報告文を載せている「仏船来着并仏人逗留付而之日記」には、そのことに関する記述はない。また逆に、上の報告文に記されているような、護国寺へ立ち寄りモートンと話をしたなどということは、『日本キリスト教復活史』には出てこない。

3. 崇元寺周辺を歩く

昨日ハツ過時分天久寺逗留之神父二人寺立出、泊後道より崇元寺東道通ニ而安里江前迄参り、夫より引帰本道通泊前道通ニ而七ツ時分寺江為罷帰段、追行役、首尾申出有之、御仮屋方江も御届申上、此段致問合候。以上。

正月廿九日

宜野湾親雲上

国吉親雲上

(第11巻、39P)

上は1月29日付の報告文である。「泊後道」は、現在の泊小学校沿いの二車線道路である。那覇尚学院から崇元寺跡裏（モルモン教会）に続いている。

「安里江」はまた崇元寺橋ともいう。『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅳ～島尻方諸海道・首里・那覇の道』（1987年）に「崇元寺橋（安里橋）は、1677（康熙16）年の「安里橋之碑文」によると、首里－那覇間の要路のため往古から石橋を架けてあったが、1670（康熙9）年の洪水で破壊され、仮りに木橋を架けてあったが、それも1677（康熙16）年の洪水で再び破壊されたので元の石橋のように修築したという。現在の崇元寺橋はやや東よりの上流に架けられており（後略）」とある（133P）。かつては、安里川と久茂地川の分岐点付近に架橋されていたものらしい。

また、神父1人が実際に崇元寺の敷地内に入った例もある。

昨日入相時分天久寺逗留之仏人神父一人唐人

召列泊前道罷通、崇元寺開門差懸庭迄立寄無間茂出（後略）

(第11巻、44P)

また、崇元寺辺から長虹堤跡を通り、若狭町村辺に出た例もある。若狭町学校所に行くつもりなら遠回りであるが、おそらくそれだけが目的ではなかったであろう。散歩がてら周辺の地理を把握しておこうとの考えがあったのではないか。それが下の文であろう。

昨日入相時分天久寺逗留之神父二人寺立出、泊前道より崇元寺江新江通ニ而若狭町学校所前迄参り、夫より引帰本之道通ニ而罷帰候段、追行役、首尾申出有之、御仮屋方江茂御届申上候。此段致問合候。以上。

二月朔日

兼城親雲上

国吉親雲上

(第11巻、39P)

4. 安里八幡宮を訪ねる

神父たちは、天久寺から崇元寺への行程の延長線上にある、琉球八社のひとつ、安里八幡宮をも訪ねている。

昨日入相時分天久寺逗留之仏人神父一人唐人召列泊前道罷通、崇元寺開門差懸庭迄立寄無間茂出、本道通ニ而八幡宮江参暫休息、入相時分安里村内より泊後道通ニ而入相時分寺江罷帰候段、通事役、首尾申出有之、御仮屋方江茂御届申上候。此段致問合候。以上。

二月十二日

兼城親雲上

国吉親雲上

(第11巻、44P)

「八幡宮」とは、安里八幡宮のことである。神父1人と唐人は、「本道」を通って安里八幡宮へ行っているが、ここでいう「本道」は泊前道（崇元寺前）から大道向けの通りのこ

とであろう。

昨日七半時分天久寺逗留之神父二人唐人召列、泊前道より真和志間切安里村通本道江出、観音堂迄参暫休息ニ而引帰、首里瓦屋後原道より八幡宮前本道江出、泊前道通ニ而入相時分寺江罷帰候段、追行役々・関番人共首尾申出有之、御仮屋方江茂御届申上、此段致問合候。以上。

三月十四日 渡名喜親雲上
兼城親雲上

(第11卷、54P)

上の文のルートは、泊前道から安里村にかけての道（現、県道40号）を通り、大道（安里十字路）から観音堂まで行き、そこから引き返し真嘉比道を通して安里村に入り、八幡宮前から本道に抜けている。

昨日七半時分天久寺逗留之神父兩人寺立出、泊前道・安里村八幡宮後原道より真嘉比道江出、夫より泊後道通ニ而罷帰候段、追行通事役々首尾申出有之候。御仮屋方江茂御届申上、此段致問合候。以上。

三月廿一日 賀数親雲上
国吉親雲上

(第11卷、58P)

去月廿三日日入時分逗留仏人等唐人召列、泊後道罷通八幡宮後松尾江登致休息、夫より本道通ニ而罷帰（後略）

六月十五日 儀間筑登之親雲上
国吉親雲上

(第11卷、75P)

上の2つの例は、八幡宮を折り返しとして、お互い逆廻りのルートになっている。

5. 安謝・泊辺を歩く

昨日七過時分天久寺逗留之神父等三人寺立出、上泊・安謝湊辺歩行いたし、日入時分本之道通ニ而為罷帰由、尤人家杯江立寄無之道中律儀為有之段、通事役々首尾申出有之、御仮屋方江茂御届申上、此段致問合候。以上。

正月廿二日 宜野湾親雲上
国吉親雲上

(第11卷、31P)

昨日日入時分天久寺逗留之神父兩人寺立出、崎樋川・上泊罷通夫より泊後道松原通ニ而入相時分罷帰り、尤一昨日同様道中も律儀ニ為有之由通事役々首尾申出有之、御仮屋方江も御届申上、此段致問合候。以上。

正月廿三日 宜野湾親雲上
国吉親雲上

(第11卷、32P)

「尤人家杯江立寄無之道中律儀為有之段」（1月21日）、「尤一昨日同様道中も律儀ニ為有之由」（1月22日）というぐあいに、随分おとなしい散歩だったことがわかる。琉球に滞在して間もないこともあって、滞在地の天久寺周辺を確認したのであろう。

安謝・泊辺の散歩については、王府側の懸念を表わした文書がある。

泊近辺では、崎樋川に参詣する人々がいて、散歩中の神父たちと遭遇すると、いろいろ差障りがあるとして、参詣人のほうを取り締まったのである。首里・那覇・久米村でも神父対策をたてるよう、連絡している。

当時天久寺江異国人共逗留有之、崎樋川・上泊近辺多々歩行いたし候付、崎樋川参詣人差寄候而者甚差障可相成儀ニ而、泊村者此方ニ而堅取締申渡置候間、首里・那覇・久米村・近方之間切々々江者其許より取締可被申渡候。此段致問合候。以上。

三月十九日 賀数親雲上
国吉親雲上

(第11卷、57P)

【神父たちの散歩道：表】 注) 日付はすべて旧暦である。

唐人が同行した場合は唐人の欄に◎を付してある。

年 月 日	人数	唐人	経 路
咸豊5年1月18日	3人		天久寺→泊高橋→潟原→若狭町道→護国寺
21日	3人		天久寺→上泊→安謝港
22日	2人		天久寺→崎樋川→上泊→泊後道→天久寺
28日	2人		天久寺→泊後道→崇元寺東道→安里橋→本道→泊前道→天久寺
29日	2人		天久寺→泊前道→崇元寺橋→新橋→若狭町学校所
2月2日	2人		天久寺→潟原→護国寺
9日	3人		天久寺→潟原→若狭町村→西村中道→通堂
11日	1人	◎	天久寺→泊前道→崇元寺→本道→八幡宮・安里村→泊後道→天久寺
12日	2人	◎	天久寺→寺側原道→真和志間切天久村
15日	3人	◎	天久寺→泊後道→真和志間切安里村→大道→崇元寺→泊前道→天久寺
22日	3人	◎	天久寺→泊前道→真和志間切牧志村→泉崎村→久茂地→潟原→天久寺
28日	1人		天久寺→寺側原道→崎樋川→天久寺
3月7日	2人	◎	天久寺→重船→天久寺
	1人	◎	天久寺→潟原→波之上→兼久→若狭町→安里橋→泊前道→天久寺
8日	1人	◎	天久寺→潟原→若狭町→護国寺
13日	2人	◎	泊前道→真和志間切安里村→本道→観音堂→首里瓦屋→八幡宮→本道→泊前道→天久寺
14日	3人	◎	天久寺→泊前道→安里橋→新橋→若狭町村→久米村→上之蔵石門→那覇市→里主所→久茂地→泊前島→潟原→天久寺
20日	2人		天久寺→泊前道→安里村・八幡宮→真嘉比道→泊後道→天久寺
22日	2人	小官3人 水主1人	天久寺→泊大道→新橋→若狭町学校所→上之蔵→通堂→那覇市→護国寺→天久寺
29日	2人	◎	天久寺→泊前道→真和志間切安里村→壺屋村→与儀村
4月6日	?人	◎	天久寺→泊前道→真和志間切安里村→与儀村
26日	?人	◎	天久寺→泊前道→安里橋→大道→安里村→泊後道→天久寺
5月8日	?人	◎	天久寺→潟原→若狭町→護国寺

12日	? 人	◎	天久寺→崇元寺橋→久茂地→那覇市→沖之寺
23日	? 人	◎	天久寺→泊後道→八幡宮
27日	1 人	◎	天久寺→崇元寺橋→久茂地→那覇市→沖之寺
7月13日	0 人	◎	天久寺→泊市→天久寺
	? 人	◎	天久寺→上泊→泊橋→天久寺
14日	? 人	◎	天久寺→上泊→八幡宮→天久寺
16日	? 人	◎	天久寺→上泊→八幡宮→天久寺
21日	? 人	◎	天久寺→泊橋→泊前島→久茂地→那覇市→沖之寺
8月12日	? 人	◎	天久寺→上泊→安謝→末吉村→平良村→下儀保→当之蔵村→松崎→そのひやふ御嶽→城の側→崎山村→赤田村→鳥小堀村→当之蔵村→天王寺→町端村→真和志村→大美御殿→下綾門→瓦屋→観音堂下道→本道→崇元寺→泊前道→天久村
9月5日	? 人	◎	天久寺→潟原→若狭町道→護国寺→若狭町→新橋→安里橋→泊前道→天久寺
6日	? 人	◎	天久寺→泊後道→真和志間切安里村→与儀村→古波蔵村→豊見城間切真玉橋→賀数村→兼城間切武富村→壺屋村→天久寺

特集 伊波普猷—没50年記念—



オモロ研究と沖縄学の父・伊波普猷

伊波普猷（いはふゆう）

1876（明治9）年3月15日那覇市西村生まれ。

1886（明治19）年に沖縄師範学校付属小学校に入学する。1891（明治24）年沖縄県尋常中学校に入学、1895（明治28）年には中学校ストライキ事件の渦中の人となる。第三高等学校（現京都大学）を経て、1903（明治36）年に東京帝国大学文科大学（現東京大学文学部）入学。言語学を専攻し、沖縄研究を開始。沖縄中学校時代の恩師・田島利三郎を通してオモロ研究に取り組む。1906（明治39）年帝大を卒業して帰郷。1910（明治43）年設立された沖縄県立沖縄図書館の館長として、郷土資料蒐集、執筆活動、講演会等を精力的に行なった。1925（大正14）年上京。沖縄学を深め多くの著作を残し、1947（昭和22）年8月13日に死去。1961（昭和36）年浦添城址の一角に霊園が造営され、浦添の地に眠る。主な著作に『古琉球』、『古琉球の政治』、『校訂おもろさうし』、『沖縄よ何処へ』、『沖縄歴史物語』等。『伊波普猷全集 全11巻』（平凡社）。

伊波普猷と浦添と沖縄学と

1. 伊波普猷と浦添

おもろ研究と沖縄学の父と呼ばれる伊波普猷は、浦添城址の中にある霊園に眠っている。亜熱帯の木々に囲まれた静かな場所である。

伊波普猷は、東京帝国大学在学中に、「琉球文にて記せる最後の金石文」(1904・明治37年)、「浦添考」、「琉球固有の文字 ありしや」(1905・明治38年)という浦添関係の論文を発表した。今日では沖縄学の父と呼ばれる伊波普猷が、沖縄研究者として歩みだした頃の論考である。1906(明治39)年に大学を卒業し、沖縄に戻り文献・民俗資料の収集を始め、次々と論考を発表、また多くの講演などの活動を行なった。

その後、1910(明治43)年に開館した県立沖縄図書館館長として、郷土史料室の郷土資料を精力的に集め、研究を続けていた。後に伊波が沖縄を離れる決意を固めたのは、1924(大正13)年のことである。翌年上京した伊波普猷は、それまで以上に沖縄と向き合い沖縄研究を深化させ、次々と「沖縄学」の名著を発表し続けた。伊波が沖縄を離れてから23



第1回物外忌 1968年8月13日

浦添城址内に伊波霊園が出来、遷骨法要が行われた。

年目、終戦直後の1947(昭和22)年8月13日、その生涯を捧げた沖縄研究の仕事を終えた。

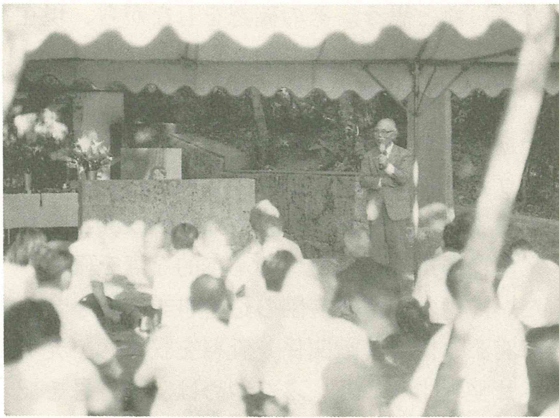
伊波の死について確認しておきたい点がある。伊波の死を悼み、柳田國男や折口信夫が中心となり行なわれた東京での連盟葬日時は、その年の10月17日(『伊波普猷全集11巻』年譜、1973、平凡社)と広く認識されているが、当時の『沖縄新民報』(9月5日)、『うるま新報』(9月26日)の報道から、9月16日に行なわれたとする判断が妥当であろう。そして10月26日には、国学院大学講堂で伊波の追悼講演会が開催されている。

東京帝大出身の伊波は「郷里の事情は私が1個の学究として立つのを許しませんでした」と述懐することがあった。明治・大正・昭和を通して、沖縄びととして郷土を学ぶことで、沖縄に向き合った存在は、時には時代状況に失望のふちへと沈んだこともあったかと思う。

自らの研究を深める事で、沖縄という泉の豊かさを人々の記憶に一と、それを何よりも望んだ存在は、死後14年目に沖縄研究の後輩達を中心になった顕彰事業の取り組みによって1961(昭和36)年、浦添の地に眠る事になる。浦添市(当時浦添村)の協力で浦添城址の一角に霊園が造られた(グラビア参照)。

それから伊波普猷の命日・8月13日には、伊波を慕う人々で物外忌が行なわれるようになった。物外とは、伊波の雅号で、程順則の詩の「物外楼上物外人」から取られたとされている。那覇西村の生家2階の書斎を物外楼と呼び、沖縄への思考を深めていった。この物外の号は、上京後ほとんど使用していない。

1955(昭和30)年には、伊波普猷所蔵資料の一部が琉球大学に伊波普猷文庫として所蔵。1973(昭和48)年には、沖縄タイムス社創立25周年事業で、伊波の業績を顕彰し、後に続く研究者の著作に贈られる賞として、〈伊波普猷賞〉が創設された。1975(昭和50)年に夫人・冬子が死去。



生誕百年記念。第9回物外忌 1976年8月13日（金）
新屋敷幸繁氏「浦添のこども」と題してスピーチ

1976（昭和51）年には、伊波普猷生誕百年記念事業が全県規模で行なわれ、『伊波普猷全集』（平凡社）の発刊、展示会、講演会等充実した内容で、伊波普猷の名と業績が沖縄人の記憶に残ることの意味において最大の取り組みであった。その後金城正篤、高良倉吉、外間守善、比屋根照夫らによる伊波普猷研究も盛んになった。

伊波の死後、各分野の沖縄研究は、確実に充実した成果を残していく。一方1980年代後半から伊波普猷研究は次第に数が少なくなる。同時に顕彰会も解散し、物外忌も組織で行なわれなくなった。浦添市役所文化課職員数名が、その墓参を継承してきた。

そうした中で1993（平成5）年は、伊波研究にとって久々の特筆すべき年となった。その年に『伊波普猷全集 全11巻』（1974—76、平凡社）が平凡社の創業80周年記念を機に、復刊されたのである。同時に復刊されたのは『知里真志保著作集』、『河野六郎著作集』であった。「ことばの研究を基軸に日本列島〈周辺〉の文化に目を向けた、各分野での比類のない達成であり、今後も一大礎石となり続ける偉大な業績である。」と未来へ向けての復刊であった。そしてその年には、鹿野政直『沖縄の淵—伊波普猷とその時代』

（岩波書店）も発刊され、伊波研究への新しい視点を示した。

物外忌は現在（1990～）、伊波普猷夫人の従妹で、東京時代伊波夫婦と同居生活も経験された比嘉美津子氏（浦添市牧港在）と一緒に、浦添市立図書館沖縄学研究室のメンバー、その他の研究者数名とで行なう墓参が、ささやかな物外忌となっている。戦前の伊波を知る数少ない語りべの比嘉美津子氏は、伊波普猷の思い出話を、物外忌前後に毎年地元の新聞に投稿されている。

2. 浦添市立図書館沖縄学研究室と物外忌

伊波普猷は、「おもろさうし」を初めとする文学研究、歴史・民俗研究を中心とする郷土研究分野に力を注いだ。その学問体形について伊波自身は「私の沖縄学の体系」（改版『古琉球』P36、1942、青磁社）と述べている。ちなみに金城朝永（1948）や1952（昭和27）年頃の新聞に使用される郷土研究には「琉球学」の語が多く用いられている。

現在、沖縄を対象にした様々な分野の研究は、細かな概念規定の議論は存在するが、一般的には総合して「沖縄学」と呼ばれている。地元の研究者も増え、多くの研究成果がある。その対象は専門性も高く、細分化される傾向にある。県内外、そして諸外国で沖縄学研究の裾野は広がっている。

こうした多くの分野、そして専門性の高い研究が隆盛を極めていく流れと平行して、県内の各市町村では、地道な市町村史（誌）編纂事業が取り組まれ、図書館には郷土コーナーが設置されて、足元の豊かさに触れる機会も多くなった。

浦添市立図書館には、郷土コーナーとは別に「沖縄学研究室」という、いささか固苦しい看板を掲げた部屋がある。1990（平成2）年4月に開室し、沖縄学に関する資料を幅広く活用してもらうために収集している。一般

の利用者と共に、沖縄学の内容に関する県外や外国からの問い合わせも多い。

この部屋では、伊波普猷の命日8月13日後に、沖縄学講座・物外忌記念講座を開催している。伊波と絡めた現代の沖縄学をテーマに行なわれ、毎年恒例となったこの講座は、年16回開催される中でも人気が高い。



1993年物外忌、この年刊行された鹿野政直『沖縄の淵』、高良倉吉『琉球王国』を墓前に報告。

今年は、伊波普猷没50年を迎える。約50年という歳月は、戦後の沖縄、そして沖縄学の歩みと重なる時間である。沖縄研究は、どのような泉を掘り得たのか。どのような豊かさを知る事ができたのか、そして何を知り得ていないのか。

伊波は、ニーチェの「汝自身を知れ、そこには泉あり」の言葉を繰り返し語った。その言葉をかりて「深く掘れ、己の胸中の泉、余所たよて水や汲まぬごとに」の琉歌も詠んでいる。自分自身の立つ場所を深く理解すれば、そこには泉のように豊かな世界が広がっているという意味だ。

伊波普猷没50年を記念して、伊波普猷、そして沖縄学が注目される機会の多い年になるに違いない。1個の学究として存在することを阻むものはない現代である。各分野それぞれの泉を存分に掘り起こせる自由こそが〈豊

かさ〉だと思う。その確認をしながら、現在にこんこんと湧く泉に触れたい。

静かに眠る伊波を父と呼ぶことで、権威という孤独な場所に置き去りにしないように…。そういう〈豊かな〉没50年を迎えたい。

浦添市立図書館では、伊波普猷没50年を迎えるにあたり、ふたつの基本的な点を確認した。一つは、伊波霊園の造営事業などを含む〈浦添と伊波普猷関係〉資料を収集し、充実させ整理すること、ふたつめは、物外忌を記念して毎年開催されている沖縄学講座、そして沖縄学研究室で収集した伊波普猷関係資料を『浦添市立図書館紀要』で報告することであった。新しい試みよりも、これまで行なってきた地道な活動をまとめることを主体に考えた。

また今回「特集 伊波普猷—没50年記念—」では、1972年に刊行された伊波普猷研究書『「沖縄学」の父・伊波普猷』（金城正篤共著・清水書院）の著者であり歴史学を通して沖縄学に取り組む高良倉吉氏（琉球大学教授・2代浦添市立図書館長）の「我が伊波普猷」と、近代思想史から伊波普猷に視点を注ぐ若手の研究者で、物外忌記念沖縄学講座でもお世話になった屋嘉比収氏（九州大学大学院生）の「〈琉球民族〉への視点—伊波普猷と島袋全発との差異—」の2篇の論考を収録することができた。

また既刊されている『浦添市立図書館紀要No.3』（1991）に掲載された、岸秋正氏（資料蒐集家・故人）「新発掘の伊波普猷論文について」と、小野まさ子氏（沖縄県公文書館職員・前浦添市立図書館沖縄学研究室勤務）「〈琉球史料叢書〉の出版記事紹介」の文章を、あえて転載することで、伊波関係資料としてまとめることにした。

また『浦添市立図書館紀要No.7』には、末次智氏（四條畷学園女子短期大学専任講師）の研究論文「伊波普猷と新おもろ学派—ナショナリズムと郷土＝沖縄研究—」が掲載されて

いる。この論考に関しては、発刊年が最も近いこともあり、No.8と共に情報が提供可能と判断し、転載をしていない。

3年程前「沖縄の8割の高校生が伊波普猷を知らない」という新聞ニュースを目にした。伊波を知らないというこの圧倒的な数字よりも、沖縄の歴史や文化や、多くの島々からなる沖縄の間取りや表情に、臍気な情報しか持ち得ない若い世代が多い中で、2割の学生が知っていたことの方に意外な印象を受け、嬉しくなった。

『浦添市立図書館紀要No.8』を発刊することで、図書館を訪れる若い世代に、少しでも伊波普猷の業績、沖縄学の表情を、紹介し情報提供できれば幸いである。

(栗国恭子)



1992年 物外忌



1994年物外忌

比嘉美津子氏を囲み、霊園にて
思い出話を聞く。



1996年物外忌 8月15日(台風のため2日後の物外忌)
折口信夫研究者の阪井芳貴氏も参加。

我が伊波普猷

高 良 倉 吉

伊波普猷という名前との出会い

「いは・ふゆう」という名前を最初に知ったのは、私が南大東島に住んでいた頃、おそらく中学2年生のことであったと記憶している。父が南大東島測候所に勤務していた関係で、私はしばしば測候所の施設を利用する機会があった。例えば、風力塔と呼ばれていたタワーのような建物の壁に向かってボールを投げ、ピッチングの練習をひとり楽しんでいった。風力塔に隣接するコンクリートの観測棟の一隅には卓球台が置いてあり、職員の大人相手にピンポンを楽しんだ。卓球場から廊下を行くと、機器類が設置されている通信室があり、その隣に小じんまりとした資料室もあった。資料室の書架に置いてある古めかしい書物、『古琉球』（おそらく青磁社版）を手にして、そのページをめくりながら初めて伊波普猷という名前に触れた。

測候所の資料室には沖縄の新聞はもとより、たしか本土の中央紙などもあった。60年安保の「紛糾」ぶりにリアルタイムで触れたような気がするの、資料室の新聞を目にした経験を持つからであろう。その頃私は野球週刊誌を定期購読しており（但し1カ月遅れではあったが）、阪神タイガースの吉田遊撃手の熱烈なファンで、彼が愛用した黒色のグローブを手に野球にうつつをぬかす日々であった。そういう少年時代に、伊波普猷という名前に接した。

家に帰ってその夜、父親に本の話をした。父は、あの人は伊波文学士といって沖縄の歴

史や文化を研究したエライ人だとあれこれ説明してくれた。通信機器をいじくる技術者である父が、台風襲来の際は家にも帰らない仕事人間である父が畏敬の念を持って語る人であるのだから、その方はきっとエライ人なのだろう、とその時は思った。

しかし、南大東島の中学校を卒業して首里高校に進学した頃は、伊波普猷という名前などすっかり忘れてしまっていた。

高校時代は受験勉強などにはさっぱり興味がなく、さりとて夢中になれるものもなく、ただぼんやり遊んで暮らしていた。その代わり、高校の図書館（とはいっても、ビルのワンフロアを利用した図書室といった程度のスペース）からさまざまな書物、特に歴史関係の図書を借りて読んでいた。その図書館に郷土史関係の図書があったためなのか、それとも古典を教えてくれた平山良明先生、あるいは美術を教えてくれた末吉安久先生の話の影響なのか、高校1年の頃に再び伊波普猷という名前をインプットされた。高校2年になると歴史、それも沖縄の歴史に何となく魅かれるようになっていたから、伊波普猷という名前との再会はそこその重みを持っていたのかもしれない。

伊波普猷という名前に再会したことに結びついている不思議な記憶がある。私の教室は3階で上階が図書館、1階には首里高校にしかない染織科があった。豆腐を戸外に干している風景、染め終わった布を晒している風景、教室で寡黙な女生徒が機織りを前に忙しそうにしている風景、それらが大東島から出てき

た私には異国の風景に感じられたのだが、その風景と伊波普猷の名が結びついている。

伊波普猷という先達との出会い

受験勉強をしなかったおかげで、大学入試にみごとに失敗した。琉球大学史学科はパスできるだろうなどと淡い期待を抱いていたのだが、案の定しくじった。少しばかり深刻になったので、1年間の浪人生活は自分でも不思議なくらい勉強した。そのおかげで国費と琉大史学科に通った。本人の気持ちは琉大にあったのだが、周りの勧めに負けて国費を選び、愛知県岡崎市に本部のある愛知教育大学に配置された。琉大に行きたかったのは、沖縄歴史の勉強をすぐにでもやりたかったからである。

愛知教育大学で学ぶようになったことが、結果として、私が伊波普猷と本格的に出会う契機となった。本土での学生生活はどこかしら切ない毎日で、心の底から無性に沖縄への渴きをおぼえる日々であった。沖縄関係の本をあつめては読み、休みで沖縄に帰ったときは琉大の図書館に通って沖縄関係の本を漁った。そして、休みが終わって愛知県に帰る段になった時、沖縄タイムス社から出ていた『伊波普猷選集』全3巻を求め、異郷の地でむさぼるように読んだ。

それ以後、休みで何度も郷土に帰る機会があったが、そのたびごとに『選集』には収められていない伊波の文章を探しては読み、必要な箇所はメモをとり、さらにコピーもとった。

その頃伊波の文章を読んで感じたことは、心底から沖縄へのこだわりを抱く先人であり、そのこだわりを生きるための方法として彼は研究者であったということ、沖縄の歴史や文化の安定したイメージを構築したいという強烈な問題意識を持つ研究者だということ、沖縄を語りながらも自らの語り口にどこかしら

不調和を感じる人だということであった。「なんで、そんなにしてまで自分は沖縄なのか」という疑念が、彼の文章の底で疼いているように感じた。そのような彼を前にして、卑小な私にも考えるところがあった。「この人の何分の一、いや何十分の一でもいいから、これからの自分の生き方のテーマにできないだろうか」と。

おそらく、人は感じたことや思ったこと、獲得した知識、引き裂かれるような矛盾のすべてについて文章を残しているわけではない。文章はたしかにその人によって書かれたものではあるが、書くという行為は当人が信じているほどに自己表現上の全体性を帯びているわけではない。伊波普猷はたしかに当時の沖縄人としては沢山の文章を書いた人だが、その文章は彼の人生の想念からすれば氷山の一角にも達していない、と学生時代の私は生意気にも考えていた。

京都での営みの前で

一通り彼の文章を読んだ後で、その次に彼の人生を追跡して、その足跡把握から彼の文章を深く読む必要があると思ったので、私は「伊波普猷の生涯」というテーマを自分に課した。愛知県での生活を終えて京都で2年間暮らした頃には、沖縄について述べた文章そのものではなく、沖縄を思って生きた彼の足跡が無性に知りたくなっていた。特に若き伊波は何を感じて精神形成の渦中にあったのかと思い、たとえば三高時代の彼の営みのことが頭にこびりついて離れなかった。彼が下宿していた辺りをうろついたり、彼なら散策したはずだと決め込んだ一帯を散策したりしながら、私と同世代だったはずの京都時代の伊波の気分を確かめようとした。

その具体的な項目の一つに、金城朝永が伊波から聞き取りして作成した年譜に登場する京都でのバイブルクラス通いの問題があっ

た。

少し調べてみると、伊波が通ったというバイブルクラスの教師、つまりオールドリッチ女史がいた教会は後に平安女学院という学校法人を経営するようになり、その大学に行けば何らかの手がかりが得られそうだと分かった。そう思った頃、私はたまたま頼まれて小さなレストランでアルバイトをしていたのだが、その店に偶然にも平安女学院女子短期大学の学生YHがアルバイトでいたのである。私は彼女に促されていろいろ話をしたが、ついつい伊波普猷のことを熱っぽくしゃべってしまった。それを聞いた彼女が、「その調査は私に任せて」と強い口調でいうので、任せることにした。

YHが調べてくれたのは、伊波が通っていたバイブルクラスの教師オールドリッチ女史の名前がたしかに大学の記念誌にあった、「そのコピーがこれ」という程度のものであった。私はその時点での彼女の調査成果を金城正篤氏との共著『伊波普猷 沖縄史像とその思想』（1972年）のなかに数行程度記したが、それ以上の突っ込んだ調査は別の機会にとっておこうと考えていた。

京都を去り沖縄に戻った後、それから3、4年ほどした頃に仕事で京都を訪れる機会があった。そのとき私は、YHがある企業に就職して妻子ある男性とままならぬ仲になり、その男と比叡山近くで心中をはかりすでにこの世にはいない、という話を聞かされた。その話を受け取って以来、私は伊波の京都時代について詳しい調査を行っていない。

孤独な同伴者

ほぼ同じ頃、私を切ない気分にさせた今一人の女性がいた。伊波冬子（雅号・忍冬）、すなわち伊波普猷の夫人である。

『伊波普猷』という本の原稿を書くために、夏休みで帰った時、金城正篤氏とともに冬子

夫人にはじめてインタビューし、その主な内容を『伊波普猷』に収録した。京都から沖縄に帰って沖縄史料編集所（当時は旧沖縄県立図書館の3階にあった）に勤務するようになった時、伊波の話聞くために、当時松川に住んでいた冬子夫人に勤務時間が終わるとよく会いに行った。夫人は生活保護を受けている身でありながら、小さな冷蔵庫にビールを冷し、私を迎えてくれた。

私には冬子夫人に聞くことが山ほどもあった。訪ねるたびに必ず質問項目を用意して、胸を踊らせ夫人の語りに耳を傾けた。沖縄のことなど考えたくもないし知りたくもないと自暴自棄になったことはないのか、ニューフェイス佐喜真興英の『女人政治考』について伊波はどういう感想を持っていたのか、彼はどのような料理を好みどのような嗜好品を愛していたのか、寂しそうにしている時にはハミングで琉球民謡を口ずさむようなこともあったのか、新しい事実を発見した時の興奮をあなたの前でどう表現したのか、お気に入りの論文が仕上がった時にあなたにそのチャーム・ポイントを説明することがあったのか、心を許した友人は誰しかいないと神秘的な面持ちで語ることもあったのか、政治家になっておけばよかったと冗談混じりに語ったことはないのか、などなど知りたいことが沢山あった。

私の質問が性急で、要領を得ない点多々あったと思うのだが、しかし、冬子夫人の語る内容に私は不満を感じた。夫人の口をついて出る言葉はオリジナリティーに溢れたものではなく、伊波の「弟子」たちから聞いた話や、世情に流布している「伊波評価」からの引用が多く、彼の最も身近にいたはずのパートナーの発言にしては臨場感が薄かった。どうしてなのだろうか、私は深い疑問を抱いた。

冬子夫人の遺稿集『白菊の花—忍冬その詩・短歌・随想』（1984年）を手にして、たしか

に伊波への愛情の深さを改めて確認はした。
たとえば私は、伊波が没して2年後（1949
年2月）に発表された冬子夫人の次の詩が好
きである。

死に跡

今日はどこを向いても
孤独の壁
あなたも顔をみせてくれない
いつくしみ深い聖母まりあの微笑さへ
よそよそしくて
こころを触れようとすればつとそれる
いたるところで蹉跎の連鎖
私のほしいのは
警戒のないこころ
説明のいらぬ了解
言葉のゆきすぎにもはつとしないですむ
対話
それはみんなあなたといっしょに消へて
しまった
生き残るかなしみを知らず
静かに眠ってゐるあなたの幸福
私の孤独をあなたもしらない

伊波夫人というよりも、一人の女性の思いの深さが滲み出ている。その夫人の気持ちを痛切に理解したいと思いつつも、それでもなお、夫が傍らで推進中であった「事業」の理解者、サポーターであったかどうかとのこだわりを、その頃の私は捨てきれなかった。夫婦なんてそんなものだ、という一般論で解消する手があるかもしれないが、しかし、この一組の夫婦が歩いた人生の意義を知りたいと思う者にはその解消策は納得できない。

つまり、言説としては語られなかった伊波普猷の数多くの「精神の動き」を知る身近な者は結局一人もおらず、強いていえば、伊波本人が思いの余多を背負ったままあの世に行くしかない孤独な結末となったのか、と私は

感じた。

「日本の中の沖縄」

自分のために書いておきたい「伊波模索」は沢山あるつもりだが、この文章ではこの程度の独白に止めたい。

「伊波模索」を通じて私が獲得した問題は、じつに単純なことだった。伊波普猷という人物を沖縄近代史に載せて、その思想と生涯を追求するエキスパートになることだけは避けたいこと、また、伊波普猷という人物を現代沖縄をめぐる思想論の場に連れてきて「根底的」な批評を加えるという、そうした論議の同調者となることも避けたいこと、そのような決意を確認したに止まる。その代わり、彼が解明を目指していた歴史上の問題のいくつかを引き受けて、些かなりともそのテーマの深化に貢献すること、それを自分の本職としたかった。そして、沖縄研究者であること、沖縄人であること、沖縄の今を生きていること、その三つをつなぐ自分なりの活動を実践してみたいこと、それも「伊波模索」から得た指針であった。

最後に少しきざっぽいコメントを挿入しておきたい。それは私自身の「伊波模索」の定点のような問題についてである。

伊波が生涯を通じて深く考察しようとした問題は、じつはあれこれの歴史論や文化論だったのではない。琉球処分によって強引に日本社会の一員に編入された土地とその住民について、それを前近代社会の延長線においてではなく、彼の時代にふさわしい概念によってどう位置づけ直すかということだったと思う。

琉球処分以前に存在したものは、琉球と呼ばれた島々であり、その土地に住む住民であり、そしてまたそれらの土地・人民を管理・運営する政治行政組織であった。処分によって政治行政組織が廃絶された時、その構成メ

ンバーやシンパなどは一定の抵抗を示したものの、土地や人民そのものは自らを規定し続けてきた枠組みに強いこだわりを見せた訳ではなかった。最後の国王、尚泰を処分勢力から守るために琉球各地でただならぬ騒擾が惹起する可能性はなく、処分者は拠点中枢である首里と那覇を掌握するだけで事足りた。処分に反対した勢力は旧体制の復旧を願望はしたものの、新たな時代を乗り切るためのマスタープランを提示して、琉球住民を糾合するという段階にまでは進めなかった。つまり、琉球処分に対置するだけの地域アイデンティティを、あの頃の琉球は発揮しえなかったのである。

伊波普猷の学問が提唱した論点とは、琉球処分によって「日本の中の沖縄」となってしまった現実、今更後戻りが不可能となってしまった段階にどう向かい合うか、という問題

だったと私は思う。伊波が好んで用いた「琉球人」「琉球民族」「沖縄人」などのネーミングにしても、琉球処分以前に実態として存在したかどうかということよりは、「日本の中の沖縄」となってしまった島々に居住する一つの社会集団の過去と現在を、あくまでも現在の立場に立って形容しようとした彼の苦闘の産物だと思う。

伊波が感じた段階よりもなお一層不逆的な構造が定着した現代にあって、彼の向かい合いの様式を確かめながら、私の場合はどうすればよいのか。この問題を、あくまでも歴史家としての実践を通じて引き受けたい、それが私の「伊波模索」のとりあえずのアウトプットであった。

その出力から20年余の年月が経過したが、私の人生路線にまだ変更はない。

「琉球民族」への視点

—伊波普猷と島袋全発との差異—

屋嘉比 収

はじめに

今日、沖縄研究及び「沖縄学」は、一般的に次の二つの支柱から成り立っていると指摘されている。その一つは、各分野の個別的研究を主体に、琉球弧を対象とした総合的・体系的な全体像の構築を志向する地域研究としての学術的性格。もう一つは、沖縄の人々のアイデンティティを追求する思想的性格、である(1)。

歴史分野においては、1970年代中半以降、その二つの側面のうちとくに「科学性」や「客観性」という指標が強調されて、前者の地域研究としての学術的側面に多くの力が傾注された。その大きな契機となったのが、復帰運動の過程でなされた沖縄近代史研究に対する、安良城盛昭氏による批判(2)であった。その批判の要点は、「復帰運動における現実感覚が歴史研究に投影された」(3)点であり、「これまでのほとんど全ての沖縄近代史研究は、沖縄近代の歴史に仮託して、沖縄の現代を論じていた」(4)点であった。そして、その具体的な問題として「琉球処分論」「旧慣温存期」等の諸論点について厳しく批判されたのである。

周知のように、その批判は沖縄の歴史研究に大きな衝撃をもたらし、一つの転機となった。安良城氏の批判は、資料批判や資料分析という学問上の手続きにおける非厳密性に対する批判を基底にしており、それに基づいた恣意的な解釈や主観的な論点に対するつよい批判を伴っていた(5)。とりわけ、それが大

きな衝撃力となったのは、前者の資料批判や資料分析という学問上の手続きに対する批判が根底にあったからだと思われる。

その点において、安良城氏の批判は決定的な意義を有しており、それはその後の沖縄の歴史研究に対し、圧倒的な影響力を及ぼしている点からもうかがえる(6)。

しかし、その決定的な重要な意義とは別に他方では次のような作用を、もたらしたことも指摘できるのではなかろうか。それは、その批判を契機として、それ以後の歴史研究において、沖縄研究のもう一つの支柱である、沖縄のアイデンティティの追求という思想的側面が、以前よりも看過されるようになったという点である。

繰り返すまでもないが、沖縄の歴史研究において、資料批判や資料分析という学問上の手続きにおける厳密性が強調されたことの意義は、決定的に重要である。それは、指摘するまでもない。だがしかし、他方でその「客観性」という指標になじみにくい、沖縄のアイデンティティの追求という思想的側面への関心が、無為に弱まっていった点もまた事実のように思えるのだ。

その背景に、「客観性」を重要視する歴史研究の姿勢の中に、沖縄のアイデンティティの追求という思想的側面が、主観的で感情的なイデオロギー的側面としてとらえられ、安易に押し流してしまう傾向性があったとはいえないだろうか。

復帰運動の過程でなされた沖縄近代史研究に対する安良城氏の批判により、その反動と

して沖縄研究の二つの支柱である地域研究としての学術的性格とは別の側面、つまり沖縄のアイデンティティの追求という思想的側面を、「たらいの水とともに赤子まで流す」という状況をもたらしたように思われる。

沖縄のアイデンティティの追求という沖縄研究の思想的側面を継承したいと考える一人として、資料批判や資料分析の厳密な手続きの重要性を認識しつつも、「客観性」という指標を強調する従来のあり方とは別の視点や方法をも同じく模索したいと考えている。

それは、今日論議されているポスト・コロニアルの視点やカルチュラル・スタディーズ(7)が、私たちに提起している論点とも十分に重なる問題のように思える。例えばその論点の一つに、「客観」性から「当事者性」へという視座の転換に関する指摘がある(8)。日本の研究状況において、その「当事者性」の視座を強調している論者が、在日韓国人二世の姜尚中氏(9)であることは、とりわけ注目される。姜氏が、その在日韓国人二世の位置から、在日問題を考察することによって、「当事者」の視座を主張するようになる道すじは、私たち「沖縄人」にとっても大いに参考になる論点ではなかろうか。

例えば、姜氏は、日本と韓国の近代史の始まりについて、両者の教科書の叙述の違いについてふれ、次のように述べている。

「〈Nation〉（国民）は〈Narration〉（物語）であるということからもわかるとおり、国民的共同体は何らかの形で『物語』共有によって成立している。歴史はそのような共同体の共通の記憶として『再＝現前化』作用を通じて『物語』の一部となっていくのである。とすれば、問題は、そうした『物語』としての歴史が、等身大の事実をふまえながら、どこまで『当事者性』の精神によって貫かれているのか、この点が検討される必要がある。『客観性』などもそれなしには成立しえないはずである」(10)。

この指摘は、「沖縄人」がみずからの沖縄の歴史をいかに書くか、という問いにおいても大きな示唆を与えてくれているように思う。

その「当事者性」の視座という論点は、「日本」におけるマイノリティーとして、在日朝鮮人と同様な位相に位置する私たち「沖縄人」にとっても、自らの存在や日本国家の問題を考察するにあたって、重要な意義をもっているのではなかろうか。その視座は、沖縄のアイデンティティの追求という思想的側面とも交感する、同じく重要な論点を提起しているように思われる。

以下、その「当事者性」の視座という論点をにらみながら、伊波普猷と島袋全発という二人の近代沖縄人の言説を考察する。具体的には、両者の「民族」観を考察することにより、「客観」性から「当事者性」への視座の転換について考えてみたい。そして、沖縄のアイデンティティの追求という問題が、その「当事者性」への視座という問題と深く関わっていることについてもふれたいと思う。

1. 伊波普猷の民族観

近代沖縄において、「民族」問題は最大のアポリアである。その問題は、「沖縄人とは何か」という沖縄のアイデンティティを追求する、「沖縄人」の切実な内的モチーフに根ざすとき、どこかで一度は遭遇する問題のように思われる。

沖縄の民族性に関する探求は、伊波普猷の沖縄研究の初発においても、最大の課題であった。その課題は、伊波の中で、一方において沖縄人＝琉球人の祖先の探究へとつながる問題であった。「世に沖縄人程その祖先を知りたがる人民は居まい」(11)とは、伊波の有名な言葉である。また他方では、その課題は伊波の中で沖縄人と大和民族との関係の探求へと関心が向かった。その祖先への探究と大和民

族との関係の探求という両者の関心がおのずとつながっている点にこそ、近代日本における沖縄特有の位置の問題が端的に示されているように思われる。

伊波は、1909（明治42）年5月26日の『琉球新報』掲載の「瀧口談話」に応じる形で、「自分が年来心にいだいていたこと」という自らの沖縄研究のモチーフについて次のように述べている。多少長い文章だが、当時の伊波の立場や心情が率直に吐露されているのでいとわず引用してみよう。

「正直にいへば自分は少年の頃から他府県人と沖縄人との間には一大壟壕があるやうに感じ、どうかしてこの大壟壕をうめたてて見たいと思っていた。後日沖縄人が大和民族であるといふことを自分が研究の立場から称へ出して、両民族の間に精神上のわたりをつけようとして、これも亦口に忠君愛国を称へなどしているのと同じく一種の愛国的行為であると確信するやうになつたのである。そして自分は今日まで他府県〔人〕に向つては可成沖縄の長所美点を唱へて沖縄を紹介し、本県人に対しては可成本県の短所欠点を指摘して青年を自覚せしめようとしている。自分は決して善い加減なことはいつていない積りである。併し人種問題は感情の問題である。感情は保守的なものであるから理屈の上では沖縄人が大和民族であると知つていても双方の感情は容易に承知しない」⁽¹²⁾。

その発言の後に、伊波普猷は、「無雙絶倫（ユニークネス）」の思想についても述べており、この談話は当時の伊波の思想を考察する上でも重要なものとなっている。この引用した文は次のように要約することができよう。伊波はここで、他府県人と沖縄人との間には一大壟壕があり、それを沖縄人は大和民族であるという自分の研究で精神上のわたりをつけようとしていること、自分自身の立場として他府県人には沖縄人の長所美点を沖縄人には短所欠点を指摘し青年に自覚を与えて

いること、理屈のうえでは沖縄人が大和民族だと知ってはいても双方の感情は容易に承知しないこと、等を述べている。

それらの発言は、伊波の思想における「日琉同祖論」、啓蒙家・経世家としての伊波の立場、伊波の中で意識されている「理論と実態との相違」の問題として、言い換えることができるのではなからうか。その三点は、伊波の民族観を考える上でも、けして看過できない論点のように思われる。

まず、伊波普猷の思想の柱の一つとされる「日琉同祖論」について考えてみよう。

ところで、伊波は初期の代表作である『古琉球』の中で「日琉同祖論」という語句を使っていない。伊波が使用したのは、「日琉人種同系論」⁽¹³⁾という語句であり、その事実は思ひの外興味深い問題を含んでいる。

さきに沖縄の民族性に関する探究が、沖縄人＝琉球人の祖先の探究と沖縄人と大和民族との関係の探求へと向かったことにふれた。それは、伊波の使用した「日琉人種同系論」という語句が、明治期の伊波の主要な関心において、沖縄人の祖先の探究が沖縄人と大和民族との関係の探求へと、一体化していることを端なくも示しているように思われる。

伊波の、いわゆる「日琉同祖論」の中で、その初期において沖縄人＝琉球人の祖先の探究が、沖縄人それ自身の祖先の探究ではなく大和民族との関係の探求に向かわざるを得なかった点は注目されてよい。そのことは、沖縄の民族性に関する伊波の探究の方法として一つの特徴を示しているように思われる。

さて、管見にふれたかぎり、伊波普猷が「日琉同祖論」という語句を最初に使用したのは、『孤島苦の琉球史』（大正15年10月）である⁽¹⁴⁾。その伊波の「日琉同祖論」を論じるにあたって、もっとも重要な論点は、「日琉同祖論」が伊波によって「発見」⁽¹⁵⁾されたという事実である。それは、伊波の手によって、初めて向象賢や宜湾朝保が見出されたこ

との意味と同義である。

向象賢や宜湾朝保は、伊波の言う「日琉同祖論」という考え方やその自覚において、『羽地仕置』や『琉語解釈』を表したのではなかった。そのことは、向象賢の『羽地仕置』が「日琉同祖論」だけについて書かれたものではない⁽¹⁶⁾、と言っているのではない。それは、近代沖縄人である伊波普猷の手によって、向象賢や宜湾朝保の書いたものが、伊波の「日琉同祖論」という認識枠組みにおいて、新たにとらえなおされたことの意義を指摘しているのだ。

向象賢の『仕置』をみると、われわれはすでに「日琉同祖論」を見出した伊波の視角において見ている。それは決定的である。

そこには、琉球が近代日本の国民国家に組み込まれ、制度的な確立を受けた中で発せられた近代沖縄人としての伊波による、認識の布置の転換がある。それは、伊波による一つの認識論的な「発見」といえる。その意味において、「日琉同祖論」は、沖縄に現われた近代日本の国民国家のナショナリティに関わる問題だともいえよう。

したがって、「日琉同祖論」の歴史として向象賢、宜湾朝保、そして伊波普猷というように歴史的な一つの線として連続的にとらえるのではなく、伊波によって向象賢や宜湾朝保が見出された意味を認識し、その切断のあり方を確認することが重要である。

その意味において、伊波の『古琉球』の中で「日琉同祖論」に関して、言語学の観点から日本語と琉球語との姉妹語の関係を指摘したチェムバレンよりも、いち早くそのことを指摘した人物として、琉球人の向象賢を挙げている事実⁽¹⁷⁾は重要である。

それは、向象賢が、チェムバレンよりもそれを早く指摘していたという事実が重要だ、ということではない。伊波の主張する「日琉同祖論」において、〈琉球人としての向象賢〉がそれを最初に主張したという指摘が、

日本国家の国民としての近代沖縄人のアイデンティティを考える上で、非常に重要な意味をもっているのだ。

向象賢によって最初に「日琉同祖論」が主張されたという伊波の指摘は、そのような文脈で読まれるべきであろう。それは、伊波が「発見」した「日琉同祖論」の問題を考える上で最も肝要な論点だと思われる。

そのことは、伊波の日本国家の理解と関わってくる。伊波は、「古琉球の政教一致を論じて経世家の宗教に対する態度に及ぶ」（明治45年3月、以下「政教一致」と記す）⁽¹⁸⁾で次のように述べている。

「十年前までは、日本の国家は血族的の国家でありました。すなはち血液を同じうし、神を同じうする所の人民の団体でありました。処が明治の聖代になつて、二千年前に手を別つて、南島に於て多少変種になつてゐる所の沖縄人が、其の団体の中に這入つて参りました。そればかりではない、これから少し前に全く人種を異にする所のアイヌも、其団体の中に這入つて来ました。それから近年に至つては、馬來人も這入つて来るし、支那人も這入つて来るし、朝鮮人も這入つて参りました。そして日本の政治家は今やこれら素性の異なつて異民族を包容して一大国民を造らうとしています。これ実に大日本の歴史にあつて以来の一大時期であります」⁽¹⁹⁾。

この引用文からわかるように、伊波は、日本国家を多民族による「混合民族国家」だと認識していた。伊波の「日琉同祖論」の主張は、このように日本を「混合民族国家」としてとらえた文脈で行なわれていた。それは、ほぼ同時期に主張された「日鮮同祖論」の論者が、日本国家を「混合民族国家」だと考えるあり方とほとんど同じである。

小熊英二氏によると、「明治期の多くの日鮮同祖論者は日本民族純血論を志向しておらず、むしろ積極的な混合民族論者」であり、それらは「けっして国体論者や神がかりの人

間からでてきたのではなく、それと対抗する側から出現した」^㉒という。1909（明治42）年4月来県し、沖縄教育会の講演会で言語学の観点から「日琉同祖論」を説いた言語学者・金沢庄三郎は、韓国併合後の昭和前期に「日鮮同祖論」^㉓という表題の著作を表して、多くの影響力をあたえた^㉔。

伊波は、『琉球人種論』（明治44年3月）で、その金沢の沖縄教育会での講演を引用して、自らの「日琉同祖論」の主張を補強している^㉕。このように、日本国家の「混合民族国家」の文脈の中で、「日琉同祖論」や「日鮮同祖論」が主張され、それが当時の言語学や人類学等の科学的言説で補強されるあり方は同様だといえる。

だがしかし、両者の間で決定的に異なっている点がある。それは、当時の「日鮮同祖論」が支配者側の日本人の識者から提出されたことに対して、「日琉同祖論」が被支配者側の「当事者」である、沖縄人の伊波普猷から提出された点である。その点は、重要な意味もっている。その伊波の「日琉同祖論」の主張には、伊波の啓蒙家・経世家の立場からの発言をみるとともに、伊波の苦悩をも思わざるをえない。伊波が、「混合民族国家」である日本国民の一員として、「日琉同祖論」を最初に唱えた人物として琉球人である向象賢を「発見」せざるをえなかった点に、その苦悩の一端を見る思いがする。

ところで、鹿野政直氏は『沖縄の淵』^㉖で、伊波の書いた文章を時系列的に分析するとともに、テキストの改訂に着目しながら、その構造や叙述の変化を分析した。そして、その変化を追うことで、伊波の思想性の変容に迫るという注目すべき試みを提示した。鹿野氏によると、『古琉球』の巻頭の史論四篇は、改訂増補されることによって、事実性を強調する純学術的な色彩の濃い文章から、経世論としての性格を顕著に帯びた史論性の強い文章へと傾斜していった。そしてその傾向は、

日琉同祖論の展開においても同様だと指摘されている^㉗。それらの指摘は、伊波の「民族」観を考えるとときにも、非常に示唆的である。

伊波は、『古琉球』の諸論文と同様に、『古琉球の政治』（大正11年3月）の発刊の時にも、旧稿である「古琉球の政教一致を論じて経世家の宗教に対する態度に及ぶ」（明治45年3月）に大幅に加筆し語句の手直しを行なっている^㉘。例えば、「民族」観に関連する語句に注目してみると、次のように書き換えを行なっていることが指摘できる^㉙。

①琉球民族→琉球種族

②沖縄人→琉球人

③吾々の祖先→古代日本人

とくに注目される点は、①と③である。とりわけ、①の琉球〈民族〉から琉球〈種族〉へと語句が書き換えられている点は重要だといえる。伊波は、この文章の二で河上肇の説^㉚を「先人未発の史論」として、その梗概を紹介しているが、その中で次のように記している。

「然るに是等の家族的団体はもと単一の氏族であつたが、後には数多の氏族が相集まつて種族を成し、更に数多の種族は又相合して遂に一の民族を成すに至るものである」^㉛その引用文は、河上肇の論文を伊波が紹介し解説した文章であるが、ここで重要なのは河上の論文を解説することによって、伊波が「民族」概念の発展段階を氏族→種族→民族としてとらえた点だといえる。とりわけ、伊波の中で、「種族」が「民族」の下位概念として位置付けられた点に注目したい。

さきにふれたように、伊波は「政教一致」から『古琉球の政治』への補筆の過程で、「琉球民族」という表現を「日本民族」「大和民族」との関係において、「琉球種族」へと書き換えを行なっていた^㉜。だがたしかに鹿野氏が指摘するように、伊波は「人種」と「民族」を「比較的無造作に使うことが多い」^㉝し、語句の使用に関して明確に区分

けているとは言い難い面もある。

しかし、「政教一致」から『古琉球の政治』への補筆の過程で、伊波の中で「民族」と「種族」との明確な使い分けが行なわれていることは間違いない。それは、自らが高唱する日琉同祖論の展開と河上論文の影響により、琉球「民族」を「日本民族」との関係において、その一支族である琉球「種族」へと、伊波が位置付けし直したことを示している。

事実、そのあたりから、伊波が沖縄人＝南島人⁸³の「民族性」を記述するときに、「日本民族の一支族」という形容詞がつくようになる。その点は、伊波の民族観を考えるときに、決して見過ごすことのできない論点ではなかろうか。伊波の叙述の中で、明治後期から大正期のソテツ地獄にかけて、従来の琉球民族という語句が「琉球種族」に書き換えられ、「民族」という語句が「日本民族」や「大和民族」だけに限定されていく点は、大いに注目すべき論点のように思える。

2. 島袋全発の民族観

島袋全発⁸³は、「郷土人の明日」（明治44年8月）⁸⁴の中で、「琉球民族の歴史」とか「郷土人の民族性」とか、「琉球人や朝鮮人の民族性」という表現を使用している。

その時期は、沖縄の他の論者においても、「琉球民族」という語句が、ごく普通に使用されていることを考えれば、全発の「琉球民族」「琉球人」という語句は、さほど目新しいものとはいえない。しかしここで注目したいのは、「民族」概念に対する伊波普猷の認識とは異なった、島袋全発の独自の認識枠組みについて、である。

民族概念に対する全発の認識がよく示されているのは、「民族性と経済との関係を論ず」（『沖縄毎日新聞』大正3年3月23日～4月2日）という論考である。それは表題のとおり、琉球の民族性と経済との関係を論じた12

回にわたる長文である。それは、その前に書かれた当時の全発の代表的な論考の一つである「郷土人の明日」（『沖縄毎日新聞』明治44年8月22日～25日）の最後でふれていた「琉球人の特質」を改めて詳細に論じている点でも、その問題意識を継承する重要な論考だといえる。とくに全発の民族観を考える上で、その第一回目の稿は重要で注目される。

その論考の最初で全発は、統治権に支配される「国民」と、文化にかかわる「民族」とを区別して次のような問いかけをしている。「朝鮮人や台湾人や樺太人も皆日本国民であるけれども大和民族ではない。然らば琉球人は奈何であらうか」と。そして間髪を入れずに、全発は次のように断じる。

「琉球人は無論日本国民であるけれども大和民族であるとするのには疑ひがある」と。

全発はその論拠として、イタリアの国際私法学者であるマンチーニ（Pasquale Stanislao Mancini, 1817～1888）⁸⁵の説にならいつながら、以下のように論じている。

民族には、「主観的方面」と「客観的方面」があり、その両面を観察する必要がある。後者の「客観的方面の標準」には、人種、言語、宗教、歴史、風俗、法令及び地形の七要素をあげながら、歴史以下の四要素については琉球の特殊性を指摘している。しかし人種・言語・宗教の前三要素については、「日琉同祖説により□略々解決がつけられ」、また「差異あるも姉妹的關係にあるとするのが通説となつて居」り、さらに「祖先崇拜教の盛なることは殆ど同じである」として、日本と琉球との同一性や類似性を指摘している。

ところが、民族の「主観的方面」についての全発の以下の記述は、伊波普猷の民族認識と比較して、非常に興味深い注目すべき論点が提示されている。全発は、民族の「主観的方面の標準」を「民族的自覚」として、次のように述べる。

「一般琉球人」に、そのような「主観的要

素たる民族的自覚」があるか否かというところ、
「困難な問題であるけれども浅く臆ろげながらにかゝる自覚」あるいは「自覚と云ふ程に至らずとも同類意識の作用によりて自覚の萌芽持つて居ると云ひ得る」と断言し、「一般琉球人は大和民族の事を『ヤマトンチュ』(大和人)と呼びて『ウチナーンチュ』(琉球人)との間の差別を認めて居るのである」と指摘している。そして、全発は次のように結論づけている。

「以上に依りて観れば、畢竟琉球人は大和民族と極めて親密な関係にある異民族であるとするのが妥当ではあるまいか」。

このように全発は、民族の客観的要素を重要視する見方に対して、その主観的要素である「民族的自覚」を強調することにより、琉球人と大和民族とは異なる「異民族」として考えたのである。その琉球民族が大和民族とは異なる「異民族」か否かについての真偽の程は別にしても、民族認識において客観的要素よりも主観的要素を重要視する全発の見方は注目すべき論点ではなからうか。

とりわけ、「ヤマトンチュ」「ウチナーンチュ」という「名づけ」による識別意識の指摘等は、後述するように、近年の民族概念の認識における傾向とも、十分にクロスする重要な論述のように思えるのだ。

3. マンチーニ説の受容

ところで、当時の民族性の研究動向をみると、前述の伊波の言説に示されているように民族の客観的要素である言語や人種等を分析した「科学的言説」への関心がほとんど一般的なだといってよい。しかし、全発はそのような視点をとることなく、主観的要素を重要視した、当時としては数少ない独特な視点をとっているように思える。全発は、そのような視点をどうして採用することができたのであろうか。その全発の民族認識が、今日からみて

も決して「非科学的視点」などではない点については、後ほどふれる予定である。

しかし、沖縄を考える論点をはじめ郷土研究全般に関して圧倒的な影響を受けた伊波普猷からも、民族を考える視点において、全発が自由で全く異なった視点をとることができたのは何故であろうか。そのことは、伊波と全発との世代間の関係を考える上でも、また当時の沖縄における伊波を中心とした知識の共有性という問題を考える上でも、大変興味深い問題を提出しているように思える。

前述の民族に関する全発の論考は、全発が京都大学を卒業する三、四ヶ月前に書かれたものであった。その論考でわかるように、全発が民族認識において全面的に依拠したのはイタリア人国際私法学者・マンチーニの説である。当時、ほとんど知る人がすくなかったそのマンチーニの説を、全発はどのように学び、受け入れたのであろうか。

それをみる前に、全発が大学時代に読んだ学会雑誌についてふれることにしたい。

全発の義弟である富名腰尚友氏作成による「島袋全発年譜」⁶⁴と令弟の島袋全幸氏作成による「略年譜」⁶⁵をみると、全発は、1910(明治43)年に京都帝国大学法科大学に入学し、1914(大正3)年に卒業している。今回、全発が在学中の「京都法學會雑誌」(5巻～9巻)を閲覧する機会があり、それによって全発の入学・卒業年月日について改めて確認することができた⁶⁶。またその法學會雑誌には、当時の法科大学の教官の論文とともに、「雑報」「彙報」で講義科目や試験科目の大学生活の一端を垣間見ることのできる記事等も掲載されており、有益であった。

さらに他方では、講演会や読書会等の内容紹介も掲載されており、全発が学んだであろう、当時の大学生活の様子の一部もうかがえた。そしてさらに、当時の法科大学の教官の論文を読んでもと、大学時代の全発が『沖縄毎日新聞』に投稿した文章⁶⁷に大きな影

響を及ぼしていた点も確認することができた⁴⁰。そのことは裏をかえせば、全発がその法學會雑誌を、いかによく読んでいたかを示す証左であるともいえよう。

しかもそれだけではない。その法學會雑誌だけでなく、京都帝国大学文科大学の文學會雑誌『藝文』に掲載された論文等を、学生であった全発が読んで、その内容の断片を月城や翠香らが居た『沖縄毎日新聞』に情報を提供⁴¹し、また自らが筆を取り投稿することを媒介にして、沖縄にいた伊波や同世代の識者達に大きな影響を与えていたこともわかった。そのことについては、伊波の文章や月城らの新聞記事によっても、その反響について確認することができよう⁴²。

さて、そのような事実をおさえた上で、全発の民族認識に決定的な影響を与えたマンチーニの説を、全発がどのようにして学ぶことができたかについて考えてみたい。その問題についても、今回その法學會雑誌を通覧したことにより、全発がマンチーニの説を論文や講演等を通して、学んでいった経緯がよくわかった。その経緯を記してみると次のようになる。

当時、京都法科大学教授・千賀鶴太郎が明治43年6月⁴³から1年間にわたって欧米留学を行っている⁴⁴。そして、帰朝後の明治44年10月に、その千賀教授が京都法学会において「教授学生併せて三百餘名稀ニ見ルノ盛会」のもとで、「『マンチーニ』ノ民族主義」という講演を行なっていることが確認できた⁴⁵。さらに、同教授がその「マンチーニノ民族主義」という表題で、『京都法學會雑誌』に論文を二回に分けて投稿⁴⁶していることがわかった。

全発が、そのマンチーニの民族主義に関する、千賀教授の講演および論文を読んで学んだことは疑いない。しかし、より興味深いのは、マンチーニの民族主義に関する千賀教授の講演や論文から、全発が何を受容し、何を受容しなかったかという問題である。

全発は、千賀教授のマンチーニの民族主義に関する論文に学びつつも、その主張を全面的に受け入れているのではない。そこには、全発が沖縄の状況に照らしながら、マンチーニの民族主義を、独自に取捨選択して学んでいるあり方がうかがえる。千賀教授は前述の論文で、マンチーニの民族主義の考えを紹介しながら、最初の論文の終わりで、それを九項目にまとめて書いている⁴⁷。そしてマンチーニの民族主義に対して、千賀教授は次のように批判している。

マンチーニは、民族を形成する客観的要素としての七元素は相対的であり、より重要視されるのは民族の主観的要素である民族的自覚心だと述べている。しかし、その民族的自覚心は民族に伴って起きるのではなく、むしろ国家の成立に伴って起きるものである。しかも、その政治的団体は一村一町から数個の国家まで広がりがあり、それで成立する自覚心は相対的なものであって絶対的ではない。そのような自覚心では、民族の区別の標準とすることはできないし、マンチーニの説には次の「二つの誤謬」があるとして、千賀教授は続けて以下のように批判する。

「民族ノ主観的標準タル所謂自覚心モ相対的ナレハ又其客観的標準タル所謂七元素モ相対的ナリ従ヒテ民族其者モ相対的タラサルヲ得ス決シテ画然互ニ分離シテ併立スルコト国家ノ如キ者ニ非ス氏ハ此点ニ於テ第一ノ大謬ニ陥レルモノ謂フヘシ。次ニマンチーニノ第二ノ大謬ハ所謂民族ヲ法的団体（即チ法人ノ一種）ト看做シ又国際公法ノ主体ト看做スコト是ナリ」⁴⁸

さらに、千賀教授は、マンチーニの説にはその「二大謬」とは別に「一真理」があると述べ、それは民族の客観的要素の七元素を具備している国家が、愛国心や団結力の強固な「民族的国家」だと称している点を挙げている。そして、その「民族的国家」とは「我日本」だと称して次のように断言する。

「凡ソ一箇ノ民族的国家ノ諸要素ヲ完備セルコト我ノ如キ者ハ他ニ比類アラス況ンヤ我皇室ノ万世一系タルハ我民族的国家ノ脊髄ト為ルニ於テヤ…国際間ニ於テ一等国ノ班ニ列スルヲ得ルノ今日アルハ我民族的国家ノ諸要素ノ全備セルニ基因セスンハアラス」(49)。

そのような、マンチーニの民族主義に対する千賀教授の論評に対して、全発が受け入れたのは、すでに述べたように、民族の形成における、その客観的要素よりも主観的要素である「民族的自覚」の重要性という論点だけであった。

全発は、マンチーニの民族主義に対する千賀教授の批判については、ほとんど受け入れていない。ましてや、千賀教授がその論文の最後で力説した、マンチーニの民族主義の「一真理」として評価した点、すなわち我国「皇室ノ万世一系タルハ我民族的国家ノ脊髄ト為ル」(50)という論点については、まったく気にとめていないのである。

そのことは、全発が大学での指導教授の論文から深く学びながらも、自らの判断によって、取捨選択を行なっていることを示すものである。それは、全発が大学の教授陣の諸知識を没主体的に受容して、受け売りをしたのではなく、沖縄に照らして重要な部分だけを引き出すという、積極的行為であったことを表わしている(51)。

4. 両者の民族観の差異

さて、伊波普猷が『古琉球』の中で、「日琉同祖論」の高唱とともに、他方で沖縄の「無雙絶倫（ユニークネス）」に根ざした「琉球意識」を強調したことはこれまで多くの論者によって指摘されてきた(52)。とくに、鹿野氏は、その日琉同祖論の高唱と琉球意識の強調との関連として、両者は「背反性」を有しているのではなく「相互触発性を帯びていた」という重要な指摘を行なっている(53)。

しかし、『古琉球』以後の伊波は、琉球意識の強調よりも、「日琉同祖論」の主張を「科学的言説」で補完しながら、さらに展開していった。そしてさきにふれたように、それと並行して、その叙述において「琉球民族」という語句を慎重に避けるかのように、「日本民族の一支族」である「琉球種族」という語句を使用するようになる。その背景には、伊波の中に、民族の主観的要素としての「琉球意識の強調」よりも、民族の客観的要素を「科学的」に分析した「日琉同祖論」を重要視する姿勢があった。

そしてその姿勢の前提には、民族を考える上で、その「客観的要素」を「科学的」に分析した学術的成果を、絶対的な論拠とする考え方がるように思われる。それは、伊波が沖縄人の民族性を探求するにあたって、「民族」の「客観的要素」を分析した言語学や人類学の「科学的言説」を論拠に、日琉同祖論を高唱していった伊波の啓蒙的姿勢に如実に現われている。

また、一方では前述したように、全発が、琉球一般人の生活感覚にある「ウチナンチュー」「ヤマトンチュー」という名づけによる識別を根拠に、民族の「主観的要素」を強調し、琉球の「民族的自覚」を主張していた。

そこには、民族認識に対する伊波と全発との〈差異〉が存在する。それは、民族概念の客観的要素を分析し、その「科学性」を論拠にしながらか「客観的事実」としての「日琉同祖論」を高唱していく伊波普猷と、一般沖縄人の生活感覚である名づけによる識別意識を根拠にして、民族の主観的要素である民族的自覚を強調し、「琉球民族」を主張する島袋全発との差異である。

そのことを確認して、私たちはようやく次のような問いを発する地点にまで、たどり着くことができたように思う。それは、従来「主観的意識」を根拠とする考えを「非科学的」として退けたのに対し、民族概念の客観

的要素を分析した学術的成果を論拠に、「客観的事実」としての「日琉同祖論」を高唱していく伊波普猷の姿勢を、ほとんど問うことがなかったという点である。「民族」認識において、その実体的側面である客観的要素を対象分析した、言語学や人類学等の「科学的言説」だけを論拠とする伊波の考え方に、果たして問題はなかったといえるのであろうか。

例えば、これまで伊波の「日琉同祖論」を問題にすると、「客観的事実」としての日琉同祖論と、「思想」としての日琉同祖論とに区分けされ、もっぱら後者の「思想」としての日琉同祖論だけが論議の対象となっていた⁵⁴。その前提には、伊波の日琉同祖論への「性急な批判」に対して、伊波の日琉同祖論の内容を慎重に検討すると、思想としての側面には問題があるが、学術的成果による「客観的事実」には何ら問題はないとする考え方が存在していた。

その基層には、「客観的事実」としての日琉同祖論は、学術的成果によって客観的に提起された事実であるから、思想のそれとはまったく異なっているという、ある種の理解があったように思う。すなわち、客観的事実としての日琉同祖論は、民族概念の「客観的要素」を分析した科学的論拠に基づいており、主観的な思想としての日琉同祖論とは、まったく異なっているというわけである。果たしてそうだろうか。いま問われているのは、民族の「客観的要素」を「科学的」に分析した学術的成果を論拠とするだけで、民族の全体像をとらえようとした、伊波のその民族認識のあり方そのものにあるのではないか。

伊波の民族認識に貫かれているのは、「客観性」や「科学的」分析に対する疑いのない信頼感である。しかし、民族認識において、民族の「客観的要素」を分析した学術的成果は、後述するように絶対的なものではない。繰り返すが、伊波が「日琉同祖論」を高唱していくあり方の問題点は、戦略論として日琉

同祖論を強調していく思想的位相の問題よりも、民族の「客観的要素」を「科学的」に分析した学術的成果を絶対的論拠とする、その民族認識のあり方にこそあるように思える。

それには、やはり新川明氏の言う伊波の経世家としての立場⁵⁵が、深く関与していると思われる。その意味において、あの滝口談話で示された伊波の自らの研究による「理論」と、沖縄の「実態」との相違に関する発言は、意味深長である。その発言が、伊波の苦悩を表わすものであることは間違いない。

しかしさらに、伊波が最終的に琉球意識の強調よりも日琉同祖論を高唱せざるをえなかったのは、経世家としての立場よりもむしろ、「客観性」という学術的成果に、全面的に依拠した啓蒙家としての伊波の認識枠組みにこそあったのではなからうか。それは、伊波個人の問題というよりも、近代日本における沖縄の位置から派生する苦悩とともに、当時の学術的研究における「客観性」を絶対化する「科学的言説」の枠組みにあった、ともいえるように思われる。

そして、その伊波の「民族」観とは別に、沖縄人の生活感覚から名づけによる識別意識を根拠に、民族の主観的要素である民族的自覚を強調して、「琉球民族」を主張した島袋全発の「民族」観の可能性を、私たちはいま改めて問題にしてもよいのではなからうか。

5. 民族認識の変容

さて、最近の「民族」に関する定義は、二つの基軸において考察するあり方が、説得力を持った論説によって語られている⁵⁶。その二つの基軸とは、「主観的」定義と「客観的」定義を両極とする一つの基軸であり、もう一つは「原初的特性」と「合理的特性」を両極とする基軸である。多くの論者が各々の視点から定義する「民族」概念は、その両軸を座標軸とした空間において分類され、布置され

ることになる⁶⁷。

その二つの基軸のうち、後者の基軸については、「民族形成論」としてとらえることができよう。そこで、「民族」の定義において近年よく議論されてる問題は、前者の基軸である「主観的」定義と「客観的」定義をめぐる問題だといえる⁶⁸。

それは次の三つに分けて考えることができる。第一の主観的定義は、民族の成員の帰属意識や同族意識などの民族的アイデンティティという主観的意識を重要視する考え方である。第二の客観的定義は、共通の出自、同一の文化、宗教、人種、言語などの客観的基準による民族成員間の共有する実体を重要視する考え方である。第三の考え方は、その主観的定義と客観的定義の両方を統合して考えるあり方である⁶⁹。

そのように「民族」を考える三つの考え方があるが、最近の人類学の動向としては、「民族」の実体的側面よりも主観性や状況的側面を、あるいはその原初的な固定的側面よりも合目的で操作可能性を、そして客観的規定よりも主観的な帰属意識を重要視する傾向がある、と指摘されている⁶⁰。

それには、これまで客観的基準とみなされる指標を、すべて兼ね備えた集団こそが「民族」とみなされてきたが、実態はどういそそのような集団はなく、その客観的基準の指標の中で特定の要因に優先権を認めることすら困難な状況が、背景にあるという⁶¹。

このように主観的な帰属意識が重要視される傾向とともに、個々の民族ではなく民族間関係や民族を重層的なものとしてとらえる視点も同じく強調されている⁶²。

その中でとりわけ興味深い論点を提起しているのが、「民族」を実体としてではなく、範疇としてとらえ、その際に「名づけ」「名乗り」の重要性を強調している内堀基光氏の指摘である⁶³。内堀氏によると、「民族」とは、人類の社会空間の「垂直的」諸階梯の中

で、基底の対面的共同社会と上蓋の全体社会（一般的には「国家」）との中間範疇である。そして、その中間範疇である「民族」の「水平的」分化のメカニズムとして、共同社会の側からの「名づけ」があり、その応答としての「名乗り」がある。「民族」における「名乗り」の実践は、卓越した儀礼的行為である以上に、社会的地位を形成する点で構成的な行為だという。それについて、内堀氏は次のように指摘する。

「この行為は他者との相互行為のなかで他者に対して自己を違いとして表現するだけでなく、同じ『名乗り』を用いる者に向けて自己同一をくり返し確認し、そのことによって『名乗り』の基礎にある『名』をいっそう物質的なものにみせる、すなわち疑似物質的なものに構成する」⁶⁴と。そしてその「名乗り」によって「集合意識」が形成され、「名」の疑似物質性によって「自己を表わす共同社会に時を越える実体の装いを授け」「民族の実体化」がなされると論じる。

最近の人類学の研究において、「民族」を考える上で、「名づけ」「名乗り」の重要性を指摘した内堀氏のその指摘は、私たちに何を指し示しているのだろうか。思うに、それは、民族認識において、「客観的要素」を「科学的」に分析した学術的成果を絶対的な論拠とするあり方への疑義であり、そしてこれまでほとんど看過されてきた「主観的意識」に対する再考だといえよう。その「主観的意識」が「名づけ」「名乗り」によって、「帰属意識」の形成に結びついていくことはすでにふれたとおりである。

「民族」を考える上で、主観的な帰属意識の形成において、その「名乗り」「名づけ」の重要性を主張した内堀氏の指摘は、民俗学の観点から日本単一民族論を批判するため、「沖縄民族の可能性」を考察した福田アジオ氏の次の論考⁶⁵と、底流において交響するように私には思われる。

福田氏は、その「日本単一民族論再考－柳田国男の沖縄認識を通して」という論考で沖縄について以下のように述べている。

日本列島は政治的に一つに統一され、それが「日本国家」であることは間違いない事実だが、そこに移住する人々はすべて「同一民族」ではない。少なくとも沖縄は、歴史過程において、独自の民俗文化を形成し、独自の政治社会を成立させ、国家をも形成した。その独自の政治過程はまた、沖縄独自の文化の発展に大きな影響を与え、今日の沖縄の民俗文化に表れていると述べて、次のような注目すべき指摘を行なっている。

「遡源的に思考して遙かな昔の同一性を言うよりも、現実の相違とその相違に基礎をおいたアイデンティティの存在に注目せねばならない。ウチナアとヤマトという二つに日本列島を区分し、ウチナンチュとヤマトンチュの二つに日本人を区別する沖縄の人々の日本認識を正統に評価することが必要に思われる」⁶⁶。とくに、「ウチナンチュ」と「ヤマトンチュ」の二つに日本人を識別する日本認識に、正統な評価を与えるべきだという指摘は重要であり注目される。その福田氏の指摘の背景には、次のような沖縄語に対する認識が基盤にある。

「沖縄語は、いわゆる薩摩弁や東北弁などと同じような方言の一つではない。一つの独立した存在として理解できるものである。現代の沖縄語と『本土』方言としての日本語は相互に理解不可能な言葉であり、その点では異なる言語として生活実感としては感じられるのであり、それを基礎にしてウチナアとヤマトは区別されているのである」⁶⁷。

福田氏が示唆するように、言語学の客観的な分類による「沖縄方言」という認識だけでなく、生活実感に根ざした「沖縄語」という語句が含意するのは、社会言語学という「コミュニケーションとしての言語」とは異なる「アイデンティティとしての言語」⁶⁸の側面

として指摘できるものであろう。そのような言語や独自の文化を背景にして、沖縄ではいまでも一般的に、「ウチナンチュ」と「ヤマトンチュ」という「名づけ」で、沖縄と日本との識別がなされているのである。

そのように、沖縄は、自らを日本本土と識別しながら、内堀氏のいう「名づけ」「名乗り」の構成的な行為によって、沖縄の集合意識を形成し、沖縄のアイデンティティを主張しているといえるのだ。

私たちはここで、一般の沖縄人が「ウチナンチュ」と「ヤマトンチュ」と呼ぶ生活感覚から、それを根拠として「民族」認識を考えた、前述の島袋全発の民族観との関連性に、思い至るのではなかろうか⁶⁹。

むすびにかえて

そのような文脈の中で、私たちは、民族の「客観的要素」を「科学的」に分析した学術成果を論拠とする伊波の民族観に比較して、これまで「主観的意識」を根拠としていることで、ほとんど顧みられることがなかった全発の民族観について、改めて注目する必要性があるように思う。その民族観は、「客観性」という指標よりも、生活感覚という「主観的意識」に根ざした考え方を重要視するあり方である。その全発の考え方を、現在の文脈に置き換えて、改めて再考すべき時期にきているように思われる。

断るまでもないことだが、私はこの小論で琉球が一つの「民族」である、ということを論じようとしているのではない。そのような大問題を論じることは、私の能力を遙かに超えており、ましてやこの小論で論じることのできないのは火を見るよりも明らかである。

この小論のモチーフは、「思想」としての日琉同祖論とは別に、これまで問うことさえなかった、「客観的事実」としての日琉同祖論という二分法的枠組みそれ自体を、疑うこ

とにあった。言い換えると、日琉同祖論をその二つに区分けし、前者だけを問題にして、後者を等閑視する問題構成のあり方への疑義だといえる。そして、その問題構成の背景にあるのが民族認識において、その「客観的要素」を「科学的」に分析した学術的成果を、絶対的な論拠とする伊波の認識枠組みであり、それがまた「客観的事実」という名において、ほとんど疑われてないことであった。

その問題を、いかにして問い返すことができるか、がこの小論の主眼であると言ってよい。したがって、私はここで、これまで積み重ねられてきた学術的成果の「科学性」について、問題にしようとしているのではない。それは、すでに述べたように私の能力を遙かに超えた問題である。つまり、私が問い掛けているのは、それを「客観的事実」という名において、「客観的要素」を「科学的」に分析した学術的成果を絶対的な論拠とする枠組みそのものを、疑うということであった。

これまで述べたように、近年の「民族」認識は、「客観的要素」を「科学的」に分析した学術的成果だけで民族を定義するあり方はほとんど支持を失い、むしろこれまで「非科学的」だとして問題にされなかった、「主観的」な「帰属意識」の重要性が強調されるようになっていく。それは民族認識において、「客観的要素」を「科学的」に分析した学術的成果を絶対的な論拠とした、従来の枠組みが相対化されていることを示すものである。

そしてそれに代わって、前述したように、「主観的意識」が「名乗り」「名づけ」によって「集合意識」を形成し、その構成的な行為で実体化された「帰属意識」の重要性が、強調されているのである。

その「主観的意識」に根ざして考えるあり方は、沖縄への「帰属意識」としてのアイデンティティの追求という問題と、深く関わっているように私には思われる。そしてその沖縄のアイデンティティの追求という問題は、

この小論の最初の方でふれた、「客観性」から「当事者性」への視座の転換という考え方とも、底流において確実につながっている視点のように思える。

私たちは、これまで「客観性」という名において、その「科学的言説」がはらむ問題点を、等閑視してきたといえるのではなかろうか。近年の、民族概念の認識の変容を考えるにあたり、あらためてその時代のディスコースを問い直す作業の重要性を、痛感せざるをえない。むしろ「民族」を、民族そのもののもつ実体としてとらえるのではなく、その時代のディスコースとして、時代の「語り」としてとらえた方が、むしろよいのではないかとさえ思えてくる。

しかし、そのような視点の差異こそが、伊波普猷が生きた時代と私たちが生きている時代との大きな違いだといえるかもしれない。その意味で、琉球人としての「民族」の実体を、痛切な叫びとともに探求せざるをえなかった、伊波の生きた時代の煩悶にこそ私たちは逆に思いを馳せるべきかもしれない。

そのようなことも感じつつも、だがいまの沖縄のアイデンティティの追求という問題においては、あらためて「客観性」という視座とは異なる、「主観的意識」と結びついた「当事者性」の視座の重要性を強調したいと考えている。その問題を考えるための一つの前提として、最後に、三たび福田氏の論考から引用して、この小稿を閉じることとしたい。

「ヤマトとウチナァ、そしてアイヌの三つの民族集団が対等・平等に居住するのが日本列島であり、その人々を政治的に統合するのが日本国家であるという理解が常識化すべきであろう。列島、国家、民族の安易な両一視が日本を得意な存在にしているのである。…そして、日本列島内に複数の民族が存在することを認めることが、その間に差別や区別を社会的に持ち込むことであってはならない。それぞれ独自の文化を形成してきた存在とし

て対等であることを自覚せねばならない。そのことが、さらにこの日本列島に他の多くの民族集団が居住することを認める精神につながっていくものである」⁷⁰。

〔註〕

- (1) 高良倉吉「沖縄学」(『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社、1983年)。
- (2) 安良城盛昭『新・沖縄史論』沖縄タイムス社、1980年。
- (3) 安良城盛昭、註(2)同書、459P。
- (4) 安良城盛昭、註(2)同書、326P。
- (5) 安良城盛昭、註(2)同書。
- (6) 高良倉吉・豊見山和行・真栄平房昭編『新しい琉球史像 安良城盛昭先生追悼論集』榕樹社、1996年。なお、同書で西里喜行氏が、民族の実体性を分析する視点から「琉球＝沖縄史における「民族」の問題－琉球意識の形成・拡大・持続について－」という表題で論じている。
- (7) とりあえず、『思想』(1996年1月号、10月号)、『現代思想』(1996年3月号)『批評空間』(1996年Ⅱ-11)等を参照。
- (8) 梅森直之「姜尚中を読む」(『歴史学研究』第693号、35P)。
- (9) 姜尚中『ふたつの戦後と日本－アジアから問う戦後五〇年』三一書房、1995年。姜尚中『オリエンタリズムの彼方へ－近代文化批判－』岩波書店、1996年。
- (10) 姜尚中『ふたつの戦後と日本－アジアから問う戦後五〇年』三一書房、1995年、50～51P。同じく、屋嘉比収「書評 姜尚中『ふたつの戦後と日本－アジアから問う戦後五〇年』」(『沖縄タイムス』1996年2月27日)を参照。
- (11) 『古琉球』(『伊波普猷全集第一巻』平凡社、34P)。その指摘は『古琉球の政治』同、457Pでも繰り返されている。
- (12) 「伊波文学士の談」(『伊波普猷全集第十巻』平凡社、336P)。なお、読みやすくなるため引用者が句読点をいれた。
- (13) 『古琉球』(『伊波普猷全集第一巻』平凡社、54P)。
- (14) 『孤島苦の琉球』(『伊波普猷全集第二巻』平凡社、229P)。
- (15) 「発見」という語句は、E・ホブズボウム、T・レンジャー編『創られた伝統』(前川啓治他訳、紀伊國屋書店、1993年)を前提にしている。原書の表題は、「The Invention of Tradition」であり、内容からしても「伝統の発見」がよいように思う。
- (16) 高良倉吉『おきなわ歴史物語』ひるぎ社、1984年、107～112P。
- (17) 『古琉球』(『伊波普猷全集第一巻』平凡社、17、54P)。
- (18) 「古琉球の政教一致を論じて経世家の宗教に対する態度に及ぶ」(『沖縄毎日新聞』明治45年3月20日～30日、10回連載)。
- (19) 「古琉球の政教一致を論じて経世家の宗教に対する態度に及ぶ」(『沖縄毎日新聞』明治45年3月30日)。伊波は、その文脈において、武士道に代表される旧思想や島国根性を捨て、いかに新道徳や新制度を形成すべきかという主張をおこなった。『古琉球の政治』での改訂部分では、朝鮮人の心を動かしているのが日韓同祖論よりもウィルソンの民族自決の宣言であることを日本国民は考えるべきだと指摘している。
- (20) 小熊英二『単一民族神話の起源』新曜社、1995年、91～92P。
- (21) 金沢庄三郎『日鮮同祖論』刀江書院、昭和4年。
- (22) 小熊英二、註(20)同書、97P。
- (23) 『古琉球』(『伊波普猷全集第一巻』平凡社、40P)。『南島史考』(同全集二巻、35P)。『孤島苦の琉球史』(同全集二巻、99P)。
- (24) 鹿野政直『沖縄の淵』岩波書店、1993。
- (25) 鹿野政直、註(24)同書、100～101P。なお鹿野氏は、伊波の経世論としての同祖論への傾斜の動機として、戦略論として提唱され

たこと、先駆者としての伊波の孤独感、の二点を指摘している。

- (26) 鹿野氏はその改訂増補の内容として、神託を告げる女性の叙述の増大、土地所有の共有性への思慕、奄美群島への視点、宗教の効用の主張の否定、という4点を指摘している。前掲書、162～165P。

- (27) 語句の書き換え数を記すと、①民族から琉球へは4。書き換えなしが1。それは琉球内の3種族が統合され琉球民族になる文脈で使われている。日本民族との関連においてはすべて琉球民族から琉球種族へと書き換えを行なっている。②沖縄から琉球へは9。沖縄から琉球への書き換えが多いのは、奄美群島の記述を増補しているためだと思われる。したがって、民族問題とは直接関係してないと考える。③吾々の祖先から古代日本人は1。なお、「政教一致」は「伊波普猷述」で文責は月城であるが、九回の末尾で正誤の訂正があり、それからしても伊波の確認があったと思われる。

- (28) 河上肇「崇神天皇ハ国家統一ノ一大時期ヲ画スモノナリト云フノ私見」(『京都法學會雑誌』第六卷一号 137～148P)。

- (29) 『古琉球の政治』(『伊波普猷全集第一巻』平凡社、425P)。

- (30) さらに、その直後に伊波が書いた「琉球民族の精神分析」(『沖縄タイムス』大正10年5月10日～13日、後『沖縄教育』に転載され『伊波全集11巻』収録。本稿ではそれを参照した)では、「民族性」という語句に代わって、「県民性」という語句が確認できるようになる。

- (31) 鹿野政直、註(24)同書、103P。

- (32) 鹿野政直、註(24)同書第6章参照。

- (33) 屋嘉比収「島袋全発一人物列伝・沖縄言論の百年」(『沖縄タイムス』1994年11月24日～1995年2月7日、51回連載)を参照。

- (34) 島袋全発「郷土人の明日」(『沖縄毎日新聞』明治44年8月22日～25日)。

- (35) 舛場準一氏によると、マンチーニはイタリアの法律家・政治家。ナポリ大学で法学博士を取得後、研究や弁護士活動に従事する。1848年にナポリで議席を得たが革命に加わりトリノへ亡命し、トリノ大学の国際法の教授職に就く。〈国際法の基礎としての民族性〉と題した開講の辞(1851)は内外に絶大な反響を呼んだ。当時イタリアの分割支配をうかがっていたオーストリア、フランスに対してはイタリアの民族としての独立を尊重すべきこと、また弱小な国家の分立状態であった半島内部に対しては国家を超えた共通の民族性による統一と統合を果たすべきことを説得力ある弁舌で訴えたからである。国際私法の領域で属人法の決定基準に民族性または国籍の本国法主義に基礎を与え、近代国際私法の礎を築いた三大学者の一人で国際的にも著名(『平凡社大百科事典』1985年版、262P)。またマンチーニの国際私法に関しては、江川英文『国際私法』有斐閣、1975年。折茂豊『国際私法の統一性』有斐閣、1955年を参照。

- (36) 『島袋全発著作集』おきなわ社、1956年。

- (37) 『沖縄童謡集』東洋文庫、1972年。

- (38) 全発は、京都帝国大学法科大学に明治43(1910)年9月に入学している。京都法学会会員として「明治43年11月現在の名簿」で初めて全発の名前が確認できる(『京都法學會雑誌』第五卷一号付録名簿12P)。また、全発は大正3(1914)年6月の卒業生で卒業式は同年7月13日に挙行され、その卒業生氏名の中に全発の名前が記されている(『京都法學會雑誌』第九卷八号228P)。

- (39) 全発が、京都帝国大学法科大学在学中に『沖縄毎日新聞』に投稿した文章は一日一回として百回を数えている。

- (40) 全発が、『沖縄毎日新聞』に投稿した「わが戸主制度の特質を論ず」(大正3年2月1日～6日)は、岡村司識教授が学生に課した研究問題のテーマであった。その時の

最優秀レポートであった本庄栄次郎氏の論考が京都法学会雑誌第八巻七号から十二号にかけて四回にわたり連載されている。

(41) 最初、京都文学會雑誌『藝文』第参年下巻(明治45年)に掲載された新村出「南島を思ひて」(伊波普猷著『古琉球』の感想、後に再版の際「序文」となる)は、その後すぐに『沖縄毎日新聞』(明治45年7月16日～20日)に5回にわたって連載されている。それから全発と月城らとの密な連携がうかがえる。なお、伊波から新村への圖書の寄贈の仲介は全発が行なった。

(42) 例えば、「京都大学・澤柳事件」に関する全発からの情報提供を受けて、月城が「粗枝大葉」で、その事件を論じている。屋嘉比、註(33)、同連載の17回目(1994年12月15日)を参照。

(43) 明治43年6月18日、「千賀教授ノ渡欧」の記事が掲載され、伯林大学記念祭で京都大学の代表で日独両国文の祝辞を携帯して参列する、とある(『京都法學會雑誌』第五巻七号、142P)。同じく、「千賀教授ノ伯林着」の記事(『京都法學會雑誌』第五巻九号、157P)で確認できる。

(44) 明治44年6月12日、欧米視察の途にあった千賀教授が無事帰朝した記事(『京都法學會雑誌』第六巻七号、139P)で確認。

(45) 京都法学会大会が、明治44年10月28日に法科大学第一教室で、教授学生併せて三百余名を集める「稀ニ見ル盛会」のもと開催され、そこで千賀鶴太郎教授が「マンチニー」の民族主義の題目で「滔々数万言ヲ費シ約二時間ニ渉ル大演説」を行なったとの記事とその講演概要が法学会雑誌に掲載されている(『京都法學會雑誌』第六巻十二号、138～139P)。

(46) 千賀鶴太郎「マンチニーノ民族主義」〔『京都法學會雑誌』第六巻十二号(明治44年12月)、14～29P〕、千賀鶴太郎「マンチニーノ民族主義」(前号ノ続キ)〔『京都

法學會雑誌』第七巻一号(明治45年1月)、63～73P〕。なお論文表題の通り、千賀教授は「マンチニー」と表記されているが現在の表記〔註(35)〕にしたがい、千賀論文以外は「マンチーニ」と記した。

(47) 千賀鶴太郎「マンチニーノ民族主義」〔『京都法學會雑誌』第六巻十二号(明治44年12月)、28～29P〕。

(48) 千賀鶴太郎「マンチニーノ民族主義」(前号ノ続キ)〔『京都法學會雑誌』第七巻一号(明治45年1月)、68～69P〕。

(49) 千賀鶴太郎「マンチニーノ民族主義」(前号ノ続キ)〔『京都法學會雑誌』第七巻一号(明治45年1月)、71P〕。

(50) 千賀鶴太郎、註(48)同論文、71P。

(51) 全発は、大正3年9月3日の論考「エヌエム会員東恩納寛仁君に」(『沖縄毎日新聞』)の中で、「心服する諸教授」として戸田海市、河上肇、石坂音四郎、米田庄太郎の名を挙げている。『京都法學會雑誌』第八巻十号(大正3年10月)から第九巻(大正3年)にかけて、四人の教授陣(戸田海市、神戸正雄、石坂音四郎、佐藤丑次郎)が「我が国民性」というテーマで論説を交わしている。この「国民性」のテーマの中で、「民族性」についても論じられており、それらの諸教授の論述からも影響を受けたものと思われる。それについては、別稿を用意したい。

(52) 伊波普猷の年譜・関係文献目録等の基礎資料の作成と代表的な伊波普猷論として比屋根照夫『近代日本と伊波普猷』(三一書房、1981年)を参照。

(53) 鹿野政直、註(24)同書、93～94P。

(54) 金城正篤・高良倉吉『伊波普猷』清水書院、66P。大田昌秀「伊波普猷の思想とその時代」(外間守善編『伊波普猷 人と思想』平凡社、1976年、143～207P)。

(55) 経世家としての伊波への言及は、新川明「経世家の自負と魅力ー伊波普猷の思想を

- 考える視点」(『伊波普猷全集』月報2)を参照。また伊波を論じた新川氏の著作『琉球処分以後』朝日選書、1981年も参照。
- (56) 李光一「エスニシティーと現代社会」(『思想』1985年4月号、191～210P)。
- (57) 李光一、註(56)同論文、二定義と解釈193～197P。より細かな基準で分類し整理したものに関根政美『エスニシティの政治社会学』(名古屋大学出版、1994年)の「第六章 人種・民族・エスニシティ理論の整理と検討」がある。
- (58) 名和克郎「民族論の発展のため」(『民族学研究』1992年12月、57巻3号、297～317P)。
- (59) 綾部恒雄「エスニシティの概念と定義」(『文化人類学2』アカデミア出版会、1985年12月、8～19P)。綾部恒雄『現代世界とエスニシティ』弘文堂、1993年。
- (60) 内堀基光「民族論メモランダム」(田辺繁治編『人類学的認識の冒険－イデオロギーとプラクティス』同文館、1989年10月27～43P)。
- (61) 内堀基光、註(60)同論文、29P。
- (62) 名和克郎、註(58)同論文、305～306P。最近の民族認識において主観的な帰属意識が重要視されている傾向を示す事例として「NIRA」が社会学・政治学・人類学などの多様な領域の研究者に委託して行なった、『民族に関する基礎研究』(NIRA、平成5年)での、「6の合意了解事項」を記すことにしよう。①“民族”とは「我々意識」を有する集団である。②“民族”とは主観的な集団である。③“民族”とはみずから名のり、他者から名づけられることによって形成される集団である。④“民族”とは重層構造をなしている様々な規模の集団である。⑤“民族”とは生成、分裂、消滅するダイナミックな集団である。⑥“民族”とは国家との緊張関係のなかでうごめく集団である。
- (63) 内堀基光、註(60)同論文、31～43P。
- (64) 内堀基光、註(60)同論文、35～36P。
- (65) 福田アジオ「日本単一民族論再考－柳田国男の沖縄認識を通して－」(川田順造福井勝義『民族とは何か』岩波書店、1988年12月、91～106P)。
- (66) 福田アジオ、註(65)同論文、105P。
- (67) 福田アジオ、註(65)同論文、102P。
- (68) J・ミルロイ/L・ミルロイ『ことばの権力』(青木克憲訳、南雲堂、1988年、168～179P。)また、社会言語学の田中克彦氏の一連の著書を参照されたい。本論文と関連する著書も参照。
- (69) それと関連して、最近復刊された新川明氏の『反国家の凶兇』(社会評論社、1996年)を参照されたい。新川氏は、その著書の最初で、沖縄と日本との「差異意識」の一事例として、「ウチナーンチュ」「ヤマトウンチュ」という「名づけ」による識別意識について述べている。同書は、「復帰運動」の過程で「政治の季節」の時に執筆され、実に二五年ぶりの復刊だが、最近再読してみて、その論理の内包する射程が、例えば近年の国民国家論とも十分にクロスする論点など、いささかの陰りもない強い印象を受けた。
- (70) 福田アジオ、註(65)同論文、106P。但し、日本列島が「三つの民族集団」から成り立っていると記述している箇所には異義がある。在日朝鮮人に代表される在日異民族への視点の重要性を強調しておきたい。

〔謝辞〕本論考に引用した『京都法學會雑誌』の閲覧、複写に関して九州大学法学部石田正治教授に、また新聞資料に関しては沖縄学研究室の徳元剛・栗国恭子・長間安彦の諸氏にお世話になりました。あつくお礼を申し上げます。

伊波普猷と末吉麦門冬（安恭）の交流

—明治末期から大正末期にかけて—

栗 国 恭 子

1. 伊波普猷と末吉麦門冬（安恭）

1910（明治43）年に沖縄県立沖縄図書館が創設された。東京帝大を出て沖縄に戻ったばかりの伊波普猷は、館長嘱託⁽¹⁾として「沖縄研究」に必要な郷土の歴史資料を精力的に蒐集し、郷土史料室の内容充実を図った。その後そのために奔走する時間が、大正13年に退職するまで続くことになる。伊波と共にその事業に尽力を注いだのは、郷土史家の真境名安興達であった。

また伊波は、同時に歴史・言語・宗教・民族衛生等の講演会を積極的に開き、1911（明治44）年に刊行される『琉球人種論』、『古琉球』を皮切りに著書論文も次々と発表していた。

琉球処分から30～40年の時間を示すこの時期に、日本化を推し進める政治的な力の壁、繁栄からは程遠い貧困が社会を覆う経済的事情等、幾多の問題を抱える沖縄社会の状況下にあって進められた郷土資料発掘の作業であった。

こうした伊波の活動を支えたのは、「日本国家に〈沖縄〉が正統な位置を獲得できるためには、沖縄が日本本土に完全に同化し、沖縄の社会や文化の個性を失うことではない。沖縄独自の文化、独自の社会を形成してきた歴史を認識したうえでそれを維持発展させることである」とする熱い〈沖縄への眼差し〉であった。

明治末期から大正期にかけて活躍したジャーナリスト・末吉麦門冬（安恭）は、県立沖縄

図書館が創設された同じ年に、落紅の雅号で『スバル』（第2巻4号）に次の歌を発表している。

親の親の遠つ親より伝えたる この血
冷やすな阿摩彌久（アマミク）の裔

当時の沖縄で推進されていく国家主義的な皇民化政策と近代化への胎動の中で、沖縄が持ち得た歴史そのものを見失いたくはないという強い思いが、南島の神々の末裔としての血、つまり民族としての血を熱く持ち続けたいとの発露となり、中央の雑誌へ発表されている⁽²⁾。

麦門冬は、明治末から大正末にかけて、沖縄の新聞や中央で刊行された雑誌などを舞台に言論人として活躍した人物である。職業人としては、新聞記者でその生涯を閉じている（大正13年没・享年39歳）。当時の沖縄の言論界で活躍する知識人達の多くは、〈近代化・日本化〉へ向けて政治的な社会変革を志し、啓蒙活動の要素を強めながらその筆を執り、新聞紙面を通して主張を展開した。

その中であって麦門冬は、10以上のペンネームを用いて淡々と文化的な記事を書き続けている。彼の視点は、歴史、民俗、絵画、芸能、言語、俳句や短歌等の詩歌、戯曲、小説、随筆、紀行文と人文、社会科学の幅広い分野に注がれている。また、その他の若い言論人達が、新しい時代の価値観を求めて中央の大学で高等教育を受けた経歴をもつ中、中学へも進学せずひたすら独学を続けその世界

を深めた麦門冬は、特異な存在ともいえる。交流のあった折口信夫は、麦門冬（安恭）を「南島第一の軟流文学・風俗史の組織者」と表現している（「組踊り以前」）。

彼の幅広い分野に注がれた思考、その思考の材料となる資料も、ある意味では〈粹〉を持たない自由さがある。こうした彼の個性と、ペンネームの多さ、発表論考がまとまった著作として刊行されないまま、その活動を若い時期に終了してしまう事情から、広く知られた人物とは言い難い。沖縄においてもその人物研究は、ここ数年始まったばかりである⁽³⁾。

同じ時代を生き、沖縄への其々の思いを抱いた沖縄学の先駆者・伊波普猷と麦門冬の二人は、政治の場ではなく文化の場で交流し続けてきた。その舞台は主に県立図書館であった。また当時の図書館には、伊波を慕う在沖の人々ばかりでなく、河上肇、柳田國男、折口信夫など来沖した〈沖縄〉へのそれぞれの思いを抱えた知識人達が訪れ、伊波をネットワークの中心にして交流を深めた場所でもあった。

当時の伊波が「私が蒐集した琉球史料を最もよく利用した人の一人」で「沖縄史鑑賞家としては沖縄一」だと語る程、麦門冬は頻繁に図書館を訪れた。伊波等の活動によって郷土史料室の資料が充実していく過程と、麦門冬がその資料を利用するために、図書館の伊波を訪れる度合いは同じ物であった。

県立沖縄図書館郷土史料室は、応接室も兼ねていた。史料室のソファに腰掛け、館長の伊波普猷、真境名安興、そして二人より10歳程年下である末吉麦門冬の常連三人組が、揃って盛んに話し合っている场景が頻繁に見かけられた。1921（大正10）年に来沖した鎌倉芳太郎は、当時の沖縄でこの三人は「琉球史学の三羽鳥」⁽⁴⁾と呼ばれていたとする。

また、伊波から「末吉麦門冬に申します、あなたが持って居られる伊沢氏の視話法何と

か云ふ本を拝借致し度いのです。」⁽⁵⁾と、麦門冬が所有する資料を拝借依頼する等の交流もあったようだ。時には、漢学関係の難語難句の解釈等を伊波から質問されたりもしている⁽⁶⁾。

又、麦門冬は、当時図書館の司書を勤め和歌を作っていた女性、後に伊波普猷の妻となる真栄田マカト（冬子、雅号：忍冬）にちなんで「忍冬に一字とられて寒さかな」⁽⁷⁾の句も残している。

〔註〕

- (1) 伊波が正式に館長に就任するのは、1921（大正10）年である。
- (2) 仲程昌徳「ことば咲い渡り」『沖縄タイムス』1991（平成3）年1月8日。
- (3) 新城栄徳『琉文手帖2号—野人・末吉麦門冬』、1984（昭和59）年、琉文。栗国恭子「末吉安恭（麦門冬）の民俗的視点」『地域と文化68号』P2～11、1991（平成3）年、ひるぎ社。「末吉安恭（麦門冬）と伊波普猷」『地域と文化72号』P10～13、1992（平成4）年、ひるぎ社。「人物列伝・末吉麦門冬①～③⑤」『沖縄タイムス』、1994（平成6）年8月11日～9月30日、沖縄タイムス社。「南方熊楠と末吉安恭（麦門冬）」『文学第8巻第1号』P107～110、1997（平成9）年、岩波書店等。
- (4) 「琉球絵画の系譜」『沖縄文化の遺宝』P167、1982（昭和57）年、岩波書店。
- (5) 『沖縄毎日新聞』1909（明治42）年11月13日。
- (6) 「真境名君の思出」『伊波普猷全集第10巻』P168、仲宗根政善・外間守善編、1976、平凡社。
- (7) 1915（大正4）年高等女学校を卒業した冬子は、その年沖縄朝日新聞社一周年記念事業ではじめられた「朝日歌壇」（山城正忠選者）に度々投稿。その頃から忍冬（にんとう）の雅号を用いるようになった。

2. 『竹陰詩稿』をめぐって

伊波と麦門冬の2人の交流から、ある詩集をめぐるエピソードを、麦門冬が残した文章「竹陰詩稿に就て」⁽⁸⁾をもとに一つ紹介しておこう。

1911（明治44）年、麦門冬が駆出しの新聞記者としてはじめて迎えた夏盛りの夜であった。麦門冬は、一人静かに泡盛を飲んでいた。机の上には、読み終えたばかりの『竹陰詩稿』が青燈の光の中に映し出されていた。この30枚程の綴りの薄い詩集は、先日友人の亀川盛英（亀川盛棟の息子）宅で、文学談義をする中で偶然に発掘した資料だった。

明治政府が琉球藩を廃し、沖縄県を設置した琉球処分（1879・明治12年）から32年の歳月が流れていた。

『竹陰詩稿』は、脱清人で知られる亀川盛棟⁽⁹⁾の遺稿である。盛棟の祖父は、琉球処分の際、琉球王府の存続を強硬に主張した親清国派の士族集団・頑固党の中心人物である亀川盛武（唐名：毛允良）。盛棟は祖父の影響を受けて活動に加わり、琉球処分に反対し清国に脱出していた仲間に、清朝に対して琉球救援を具体的に請願実行のため連絡役で清国に渡り、帰国した際に投獄された。釈放された後再び清国に渡り短い生涯を閉じている。

麦門冬は琉球国時代を体験していない。琉球処分後に生まれた世代である。しかし、琉球国の消滅のドラマの中で詠まれた盛棟の詩作が「千年の恨みを語る」様に感じ、「全章を貫きて一道閃々と走るは、忠魂義膽、国を思い君を思う淋漓（りんり）たる男兒漢の意気格表に著顯するを見る。嗚呼悲しい哉」と、格調高い漢詩を創作する幸薄な人物に心を動かされた。

麦門冬には、文学的にも優れたこの詩作品を的確に評価出来る人物、尚且つ国を思う若き作者の溢れんばかりの心情に添う程に理解出来る人物は、伊波普猷以外思い浮かばなかつ

た。

その頃の伊波は、年末発行予定の『古琉球』の編集執筆を手掛けていた。その年の3月に自らの琉装姿を写真に収め、7月上旬には『古琉球』の序文を書き終えていた時期である。そしてニーチェの言葉から「深く掘れ己の胸中の泉 余所たよて水や汲まぬごとに」の琉歌を詠んだばかりの伊波の自宅を、麦門冬は訪れた。

この年の夏（7月15日）に伊波は、那覇青年有志会例会への招聘に応じて「沖縄の代表的人物」と題して講演している。この講演内容は、琉球史の中で活躍した政治家・文人である羽地朝秀（向象賢）、蔡温、宜湾朝保の三人を取り上げ、薩摩侵攻（1609）前後の沖縄の政治経済状態の中で位置づけたものであった。

『竹陰詩稿』に目を通した伊波は、琉球処分を受け混乱した時代に翻弄された亀川のドラマチックな生涯と、その中で綴られた一つ一つの詩の美しさを称賛した。その時代に受け入れられなかったその志を頻りに憐れみ、琉球を思い消えていった小さな存在を、その思いを広く伝える必要があると麦門冬に語っている。

その年の12月に伊波の『古琉球』は、沖縄公論社から発行された。その中に収録された「進化論より觀たる沖縄の廢藩置県」と題された論文の文章余白には、廢藩置県推進派の宜湾朝保の和歌とならんで、脱清人・亀川盛棟（亀川里之子）の二つの漢詩が掲載されている。伊波は、琉球の地に訪れた新しい時間と共に生きる事を受け入れた宜湾の喜びに溢れた歌と、時代の変革の狭間で国を思いつつも、異国の地で生涯を閉じた亀川的那覇獄中で詠まれた慟哭の響きに満ちた歌を並べたのである。

この対照的な二人の歌を同時に並べた伊波の心中に注目したい。親日派と頑固党という琉球処分をめぐっての、それぞれに異なった

思想と行動を選択したタイプの詩を、ただ並べたのではない。

キーワードは<国を思う>つまり琉球を思う<愛国心>ではなかったか。この年の4月に京都帝国大学助教授・河上肇が来沖し、彼の沖縄人の愛国心のとぼしさ発言をめぐって喧々囂々の議論が展開された。世にいう<河上肇舌禍事件>の余韻が伊波の中に大きく残っていた時期である。

立場は違えどもそれぞれが時代に翻弄されつつもその根底には、愛国心なるものが支えていたとの表現として二人の歌を並べたのだと考える。

当時の伊波は宜湾朝保を「彼れが当時の琉球国朝野の人々より恰も売国奴視されつゝ、も尚琉球将来の事を思ふて、常に耳を首里内での議事に傾けてゐたといふことを以て如何に彼れが如何に国を思ふの情にあふれた政治家であつたかを思はざるを得ない。」⁽¹⁰⁾（「宜湾朝保の晩年」）と評価している。そして和歌を詠む宜湾については「沖縄の代表的政治家」（明治44）で「宜湾氏を伝するに當つて見逃してはならぬことは、琉球処分が近づいた頃に、宜湾氏の悠然亭に数百の琉球人士が集つて和歌を学んでゐたといふことであります。—中略—沖縄の上流社会の人士がかういふ風に日本の文学を研究してゐたといふことは、政治上無意味なことではなかつたのであります。これ亦両民族間の感情を融和するに与つて力があつたものでありまして、琉球処分の時に、あゝいふ平穏な結末を告げることの出来た理由の一つに数へることが出来ませう。」⁽¹¹⁾と述べている。

そして同時期、亀川の詩について麦門冬に「頻りに其の美を賞揚し且つ彼の志業を憐み、この人にて伝へざるべからずとせり。」（前掲「竹陰詩稿に就て」）と語つた伊波の心情。

『古琉球』に収められた文章には、論考構成技法として、琉球史の時代の人物の感懷を表現した「文章、琉歌、和歌」を引用し、論

考の空白部分を埋めることで、伊波自らの感懷を重ね合わせる表現方法が取られている箇所が少なくない。

当時の伊波の内部では、親日派と頑固党というそれぞれに異なる思想における琉球国を思う感情は、どちらも理解できる複雑さを持っていたのではないか。内在する自らの揺れ動く抱懷が並列の歌の並びとなつたのではないのか。

そしてまた和歌と漢詩とを並べる事で、大和文化と琉球文学の中心的素養としての漢学とを対比的に選択し、琉球処分における二人の立場の違いを象徴的に表したいとの伊波の意図も多少はあつたとも考えられる。

宜湾朝保

古（いにしえ）の人にまさりてうれしきは
この大御代（おおみよ）にあへるなりけり

那覇獄中作（竹陰堂詩稿の中より）

亀川里之子

獄裏操南音	獄裏 南音を操る
凄凄白雪吟	凄凄たる白雪の吟
回邦家尚遠	邦に回えるも家は尚お遠し
受苦恨逾深	苦しみを受けて恨みは逾い よ深し

*『竹陰詩稿』の原本は現在確認されていない。この詩集については、大正2年に来沖した横山健堂（黒頭巾）が、伊波と同様に麦門冬から紹介され、『薩摩と琉球』に数篇紹介している。亀川盛棟の漢詩は、その他には上里賢一が「琉球漢詩の旅(46)」（『琉球新報』1993年10月23日、11月13日、20日）で紹介された。その他『沖縄県史料近代4 上杉県令沖縄関係資料』P644（1983年、沖縄県教育委員会）、比屋根照夫「脱亜同化論の潮流」『アジアへの架橋』（1994年、沖縄タイムス社）でも紹介されている。

この時期の琉球を舞台にした大城立裕の小説『琉球処分』の中でも、亀川盛棟が描かれている。また、第二次世界大戦後、米国統治下により再び琉球の帰属問題が議論されている。そして1970年前後の＜日本復帰＞運動が展開された中、明治期の＜琉球処分＞に関する歴史的研究や言論が多く発表された。

そしてこの歌は、大正5年に再版された『古琉球』では略かれ、亀川盛棟の詩が紹介された場所には「琉球処分は一種の奴隷開放なり」の文章が新たに加わることになる。

1910（明治43）年に県立沖縄図書館が開館し、伊波普猷達が精力的に郷土史料を蒐集し始めた時期に、自ら発掘した一人の脱清人の詩集を紹介した麦門冬。

1938（大正13）年2月に伊波普猷と真境名安興らの努力によって収集された、沖縄県立図書館（明治43年設立）の郷土研究資料の目録（『琉球史料目録』）が刊行された。その中に麦門冬から紹介されたと思われる「竹陰詩稿」（写本か？）を確認することが出来る。この目録には“「竹陰詩稿」 亀川里之子、毛有慶遺稿、分類・九九六（詩文）、番号・二〇、冊数・一、表装・和”と記されている⁽¹²⁾。

史料好きで漢学の素養を持つ麦門冬を物語り、伊波普猷の『古琉球』初版本にまつわる小さなエピソードの一つである。

〔註〕

(8)『沖縄毎日新聞』、1913（大正2）年7月19日。

(9) かがめがわせいとう、唐名・毛有慶。1861・尚泰14年11月28日生まれ、1893（明治26）年7月17日没。

(10) 前掲『伊波普猷全集第10巻』P346、この文章は1914（大正）3年に書かれている。

(11)「沖縄の代表的政治家」『伊波普猷全集10』P50、1911（明治44）年の文章。

(12)『沖縄研究資料2・沖縄県立沖縄図書館郷土史料目録』P47、法政大学沖縄文化研究所編、1982（昭和57）年。

3. ニーチェの言葉

麦門冬が『竹陰詩稿』を発掘した時期に、『古琉球』の出版準備を進めていた伊波普猷が、ニーチェの言葉を直訳する内容の琉歌を詠んだことは先述した。ここでは、伊波普猷とそのニーチェの言葉について触れておきたい。

伊波は、初版には無かったニーチェの「汝自身を知れ、そこには泉あり」の言葉を、大正5年に刊行された『古琉球』再版の序に付け加えた。

鹿野政直は、この頃の伊波の思いを「沖縄びとの精神革命への希求の高まり」の表現と指摘している。そして、当時の伊波を「自力による解放への土壌を培い枠組みをつくることをめざ」す、「精神革命の布教者」（傍点著者）となったと位置付けている⁽¹³⁾。

再版『古琉球』が刊行された前年の大正4年には伊波は、「弱者の心理」と題した小文を残している⁽¹⁴⁾。この文は、王府時代からの沖縄人の特徴について述べた興味深い内容となっている。伊波自身も含めた沖縄人への嘆きにも似た、それでいて伊波の前向きな決意とが重なりあい、複雑に表現されている。

「慶長以前（ここでいう慶長とは1609年の薩摩侵入時期を示している）、琉球王国の人は自主の民であったが、それ以後は奴隷の境遇に沈淪し、一人残らず弱者であった」と手厳しい。さらに「世界中で沖縄人程泣く民族は多くなからう」、沖縄人の短所と長所についても「進む方は下手であるが守る方は上手である」、「クチゲセのやうに理屈はさうだが実際はさうはいかぬといふ。私は教育や宗教の力でこの宿命的的人生観を一変させる必要があると思ふ」と容赦がない。伊波自身につ

いても「自ら弱者であることを告白する」として、「ホントの強者になりたい」と述べる。そのためには、「悪民族性を根こそぎ」にし「人格の中心から動かして」「全人性を発揮させなければならぬ」と、かなり強いく精神革命への決意である。

伊波は、新しい時代の沖縄を歩き続けなければならなかった。それは、伊波自身が十分自覚していた通り、沖縄の人と共に未来の沖縄へと歩み続けていくことを意味していた。

初版の『古琉球』に掲載された、脱清人・亀川盛棟の「詩に溢れる時代に受け入れられなかった志への憐れみ」からも、「その思いを伝える事の必要性」からも、再版『古琉球』の中からその詩を削除する事で、揺れ動いていた自身の感情からも、決別した伊波がそこには見える。つまり亀川盛棟の詩が紹介された場所に「琉球処分は一種の奴隷開放なり」の文章を配置することで、自身が持つ古き時代への交錯した感傷から決別した新しい時代と向き合う伊波の『古琉球』を示したようにも思える。

「精神革命の布教者」となった伊波が序にかかげたニーチェの言葉の持つ意味は重要であろう。

伊波は、このニーチェの言葉をその後の著作でも、講演においても繰り返し語ったといわれている。その言葉をかりて詠んだ琉歌「深く掘れ、己の胸中の泉、余所たよて水や汲まぬごとに。」

自分自身の立つ場所を深く理解すれば、そこには泉のように豊かな世界が広がっているという意味だ。この言葉は、沖縄学の父・伊波という存在の与えた影響力だけでなく、〈言霊〉の如きその響きを持って、多くの沖縄びとを魅了し、時代を越えて繰り返し使われている。伊波はもちろん、当時の沖縄の言論人達も好んで使用している。

そして現在に至るまで多くの人々が、それぞれの思いで、それぞれの場面で引用し続け

ている言葉である。例えば、1995（平成7）年に開館した沖縄県公文書館内部にも、この言葉は大切に刻まれ指針のごとく飾られている程である。

問題は、伊波がよく使用したニーチェのこの言葉は、その言葉の持つ響きだけが重要なのだろうかという点である。その言葉を語ったニーチェという存在は、伊波にとって重要ではなかったのか。そして、この言葉はニーチェの精神のどういう背景から語られたのか。何からの引用なのか。どの時期に伊波は、どのような心境でこの言葉に触れたのだろうか。等等、次々に多くの問題が生じてくる。

今回は、問題の確認と、若干の資料を提示するに止め、問題の詳細な検討は別稿にゆずりたい。

さて従来の伊波普猷研究の中でも、この言葉の響きや心情の感覚的に共鳴する部分だけが強調され、この言葉の持つ具体的な情報（出典等）はあまり知られていない。

これまで伊波普猷像と寄り添うように広く流布したこの言葉について、当図書館沖縄学研究室には、一般の人々からは出典等の質問も多く寄せられる。

出典原本は『Die Fröhliche Wissenschaft』（『悦ばしき知識』）で、1881年～1886年にまとめられている。その中に収められた箴言「ひるまずに」の一節の中に、伊波が繰り返し語った文句を見ることができる。

ひるまずに

お前のたつところを 深く掘り下げよ！
その下に 泉がある！

「下はいつも——地獄だ！」と叫ぶのは、
黒衣の隠者流に まかせよう。

（信太正三訳）¹⁵

ニーチェによってこの言葉が綴られた時期と、彼の精神の背景に若干触れておこう。

『悦ばしき知識』は、ニーチェの著作として広く知られた『曙光』（1880～81年）と『ツァラトゥストラ』（1883～85年）の間にまとめられている。1882年8月、38才のニーチェは『悦ばしき知識 全4巻』を完成し出版。86年には『悦ばしき知識』に追加する第5巻「われら怖れを知らぬ者」を脱稿、それを加える形で翌年に『新版 悦ばしき知識』を出版したのである。

『悦ばしき知識』について、浅井真男は「青春時代のように生への陶醉」の気配がただよっている⁽¹⁶⁾と指摘している。その気配とは「賛歌的な雰囲気」であるという。また当時のニーチェを「この意志は現存の＜生＞から未来の＜生＞へと進展するのであるから、同じ生の＜自己超克＞の過程を辿らざるをえない」⁽¹⁷⁾とも指摘する。

＜精神革命＞への渴望がみなぎる伊波が、繰り返し使用した言葉は、「ひるまずに」未来へと進展しながら生きていくことを述べたニーチェの言葉であったのだ。教育と宗教の力で沖縄人の人生観を変えたいとの願望を決意した当時の伊波。『悦ばしき知識』という出典表題は単なる偶然なのか。「下はいつも地獄だ」と叫ぶ」ことからの脱出は、当時の伊波の心中そのものではないか。

私達は人生の中で、様々な人や多くの言葉と出会うことを日々繰り返している。しかしそれらすべてが、自らの心情に寄り添うように響き、感動を与えてくれるものでないことも十分に知り得ている。だからこそ心に強烈に響き、そして自らの中へと沁みわたり、自身の歩む生への指針となる言葉に出会えた時の喜びははかり知れない。このニーチェの言葉との出会いは、再版『古琉球』を出版する頃の伊波にとって、そういう意味合いを持っていたのではないか。そう考えるのは、浅慮の推測なのだろうか。

過去に出会い、それまで何でもなかった言葉が、自らの心理の変化で突如として輝きだ

すこともある。伊波はどの時点でニーチェのこの言葉にふれたのだろうか、学生時代なのか沖縄に戻ってからなのか…。先に紹介した琉歌が1911（明治44）年には創作されているため、それ以前に既にその出会いはあった。こうした問題と共に、明治・大正の段階で出版されていたニーチェの著作（原本・訳本）についても詳細な検討が必要になってくる。が、ここでは可能性のある資料として①登張竹風「ニーチェと二詩人」（明治35年、人文社）、②生田長江訳『ニーチェ語録』（明治44年3月、玄黄社）、③生田長江訳『ニーチェ全集 全10巻』（大正5～昭和4年、新潮社）、④山川均訳編纂『ニーチェ語録』（大正6年、高橋堂）を紹介するに止めたい。

現在伊波普猷についての研究は、新しい論点が次々と示され、盛んに議論が行なわれる状況にはない。1970年代半ばから80年代初め頃がピークで、研究テーマとしてのブームは終息した感がある。が、しかし私達は、残された総べての疑問に対して答えを得たわけではない。

上記の課題を含めて、書誌学、哲学的な研究視点からの伊波論を期待したい。

〔註〕

(13)『沖縄の淵』P114、1993（平成5）年、岩波書店。

(14)『伊波普猷全集第10巻』P351。

(15) 信太正三訳『ニーチェ全集8』、1980（昭和55）年、理想社。『悦ばしき知識』は訳者によっては『楽しい学問』と紹介されている。

(16)『世界文学全集27』P485、1970（昭和45）年、筑摩書房。

(17) 註(15)に同じ。

4. 伊波の上京と沖縄図書館長後任問題

県立沖縄図書館郷土史料室を舞台に資料の

充実に精力を注ぎながら、沖縄の研究を続けていた伊波が、館長職を退き沖縄を離れる決意を固めたのは、1924（大正13）年のことである。郷土史料室開設から14年の歳月が流れていた。

離任にあたっては、自ら沖縄各地を精力的に廻り、精魂こめて蒐集した資料の収められた郷土史料室を、信頼のおける末吉麦門冬と真境名安興に任せる事を期待していた（「嗚呼末吉君！」）。伊波個人の考えだけではない。県立沖縄図書館長の後任問題を扱う当時の新聞紙面にも「学徒の研究所だから館長の選定は大いに注意を払う必要がある」、「後任館長として呼び声高い二人、真境名・末吉の両氏なら何れでも適任者」と論じられている⁽¹⁸⁾。またこの件に関しては「太田朝敷も後任を希望している」⁽¹⁹⁾との噂も聞こえていた。

1924（大正13）年11月の雨の降る寒い夜であった。首里の石畳を傘を差した二つの影が、寄り添うようにおりてくる。「政治家の訪問みたいで嫌なこった」と小さな影が吐き出すように口を開いた。若い怒りを和らげるように「くすぐったあねえ」と大きな影が闇に笑う。比嘉朝健に見せた末吉麦門冬の最後の笑顔であった⁽²⁰⁾。

尚順邸からの帰りである。郷土研究のオピニオンリーダーである伊波普猷の東京行きが決定的となり、その後任が未定となっている県立図書館館長人事の件での訪問であった。

こうした渦中に麦門冬は尚順を訪問したのである。この訪問は、麦門冬の周囲で館長職を進言する比嘉朝健等友人の計らいで実現した。尚順のような政治的影響力を持つ存在に、図書館長職人事に関して配慮を要請する事は勿論、直接会って意見し頭を下げる事すらそれまでの麦門冬にとって縁遠いことであった。政治力を持つ官吏でもなく、社会的に力を持ち合わせてもいない。一介の新聞記者として歩いてきた麦門冬は、政治的と呼ばれる種類の運動方法を知らなかった。ただ麦門冬は何

よりも、郷土史料室をこよなく大切に思っていた。彼が主筆を務める沖縄タイムス紙面で発表してきた郷土研究の論考も、こうした資料無くしては生まれ得ないものであった。

ソテツ地獄と呼ばれる程、沖縄社会の経済は疲弊していた時代であった。沖縄の発展を、沖縄の行く末を熱狂的に議論していた知識人達が次々と沖縄を離れていた。その中でも沖縄に在って郷土研究の中心的役割を果たしていた伊波が、沖縄を離れる事は郷土史料室存続への大きな柱を失う事を意味した。その後の地元での郷土研究発展へ向けて暗い影を落としているかに思えた。行政サイドがどのような処置をするのか安心出来る状況ではなかった。

麦門冬にとって、郷土研究の中断は心痛以外の何者でもない。寂寥とした気持ちを抱え数日過ごしていたが、決心して比嘉朝健と男爵邸に出向いてきた。慣れぬ行為に不安な面持ちで麦門冬は語り始めた。郷土研究が沖縄にとっていかに大切なものか、郷土資料の蒐集・保存が重要であるかを静かに丁寧にしかし熱情をもって話した。聞き終えた尚順は、依頼を承諾し口添えする旨を示した。那覇からの珍しい訪問者の二人を尚順は料理や酒で厚く遇した。古都首里の鬱蒼とした福木に囲まれた静かな邸でのあまりにも静かな宴であった⁽²¹⁾。

〔註〕

(18)『琉球新報』1924（大正13）年11月15日。

(19)「宮里栄輝回顧譚（一）－伊波先生の思ひ出－」『沖縄思潮』創刊号P59、1974（昭和49）年、沖縄思潮編集委員会。

(20) 比嘉朝健「噫末吉麦兄よー末吉安恭君を悼む(3)」『沖縄タイムス』、1924（大正13）年12月16日。比嘉朝健は、「尚侯爵家御後絵に就いて」等の論考を残す琉球美術史研究家である。比嘉の父が尚順と福州貿易調査委員会の同僚でもあった関係（新城栄

徳「琉球美術史家たち」『新生美術 8・9号』P60、1990（平成2）年、新生美術編集委員会）から、この訪問の仲介役として同行している。

(21) 註(20)と同じ。

5. 麦門冬（安恭）の死

この訪問から日の浅い11月下旬、末吉麦門冬に突然の死が訪れる。寒く暗い夜のことである。

末吉麦門冬は、1924（大正13）年11月下旬、明治橋から水底へと転落したと語られる突然の事故で39年間の短い生涯を閉じた。

12月の上旬になって漸くその死が家族によって確認されたため、伊波が訃報を知ったのは12月10日前後と思われる。

その死への追悼は、伊波普猷、真境名安興（笑古）をはじめとするのべ20人の友人たち²²が『沖縄タイムス』紙面に8回（12月13日～21日）に渡って文章を寄せている。

12月13日午後一時、伊波普猷は県立沖縄図書館郷土史料室で麦門冬への追悼文を書き終えた。10歳程年上の伊波が「チャーガ サイ」と挨拶する²³と、はにかみながらも悠然と史料室に入ってきては、大きな体を揺すって最近目を通した歴史書や珍本、漢詩や小説、芸能の取って置きの話する。博覧強記ぶりを発揮しながら快活に笑う麦門冬の姿を思い出していた。図書館を訪れては、あれこれ史料を閲覧していく。伊波や真境名が丹念に整理して書架に整然と並べてある史料を、片っ端から所構わず開いて見ては無造作にして置くこともしばしばあった。その無頓着さを押し通し、回りを構わない態度を風刺して、時々伊波は「唐人（トウンチュー）」と言ってからかった²⁴。麦門冬が自宅の書斎に籠もり原稿書きで外出できない時はいつも、愛娘が大きな風呂敷包みを抱えて図書返却の使いで来館した。その小さな手に新しく借り出す図書の

リストが握られていた²⁵。

伊波が『古琉球の政治』を発刊した際にも、麦門冬個人的に寄贈している。そしてその書評をいち早く『沖縄タイムス』や紙面に掲載したのも麦門冬（雅号：莫夢生）であった。

手元には麦門冬写本の琉球史料「球陽」の出版予定原稿が残っている²⁶。

それらの思い出を辿ると底知れぬ哀感に襲われた。伊波自身がこの図書館で過ごす残された時間も、半月程を残すわずかなものであった。伊波と麦門冬とが関わり合った時間と、伊波が県立図書館で過ごした時間とは符合している。この余りにも偶然で、象徴的な時間の重なり。沖縄を離れて上京するという、ある意味で沖縄との決別を決意した伊波にとって、麦門冬の死は、沖縄に在って沖縄を見つめた伊波自身の時間の終焉を象徴していた。

伊波は、麦門冬の死に、次のような追悼文²⁷を寄せている。

嗚呼末吉君！

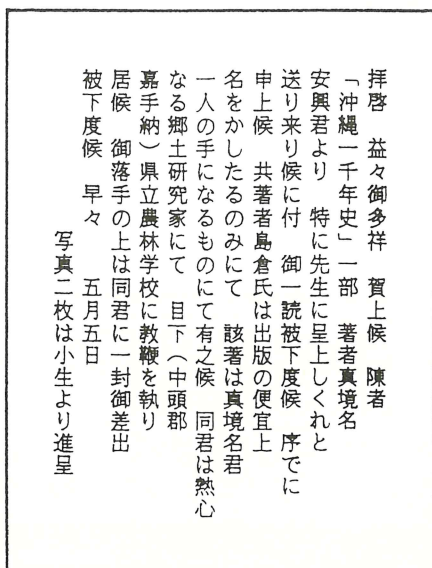
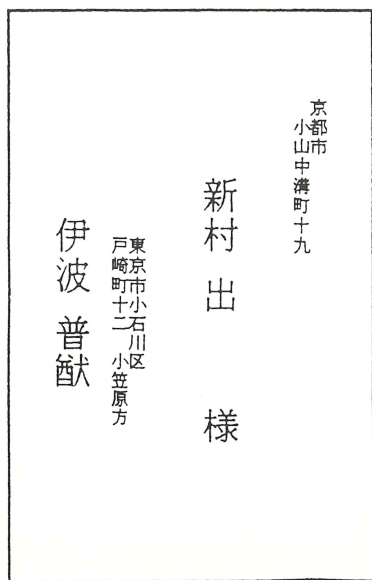
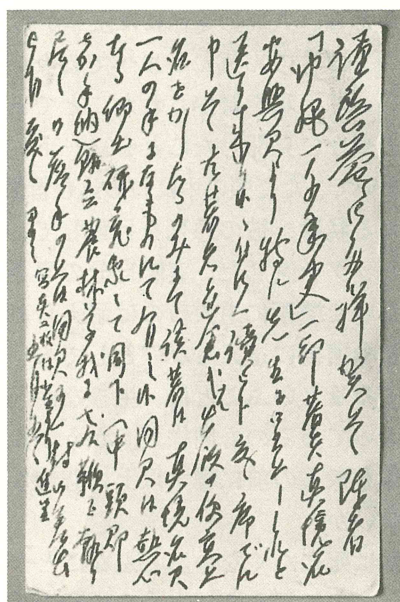
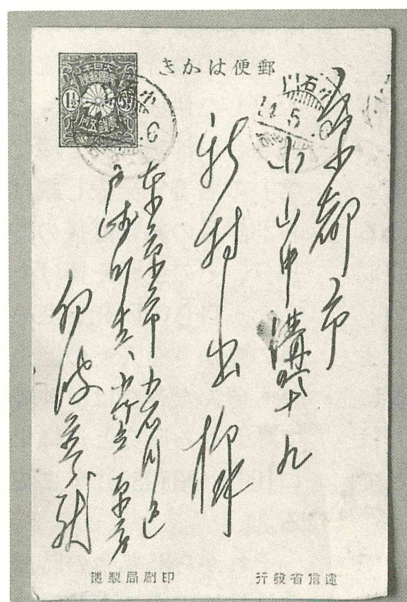
末吉君は実際死んだのか。今にも何処からか帰って来るような気がしてならない。

あれだけの知識が一朝にして消失したのは耐へられない。ことにそれが彼の頭の中で温醸して何物かを創造しようとしてゐたかと思うとなほさら耐へられない。

末吉君は私が蒐集した琉球史料を最もよく利用した人の一人だった。十五年間の私の隠れ家であった郷土史料室を見棄てるに当って、私は君と笑古兄に期待する所が多かったが、突然君に死なれて、少からず失望してゐる。君の蔵書と遺稿とは県立図書館に保管して貰ふことになってゐるが、後者を整理して他日出版するといふことは、彼の友人達の為さなければならぬ義務であると思つてゐる。

末吉君の急死によって思ひあたることは、柳田〔国男〕先生がオモロの校訂を催促さ

沖縄学研究室所蔵の 伊波普猷関係資料



伊波普猷から新村出宛て葉書

1993（平成5）年6月に島田善博氏（奈良県生駒市在）より寄贈資料。当時浦添市立図書館長の高良倉吉氏が「新村出宛の伊波普猷の葉書」（『地域と文化』No.77・78号、1993. 8、ひるぎ社）で紹介している。

葉書は1925（大正14）年5月5日に書かれており、消印は5月6日。『伊波普猷全集』にも未収録の資料である。『沖縄一千年史』（1923・大正12年6月刊行）を著書・真境名安興から、言語学者・新村出への贈呈を頼まれた伊波が、本の送付と共に若干のコメントをした葉書である。その年の2月に上京したばかりの伊波に、真境名が託したのだろう。

『沖縄一千年史』に関して「共著者島倉氏は出版の便宜上、名をかしたるのみにて、該者は真境名君一人の手になるもの」と述べており、発刊事情及び伊波と真境名安興との交流を知る資料である。

伊波普猷から柳田國男宛て 書簡（年賀状）

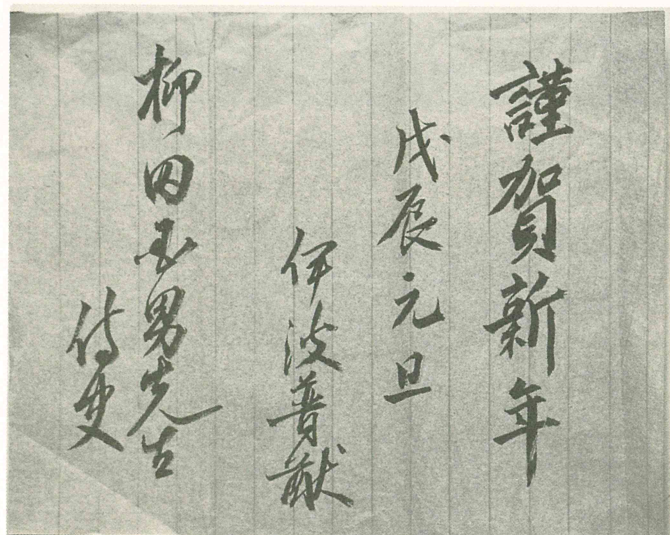
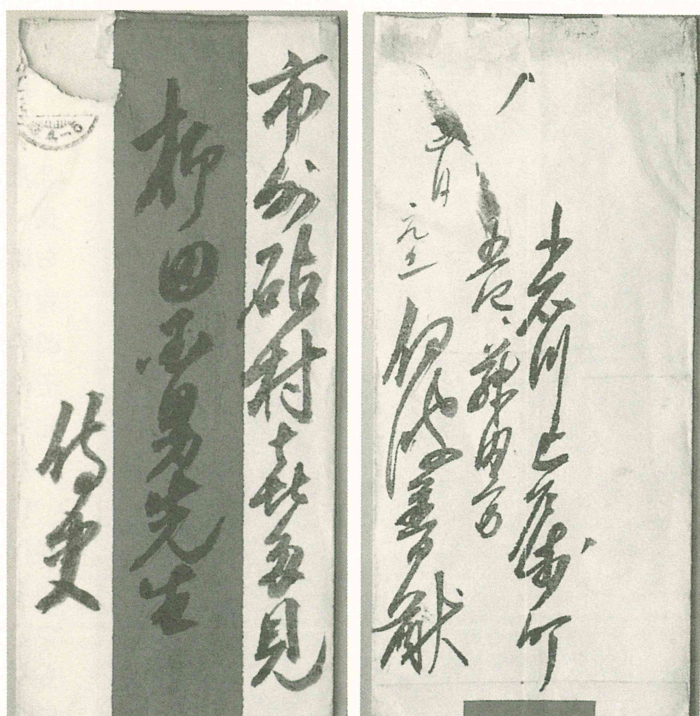
1928（昭和3）年正月の伊波普猷から柳田國男に宛てた年賀状。年賀の挨拶らしく、罫線入りの朱紙（縦19.5cm、横24.7cm）一枚に毛筆黒墨で「謹賀新年」の文字が書かれている。

伊波と民俗学者・柳田國男との交流は、著作『古琉球』（1911）を柳田へ贈ったのがきっかけで、1921（大正10）年来沖した柳田國男は、県立沖縄図書館の伊波を訪れ、オモロ研究・郷土研究の重要性を説いた。この年柳田の影響を受けて、国文学者の折口信夫も来沖。この両雄の影響もあり、その後の日本民俗学の分野は、南島研究が盛んになり、その視点は沖縄に日本の源郷のイメージを求めたものとなっていく。

1925（大正14）年に上京した伊波を加えて、柳田、折口、比嘉春潮、金城朝永、島袋源七等のメンバーで南島研究は、東京を中心に盛んになった（南島談話会など）。

柳田、折口は、『校訂おもしろさうし』（1925）等の著作発刊にも尽力し、伊波の東京での研究を公私共に刺激し励ましている。

この年賀状は、伊波が上京して迎えた3回目の正月に書かれている。前年には、柳田の尽力で帝国女子専門学校講師の職も得ている。



柳田國男（やなぎだくにお）

1875（明治8）年兵庫県生まれ、1962（昭和37）年没。民俗学者。1921（大正10）年来沖。伊波普猷らと交流、南島関係の著作『南海小記』（1925）、『海上の道』（1961）などで、日本における稲作及び文化の伝来が、南方から北上したとする〈海上の道〉の視点を打ち出し、民俗学の南島研究に強い影響を与えた。



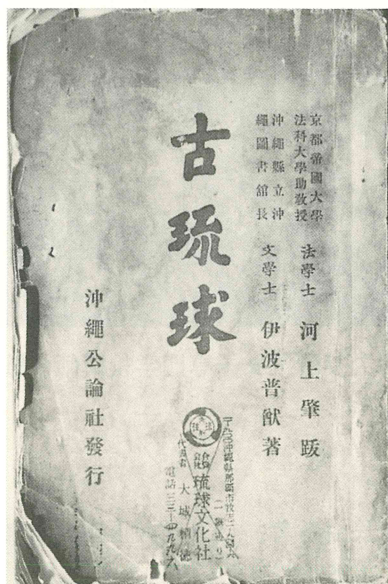
「おもろさうし」を校訂する伊波普猷（沖縄県立沖縄図書館にて）

『古琉球』各版

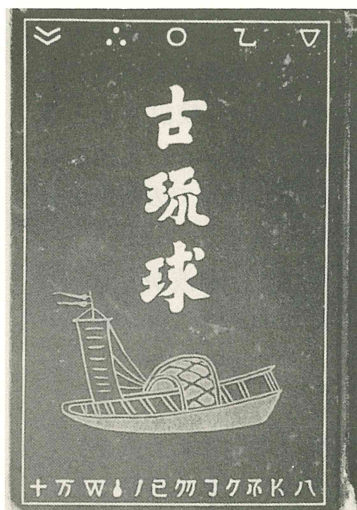
沖縄学研究室が所蔵している伊波普猷の『古琉球』各版は、1983（昭和58）年3月8日に、宮城篤正氏（市史編集委員長・現浦添市美術館館長、安波茶在）から浦添市に寄贈されたものである（『公報うらそえNo.280』1983年4月1日）。1983年度に市立図書館建設の計画があり、その内部に沖縄学研究室の設置の方針を知った宮城氏が秘蔵の『古琉球』を手放した。

1911（明治44）年に『古琉球』初版は刊行された。伊波普猷の名を内外に広く知らしめた代表作でもある。この著作について「はじめ、過去の琉球と題する積もりであったが、名が俗だから、古琉球に改めた」と伊波は述べている。

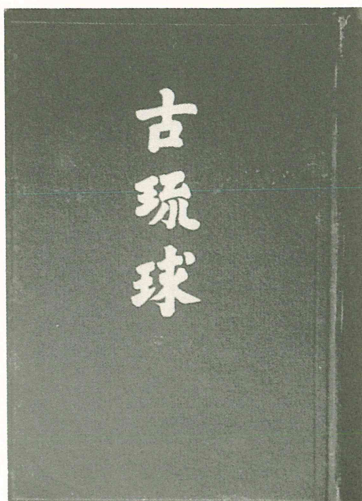
初版発行から第7版が出版される1965（昭和40）年までの長き時間をかけて、研究者はもとより多くの人々に愛読された書である。



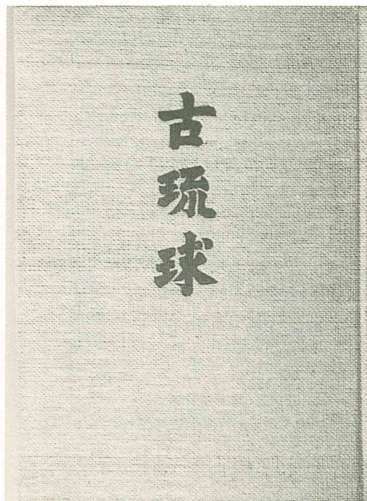
初版 1911（明治44）年12月10日
中興公論社（沖縄）定価 1 円50銭



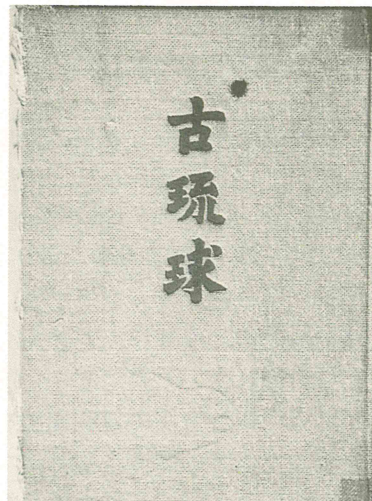
再版 1916（大正5）年9月20日
糖業研究会出版部（東京）
定価 1 円60銭



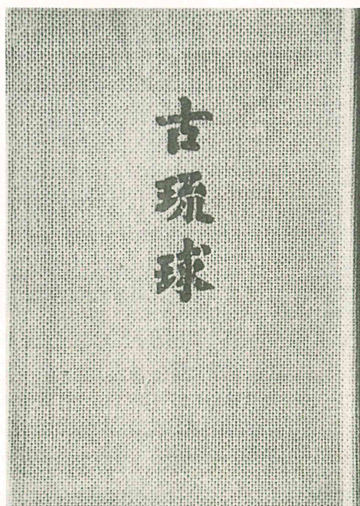
三版 1922（大正11）年4月3日
郷土研究社（東京）定価3円



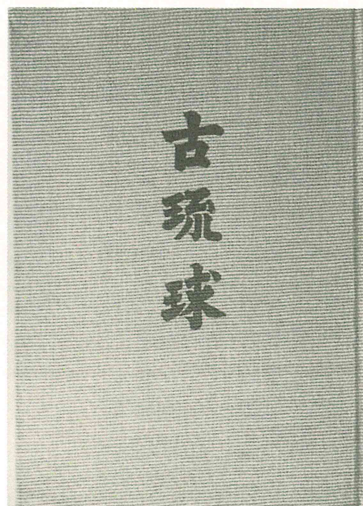
改版 1942（昭和17）年10月20日
青磁社（東京）定価4円80銭



改版二刷 1943（昭和18）年4月20日
青磁社（東京）定価4円80銭



改版三刷 1944（昭和19）年1月20日
青磁社（東京）定価4円93銭



複製版（改版四刷に当り「四版」と表示）
1965（昭和40）年9月1日
琉球新報社（沖縄）定価3円

『古琉球』は、伊波の「琉球人の祖先について」「進化論よりみたる沖縄の廃藩置県」、「浦添考」等の個別論文を収録した論文集である。この著書では、沖縄史（古代から現代）の全体像が示された事と、同時に沖縄の文化における「日琉同祖」の観点が中心になっている。こうした議論において言語学、人類学などの学問上の成果を取り入れたのは伊波が初めてであった。その後柳田國男、横山健堂等のようにこの著作を読み来沖した大和人も多い。参考文献：『古琉球』についての解説は、鹿野政直の『沖縄の淵－伊波普猷とその時代』（1993、岩波書店）で書誌学、思想史、内容分析においても詳細に論じられている。

歴 史

伊波普猷は、膨大な量の論考を残している。私たちは『伊波普猷全集 全11巻』（服部四郎、仲宗根政善、外間守善編、1974—76年、平凡社）で、生涯をかけ沖縄学研究に取り組んだ伊波の仕事に触れることができる。同じように伊波自身の研究成果を発表した当時の著書及び雑誌などの資料は、伊波を理解する意味では重要である。

少しずつではあるが、伊波普猷関係資料の収集活動を続けている。貴重な蔵書を寄贈していただくことも少なくない。

伊波関係資料は、伊波が所蔵していた資料の一部を納めた琉球大学附属図書館「伊波普猷文庫」（106種・161冊）、生誕百年記念事業での成果の一部を所蔵する那覇市文化局歴史資料室、歴史のある沖縄県立図書館等の機関が量ともに充実している。

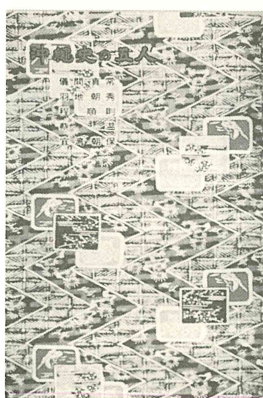
生誕百年記念事業から20余年の歳月が流れている。今年は没50年の節目の年でもある。ここ数年は伊波普猷と同じような沖縄の郷土研究者に視点をあてられるようになり、伊波普猷と同時期に活動した太田朝敷、島袋全発、比嘉春潮、東恩納寛惇、金城朝永、仲原善忠、喜舎場永珣、伊波月城、末吉麦門冬などの資料も発掘されている。沖縄の地に伊波普猷を中心にした「沖縄人物資料館」的施設構想が生まれてもよい時期ではないだろうか。



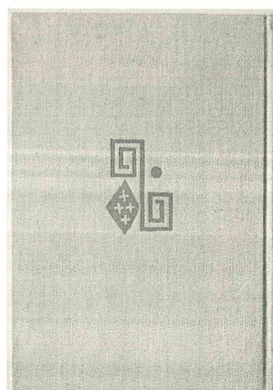
伊波の論文「琉球の神話」を掲載した雑誌「史学界」。1905（明治38年）



雑誌「史学界」第7巻第9号1905(明治38)年9月刊 伊波の論文「琉球に発見せる倭寇碑」が収録されている。



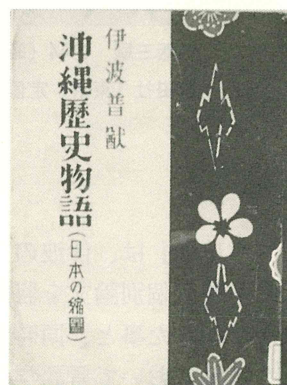
『琉球の五偉人』1916（大正5）年刊行。



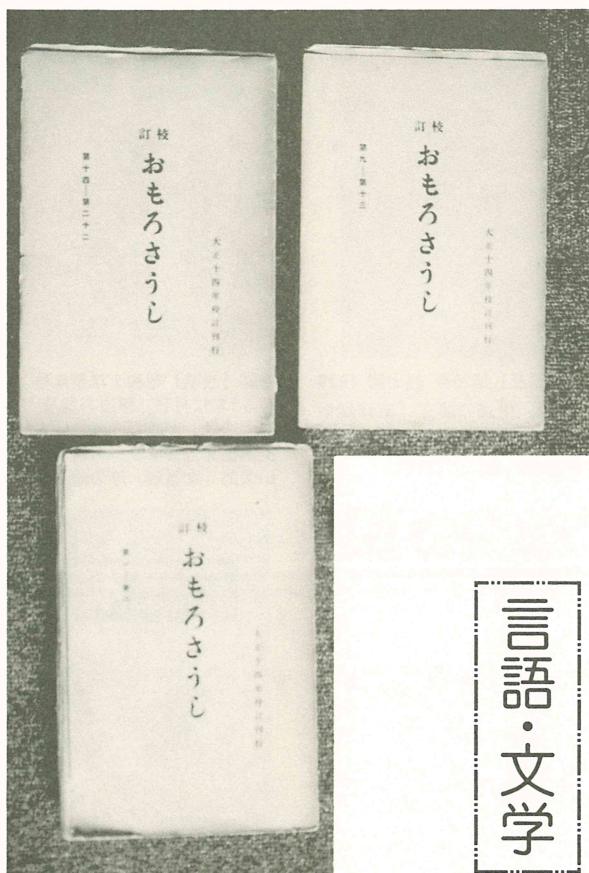
『孤島苦の琉球史』1926（大正15）年 春陽堂刊。同書の扉にはグルモンの「私達は歴史によって圧しつぶされている」の言葉が書き込まれ、伊波は南島の自然と政治の中での苦しさを「孤島苦」と表現し「琉球史」をとらえた。



『沖縄よ何処へ』1928（昭和3）年刊。ハワイ・北米在住の沖縄人のために講演旅行をしたときのテキストとして使用された。平易な文章で沖縄歴史を概説している。



『沖縄歴史物語』1947（昭和22）年刊 沖縄青年同盟。この年の8月伊波は急死する。



『校訂おもろさうし』1925（大正14）年刊。
『おもろさうし』として初めての活字体である。



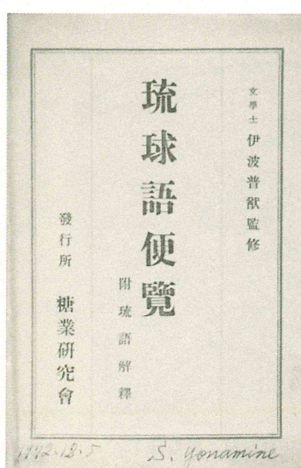
『琉球古今記』1926（大正15）年
刀江書院



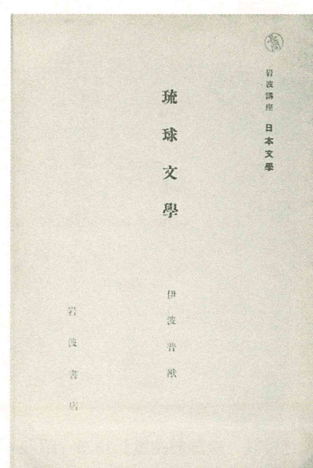
『国語と国文学』第7巻第8号1930（昭和5）
年刊。伊波の論文「琉球語の母音組織と口蓋化
の法則」が収録されている。



『短歌研究』5月号1936（昭和11）年・改造社刊。
伊波の論文「君眞物の来訪」が収録されている。

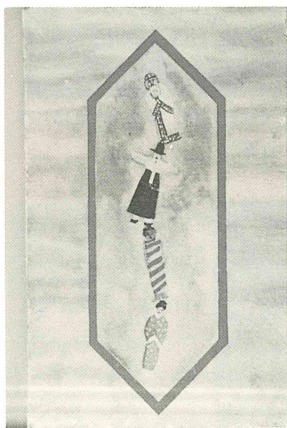


『琉球語便覧』複製版（沖縄）1969
（昭和44）年・琉球史料復刻会刊。

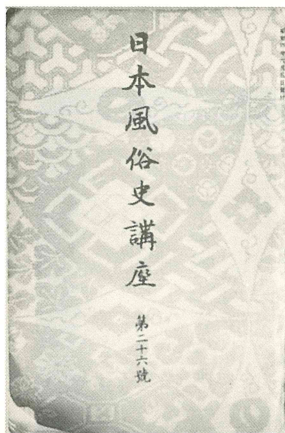


『琉球大学』岩波講座日本文学
1931（昭和6）年・岩波書店刊。

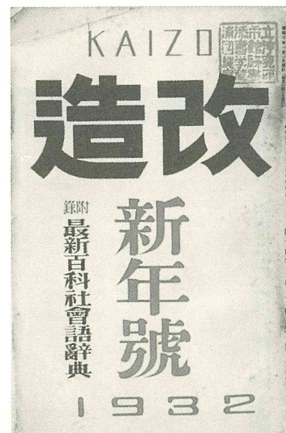
民俗・芸能



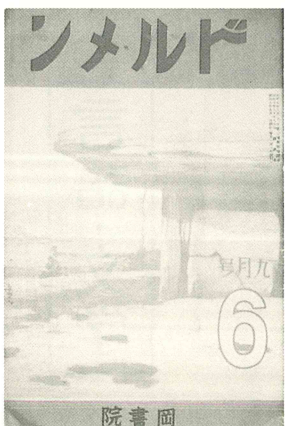
『日本童話集下』 1929（昭和4）年刊。
金田一京助・田中梅吉・伊波普猷・佐山融吉編
伊波は＜琉球編＞で「沖縄人の始め」「巨
人の足跡」「三十七嶽の神々」「島の守り
神」他3篇の童話を収録。



『日本風俗史講座』第26号 雄山閣 1929
（昭和4）年刊。伊波の論文「琉球風俗
史考」を収録、参考図版として＜ズリ馬
と称する辻遊郭の道中＞写真紹介。



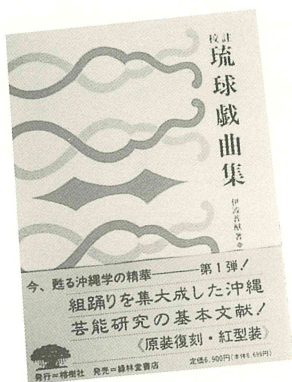
雑誌『改造』昭和7年新年号 1931（昭
和6）年12月刊。伊波の論文「ナポレオ
ンと琉球」が収録されている。その他に
美濃部亮吉「フランス経済の危機」、中
山太郎「女護鳴」等の論文収録。



雑誌『ドルメン』6号 1932（昭和7）
年9月。人類学、考古学、民俗学関係
の雑誌である。伊波の論文「ポリネシ
ア人の故郷」が掲載。



雑誌『日本民俗学』第12号 1936（昭和11）年6月刊。＜
琉球の組踊り特集＞号に伊波「組踊りの独自性」を
発表。他に折口信夫「組踊りの話」、比嘉春潮「琉
球の村芝居」等の論文が掲載され、「執心鑑入」、
「二童敵討」等の組踊りが紹介されている。



『校註 琉球戯曲集』1929（昭和4）年10月5日、紅型装丁。
春陽堂。折口信夫序文「組踊り以前」、末吉安恭「組踊小言」、
真境名安興、太田朝敷、東恩納寛惇等が文章を寄せている。
写真は復刻版（1992、榕樹社）。



『琉球戯曲辞典』郷土研究社から1938（昭和13）年に刊行。
『校註琉球戯曲集』を校訂するさいの副産物だとされ収録語
彙は600余語。写真は復刻版（1992、榕樹社）。

「沖縄学講座・物外忌記念講座」概要

栗国 恭子

浦添市立図書館に設置された沖縄学研究室では、図書館利用者に対するレファレンス強化のため、沖縄関係及び中国・アジア関係資料を収集し、利用者に提供している。その活動のひとつに、年16回の沖縄学講座の企画開催がある。

沖縄学講座シリーズには、①市史を読む会（年6回）、②琉球王国評定所文書を読む会（年5回）、③古文書を読む会（年5回）それぞれの目的で3つの性格の講座がある。①の中でも人気が高い講座が、1991年度から毎年、8月13日伊波普猷の命日・物外忌前後に行なわれる物外忌記念講座である。伊波と絡めた現代の沖縄学をテーマに開催している。

伊波普猷の没50年記念の特集に、過去開催された（計6回）講座を紹介する。

(1) 1991年（平成3年度）

「伊波普猷と浦添」

講師：高良倉吉（浦添市立図書館長・歴史学）
期日：10月20日（土）午後2時～3時30分
会場：浦添城址内伊波霊園

1990年に開室した「沖縄学研究室」は、この年の4月に、市立図書館2階の一角に扉を取り付け『琉球王国評定所文書』編集事務局と『浦添市史』事業終了期の成果である市史関係資料及び人材とをあわせた体制で、研究室として実質的な活動を開始した。この年から館長の高良氏（1988年就任）は、「沖縄学研究担当参事兼館長」の役職についている。また高良氏は、前年に沖縄タイムス社がもうけた18回伊波普猷賞（1990年度）を『琉球王

国史の課題』（ひるぎ社）で受賞。

浦添市文化行政において、「沖縄学」の位置付けが明確になったこの年から、図書館主催の伊波普猷関係記念講演会（講座）が開始されている。この年の物外忌を記念して、8月17日に比嘉美津子氏から「沖縄学研究に役立ててほしい」と沖縄学研究室に100万円の寄付があった（『公報うらそえNo.369』）。

その翌月には『公報うらそえNo.370』1990年10月1日、浦添市）紙面で「浦添にねむる“沖縄学の父”伊波普猷」（高良倉吉）や「伊波普猷の浦添研究」（福村光敏・沖縄学研究室囑託）の記事が掲載され、広報活動がなされる。



当時の講演写真記録が無いため、写真は、1994年3月に行なわれた沖縄学講座「沖縄学を考える」の高良氏。

こうした活動の流れからこの年の開催は、8月の物外忌ではなく10月中旬に行なわれた。講演内容は、専門的に絞られたテーマではなく、近代の沖縄出身の郷土学者・伊波普猷の人となり、伊波の浦添関係の研究、伊波霊園のこと、沖縄学についてなど、わかりやすい説明で、市民に伊波普猷を紹介したものであった。

(2) 1992年（平成4年度）

「『言説』としての日琉同祖論」

講師：屋嘉比収（沖縄大学非常勤講師・思想史）

期日：8月15日（土）午後2時～5時

会場：浦添市立図書館視聴覚室

講師の屋嘉比収氏は、琉球大学院を出て、那覇市史編集事務局に勤務するかたわら沖縄大学で近代思想史の非常勤講師を勤めていた（現在・九州大学大学院）。

屋嘉比収氏の講演の内容は、①伊波普猷研究の現状を捉えることにより、沖縄史学における近代史研究の現状を把握した上で②伊波普猷と「日琉同祖論」との関係についてである。

(1)1970年代における、近代史研究は復帰という現実問題との緊張関係において、沖縄史学での優勢を誇った時期である。「琉球処分分期研究」「旧慣温存」問題が、西里喜行・安良城盛昭論争等の活発な議論が展開されている。80年代に入ると沖縄史学の中心が近世、古琉球のほうに議論の中心が意向、近代史研究が停滞気味になる。このことは今日においても沖縄近代史の一論点である伊波普猷研究に関して、70年代に提示された議論が有効性をもっていることを意味している。

(2)伊波普猷と「日琉同祖論」との関係を経典的に問題定期するために、80年代後半からの新しい歴史学の動きである方法論「（構造）から言説へ」「構造主義から脱構築論へ」の視点を取り組みたいとする。社会に生まれる言説は「①事実の対象と異なり一つの形を表す、②非事実性（事実性も含む）、③匿名による反復性、④言説自体が普遍的な実態ではなく、時代状況に非常に影響される」特徴があると指摘。

それをふまえて「日琉同祖論」を捉えるには、a 事実のレベル、b 思想のレベルに加え



c 言説のレベルの視点が重要だと指摘。つまり従来の「日琉同祖論」の研究では、(A)70年代の歴史学中心の客観的事実へのアプローチ、その後の(B)明治政府における〈官製「日琉同祖論」〉と、伊波を代表とする〈沖縄地元からの「日琉同祖論」〉の展開があったとする大田昌秀の議論、(C)金城正篤・高良倉吉の主張した〈事実〉と〈思想〉との区別を強調した論点、(D)〈事実性〉と〈思想性〉の両方が槍の両面のように補完すると分析した「日琉同祖論」論を展開した新川明ら、の議論があったと紹介した。

屋嘉比氏は、今日における「日琉同祖論」の言説は、近代国家確立・発展のためのイデオロギーだとする捉え方の有効性を主張。日本の行なった朝鮮統治の近代を取り上げ「内朝一体論」を紹介した。

伊波普猷との関わりにおいて、「日琉同祖論」における言説を当時の時間枠でとらえ、①琉球処分から明治30年代のものと②明治30年以降とに区別、②について言語学や人類学の知見によって学問的な色彩をもった〈日本の古代〉という言説は、伊波普猷が代表的であったと指摘した。

屋嘉比氏の捉える伊波普猷の「日琉同祖論」に関しては、本誌掲載の「〈琉球民族〉への視点—伊波普猷と島袋全発との差異—」（屋嘉比）の56P～60Pで詳細に論じている。

(3) 1993年（平成5年度）

「近代沖縄の思想—『沖縄の淵 —伊波普猷とその時代』にふれて—」

講師：比屋根照夫（琉球大学教授・日本政治
思想史）

期日：8月20日（土）午後2時～4時

会場：浦添市立図書館視聴覚室

講師の比屋根氏は、伊波普猷研究の代表的研究者の一人である。氏は1981（昭和56）年に『近代日本と伊波普猷』（三一書房）を発刊し、その中で「時代と生涯」「伊波普猷の思想」を柱に、近代日本の中での伊波の思想的営為を捉えることで日本の「近代化」の在り方を追求している。氏は11回伊波普猷賞（1983年）を『自由民権思想と沖縄』で受賞。

この年に、近代・思想史の研究者・鹿野政直『沖縄の淵』（岩波書店）が発刊された。

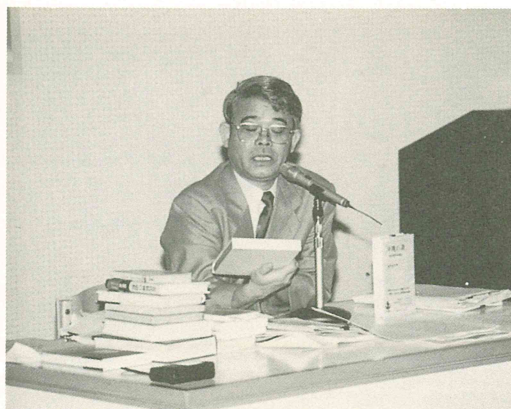
事務局側で、その研究をふまえたテーマを依頼した。

前半に「近代日本の沖縄論の系譜」にふれ、
①自由民権期②明治中期—日清戦争前後（太田朝敷の言論活動）③明治末期から大正期（柳田國男、南方熊楠、伊波普猷等の活動）
④昭和期・第二次大戦前後（柳宗悦と方言論

争）⑤戦後の五つの時期に区分した。⑤については＜歴史学＞の分野から遠野茂樹、井上靖、色川大吉、鹿野政直、＜社会思想＞の分野では、矢内原忠雄、中野好夫、竹内好。そして＜文学＞での島尾敏雄、大江健三郎、大城立裕、＜沖縄の思想＞の分野での大田昌秀、新川明、戦後世代の仕事等を紹介した。

後半では、戦後の日本史学の分野で活躍する鹿野政直の研究を「鹿野史学に於ける沖縄像」と題して分析紹介した。氏の『戦後沖縄県の思想像』（1987）、『鳥島は入っているか—歴史意識の現在と歴史学』（1988）、『近代日本の民間学』（1983）、『沖縄の淵』の著作の中での＜沖縄像＞を紹介。「日本の歴史の中であるいは日本人の中で、（奄美諸島、琉球諸島）ははじっこのほうだから、落としていいというふうな考え方を是正していかなければならない」とした島尾敏雄の思想が一つの啓示になったという鹿野の、日本における近代及び現代という時代を＜沖縄＞から照射する視点を評価し、比屋根氏も同様なスタンスであると述べた。この講演に向けて比屋根氏は、鹿野氏に「何故沖縄にこだわるのか」との問いを直後のインタビューしたエピソードも紹介された。

研究室では、パネル展示企画「伊波普猷展」が開催（8月13日～9月13日）された。



講演後、沖縄学研究室で参加者から質問を受け懇談。

(4) 1994年（平成6年度）

「伊波普猷『沖縄女性史』の現代的意義 —女性の人権を考える—」

講師：若尾典子（名古屋大学講師：憲法学、
女性史）

期日：8月20日（土）午後2時～4時

会場：浦添市立図書館視聴覚室



講師の若尾氏は、1972～89年まで沖縄で生活。女性史研究からの視点で「沖縄女性史研究への基礎視覚—柳田國男と伊波普猷」（『沖縄文化研究12』1986）、「伊波普猷『沖縄女性史』の現代的意義」（『歴史評論』529、1994）の論文を発表している研究者。

明治・大正・昭和と近代日本の中で庶民に視点をあてた、民俗学者・柳田國男の女性観と、伊波のそれを比較し話を展開。柳田は民俗学の中で、「主婦」の存在を「苛酷な労働下にあるが、現実を采配する重要な地位」だと主張し賛美した。これに対して伊波は「男性問題を通して女性問題を捉え、理想的な主婦像の賛美に偏ることなく、女性の教育論等実践的な問題意義の中で女性史に向き合った」と、柳田と違う啓蒙活動展開等の実践的な研究を評価している。つまり明治・大正期の社会と

女性の問題に対する現状肯定派の柳田國男と現状懐疑の視点から実践的に女性問題に取り組んだ伊波普猷の研究を解説することで、現代の女性の人権問題を考えたいと述べる。また、伊波自身が「沖縄女性史」の論考を発表するなどの女性史問題に取り組む背景には、母や妻や恋人らとの関係で悩む生活人としての伊波の姿があったことも重要な点であったとする。

講座の当日は沖縄の祖先祭祀で重要なお盆（旧盆）の期間であったが、参加者はほとんど女性達。伊波普猷研究では、数少ない女性史の分野で、現代を生きる女性達に関心あるテーマが提供できた講座であった。



講演のテーマにあわせて、研究室の展示コーナーでは「戦前の女性風俗パネル展」（8月9日～約2カ月）を開催した。



(5) 1995年（平成7年度）

「伊波普猷と新おもろ学派」

講師：末次 智（四條畷学園女子短期大学専
任講師・琉球、上代文学）

期日：8月12日（土）午後3時～5時

会場：浦添市立図書館視聴覚室

様々な分野の論考を残した伊波普猷の研究業績の中でも、琉球古謡「おもろさうし」の体系的研究を最初に深めたことは広く知られている。伊波に続き、大正・昭和期「おもろさうし」研究に取り組んだ伊波の後輩の世代である島袋全発、比嘉盛章、宮城真治、世礼国男等が、「新おもろ学派」と呼ばれている。この「新おもろ学派」に関しては、おもろさうし研究の分野でも、研究論考が少ないテーマでもある。

講師の末次氏はおもろさうしと琉球王権の研究論考（『琉球の王権と神話－「おもろさうし」の研究』）をはじめ「世礼国男論序説－その南島歌謡研究の軌跡－（『日本歌謡研究－現在と展望－』）等の論考を発表している「新おもろ学派」に関心を寄せている若手の研究者である。

「新おもろ学派の説明」からはじまり、「新おもろ学派前史」として伊波普猷と①島



袋全発、②比嘉盛章、③宮城真治、④世礼国男のそれぞれの個性ある研究者との関わりを紹介。

「新おもろ学派の出発」の背景として、「沖縄郷土研究会」（1927・昭和2年設立）、島袋全発や島袋源一郎が設立した「南島研究会」（1927・昭和2年）などの地元における郷土研究組織の充実を指摘した。宮城真治は新おもろ学派の名称を「沖縄神歌学会」と記しているとする。この様な伊波のおもろ研究をふまえて独自に、時には伊波への批判も主張しながらおもろ研究に取り組むこのグループの仕事に対して、少々批判的にとらえた東恩納寛惇や、期待をかけた真境名安興などのコメント資料も提示。彼らの活動と様々な波紋をおこしたその過激な主張の背景には、比嘉盛章の行動力が大きいと指摘。新おもろ学派の著作目録などの資料も紹介した。また末次氏には、この講座の内容をふまえた「伊波普猷と新おもろ学派－ナショナリズムと郷土＝沖縄研究－」の論考を『浦添市立図書館紀要No.7』（1996）に寄稿していただいた。

沖縄学研究室で、展示企画「伊波普猷と新おもろ学派」（8月12日～9月10日）が開催された。新おもろ学派の一人である比嘉盛章の、台湾時代の写真資料と書簡資料が、川平朝申氏の協力により紹介展示された。



(6) 1996年（平成8年度）

「伊波普猷と近代の言論人
— 普猷を視つめる学識者たち —」

講師：伊佐眞一（琉球大学職員・近代史）
屋嘉比収（九州大学大学院・日本近代思想史）
栗国恭子（浦添市立図書館沖縄学研究室嘱託、文化人類学）

期日：8月24日（土）午後2時～5時
会場：浦添市立図書館視聴覚室

明治・大正・昭和期に沖縄学の研究に取り組んだ伊波普猷と、同時期に活躍した沖縄の言論人から、太田朝敷（伊佐）、島袋全発（屋嘉比）、末吉麦門冬（栗国）の3人を取り上げ、伊波との関わり、違い、言論人として何に重きを置いたのか等、それぞれの近代を紹介した。



講師は、『太田朝敷撰集全3巻』（1993～96、第一書房）の編集担当（比屋根照夫共編）の伊佐氏、「人物列伝・沖縄言論の百年＜島袋全発＞」（『沖縄タイムス』1994年11月21日～95年2月7日）を連載した屋嘉比氏、麦門冬研究で「末吉麦門冬（安恭）と伊波普猷」（『地域と文化No.71』1992、ひるぎ社）等の論考を発表した栗国である。

伊佐氏は、この3人を琉球処分（1879・明治12年）の時期からとらえ、成人であった太田朝敷、その後の新制度の中で精神形成を始めた伊波、日本がアプリオルな状態で明治40年代に青年期を迎える全発や麦門冬を、3世代の知識人であるとする。こうした世代の違いで沖縄と日本の「国家」に向かいあう態度や心情には違いが生じると指摘。琉球処分は、伊佐にとって、歴史的必然というべき性質のもので歓迎、謳歌したのに比べ、「沖縄改革の急先鋒」といわれた太田は「沖縄が生きていくための唯一の選択肢」と現実的なとらえ方をしていると述べる。沖縄を現実的などの方向に導くのか、どのような沖縄にするのかといった実践的な課題の前で、太田を経済や政治に重きを置く活動にむかわせたと指摘。そのための思想と言論人であったと位置づけた。

屋嘉比氏は、伊波及びその他の沖縄学における人物研究の資料整理は「沖縄学の群像」を考える上で重要な課題だと強調。「沖縄学の群像」について第一世代を伊波普猷、真境名安興、東恩納寛惇らとすると、第二世代には、島袋全発、末吉麦門冬、伊波月城らが位置付けられるという。両世代に関する研究状況の違いを、第二世代の基礎的研究（著作目録、年譜作成等の資料整備）の遅れが大きな課題であると指摘した。

屋嘉比氏、及び栗国の講演内容は、本誌掲載の「＜琉球民族＞への視点—伊波普猷と島袋全発との差異—」（屋嘉比）、「伊波普猷と末吉麦門冬（安恭）の交流—明治末期から大正末期にかけて—」（栗国）を参照してほしい。

この講演に関連して「伊波普猷と言論人全3回」が沖縄タイムス紙面（1996年8月21日～23日）で連載された。

新発掘の伊波普猷論文について

岸 秋 正

1. はじめに

年2月5日発行)

伊波普猷の著作論文については、平凡社から『伊波普猷全集』全11巻（以下『平凡社全集』と記す）が刊行されているが、刊行末期の昭和51年4月24日、伊波普猷生誕百年記念会から『伊波普猷一生誕百年アルバム』が非売品として刊行され、附録に「伊波普猷主要著作一覧」がある。この一覧を見て、洩れているもの、未見のマーク付きの資料が蔵書中に数点あったので、平凡社に連絡し

- ・「布哇産業の裏面史」（『犯罪公論』2巻1号所収）
- ・「キャプテンクックの布哇探険と彼の死」3・4（『犯罪公論』3巻2号・3号所収）
- ・「布哇物語」（『犯罪科学』別巻8号・異状風俗資料研究号所収）

などを提供、これらが『平凡社全集』第11巻に補遺として掲載された経緯がある。

これで伊波普猷の著作論文は、この全集に網羅され、外にはないものと考えていた。ところが、まだ存在したのである。それは、次の論文である。

- ・「ハワイ日系市民の殺人事件（天才日系市民の公判記録）」（『犯罪実話』4巻1号・176～191P・昭和12年1月5日発行）
- ・「ハワイ日系市民の公判記録（完結篇）—無産階級の声を代表した天才の犯罪」（『犯罪実話』4巻2号・136～151P・昭和12

2. 幸運な発掘の経緯

この『犯罪実話』なる雑誌の入手については、非常に幸運が重なった収穫であったので、その経緯の概要を記しておく。

10年余り前の昭和54年11月3日（文化の日）、例により高円寺西部古書会館にて開催中の中央線古書展を見に行った。古書展にて資料を探すには、あらかじめ送られて来る『古書展目録抄』による場合と、会場に行き『目録抄』には掲載されていない出品物の中から探す方法とがある。この日会場にて、『目録抄』に掲載されていない雑然と積まれていた雑誌を見ていて、偶然『犯罪実話』が目にとまった。

この雑誌に沖縄関係の記事があるとは思ひもしなかったが、ただこれまで伊波普猷や金城朝永が『犯罪科学』や『犯罪公論』なる雑誌に寄稿しているのを知っていたので、あるいはと思いこの『犯罪実話』の目次を調べて見ると、今まで聞いたこともない、伊波普猷の論文「ハワイ日系市民の公判記録（完結篇）—無産階級の声を代表した天才の犯罪」が掲載されていることを知った。完結篇となっているので、前編の記事がこの雑誌の前号、すなわち4巻1号あたりに掲載されているはずである。ぜひとも探し出して完全な論文を読んで見たいものだと思いつつ、まずこの『犯罪実話』4巻2号（1,500円）を入手して帰った。

しかし、あまり権威のある雑誌ではない『犯罪実話』など、そんなに残っていないはずで、気を付けて探してはいるがなかなか見付からなかった。

年明け後の昭和55年2月23日、駿河台下古書会館にて開催予定の古書展の目録『ぐろりや展目録抄』が送られて来た。その中に『犯罪実話』4巻1号(2,000円)とあるのを見付け出した。内容記述はないが、これに伊波論文の前編が掲載されているはずであると確信して、直ちに電話で予約し、幸いに購入することができた。聞いてみると予想通りに「ハワイ日系市民の殺人事件(天才日系市民の公判記録)」が掲載されており、大喜びした次第である。もし最初に完結篇を見付け出していなければ、『ぐろりや展目録抄』の『犯罪実話』4巻1号には気付かずに見過ごして、入手することはできなかったはずである。その後、『犯罪実話』なる雑誌を古書展にて見かけたことが一度もないことを考えると、本当に幸運であったとしか言いようがないと思っている。

3. 論文の明細

大分前置きが長くなったが、『犯罪実話』なる雑誌に掲載された伊波普猷の「ハワイ日系市民の殺人事件」と題する論文のあらましを紹介してみたいと思う。

この殺人事件については、昭和6年7月10日、武俠社発行の『犯罪科学』別巻・異状風俗資料研究号(以下『異状風俗研究号』と記す)に掲載された「布哇物語」の最後の部分(150P上段3行目から、『平凡社全集』では第11巻の355P13行目から)に、

三年前にホノルルで起きた、日系市民福永寛のギル少年殺人事件のごときは、その好適例である。この事件は最も興味ある問題であるが、紙面の都合でここでは割愛して、

ただこうした犯罪が、日本人種なるが故の犯罪でなく、又米国化したための犯罪でもなく、その責任は、彼が生い立つた社会全体が負うべきである、というだけをおきたい。

と述べていることから、すでにこの時から論文の構想は固まっており、発表の機会を待っていたものと思われる。

『犯罪実話』4巻1号と2号との2冊にわたって連載されているが、その書き出しの部分で、

私はかつて「ハワイ物語」犯罪科学異状風俗特集号所載を物し、主として言語上の問題から、第二世同胞の米国化を考察して、日系市民のギル少年殺人事件に触れて置いたが、この事件は卑見を裏書すべき好個の資料だから、ここにそのあらましを紹介してみたい。

これは、私がハワイ漫遊の途に上る十日前に起こった戦慄すべき事件で、ハワイ在住の各国人種殊に日本人及び日系市民に、一大ショックを与えたものだが、ホノルルに着いた頃も、盛んに話題に上っていたので、自然私はこの問題に注意を払うようになった。そしてこの事件の載ったハワイの新聞雑誌は大方集めて置いたので、これに就いて少々書いて見ることにした。

として、日系市民福永寛のギル少年殺人事件について、

- ① 犯罪発生の状況
- ② 逮捕後、市郡副検事ブルックス氏の尋問を受けての問答速記の全訳
- ③ ハワイ在米国人識者の意見を代表するものとして、ハワイ大学心理学教授S.D ポーテウス博士の意見と伊波普猷の意見
- ④ ハワイ在日本人識者の代表としてのハ

などから述べられている。

これらの記述の詳細は省略するが、完結篇掲載の『犯罪実話』4巻2号の編集後記欄で、編集人は

と述べており、この説を証明するためにこそ、この「ハワイ日系市民の殺人事件」を記述したものである。

伊波普猷氏の「日系市民の殺人事件」は、遂に本号に来て恐るべき問題を提起している。それは「言語は後天的なもの、即ち社会的産物である」となす説である。

と述べている。しかし、この伊波の考え方は、前記の「ハワイ物語」を書いた時に、すでに考えていたことで、「ハワイ物語」の中で（『異状風俗特集号』では139P下段20目行目、『平凡社全集』では第11巻383P4行目から）

4. おわりに

専門家ではない私は、ただ未発掘の資料が存在していたのでその紹介を記すにどどめるが、伊波普猷を研究する人は、「ハワイ物語」との関連もあり、ぜひ目を通す必要のある論文であると思われる。今後研究者によって、さらに深く研究せられん事を祈念してこの稿を終える。

岸 秋正（きしあきまさ）氏

1995年（平成7）年12月8日午前2時23分逝去されました。享年78歳。

南島史学会会員であり資料蒐集家として高名であった岸氏は、約40年を費やして沖縄の貴重な資料も数多く蒐集されていきました。岸氏の沖縄学関係の新しい資料の発掘は、多くの研究者にとって大変参考になり、常に刺激を与えてくださいました。

当館沖縄学研究室へも度々貴重な資料を寄贈していただきました。また『浦添市立図書館No.3』（1991）にも「新発掘の伊波普猷論文について」の玉稿を寄せられました。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

氏が蒐集した、近世・沖縄の貴重な資料約1万1千点は、夫人の岸朝子氏より、沖縄県立公文書館へ、1997（平成9）年1月に寄贈されています。

「琉球史料叢書」の出版記事紹介

1991年6月27日の琉球新報・沖縄タイムスの紙面に、「戦前の新聞見つかる」という見出しで、県議会史編纂室が東京の國學院大学図書館に保存されていた戦前の琉球新報・沖縄日報を見つけたというものであった。これらの新聞は、沖縄を何度も訪ねている折口信夫氏所有の資料で、1938年1月から5月迄と、1940年の1月分というまとまったものであった。これらの新聞は、現在迄未確認の部分が多かっただけに、たいへん期待をもたれ、早速1992年の2月22日には琉・沖縄紙ともに、沖縄県立図書館に國學院大学からマイクロフィルム化されて寄贈された経過を知らせる記事が掲載されている。そこで、現在全集刊行作業中の真境名安興の執筆した記事がないだろうかということで、フィルムを見せてもらい、幸いにも「沖縄現代史」がいくつか見つかったのだが、この経過については『真境名安興全集』刊行事務局のニュースの中で紹介されるであろう。

ところで、この作業中に伊波普猷関係の記事で面白いものを見つけたので紹介することにしよう。写真にもあるように、昭和15年（1940）4月27日の沖縄日報の記事がそれである。見出しには「初の琉球史料叢書『琉球国由来記』伊波氏の解説で出版」とある。そして伊波普猷の写真が掲載されている。この史料集は、沖縄では歴史学のみでなく、民俗・文学ともに重宝して使用させてもらっている『琉球史料叢書』全5巻のことである。しかしながら、記事中には「東京にて高安記・発・伊波普猷氏の数年・の日子を費やした精進が身を結んでこの程『琉球国由来記』が出版のはこびに到った。同書は東京名取書店から出版される『琉球史料叢書』の第1巻として編まれたものだが、この『琉球史料叢書』は全部で約20巻に及び慶応大学教授横山重氏・東恩納寛惇」に伊波普猷氏を加えた三権威が解説執筆に当たるもので」というように、当初は20巻もの大史料集として刊行される予定となっていたとある。

『琉球史料叢書』の中で伊波普猷の担当したのは、第1巻の「琉球国由来記」と「琉球国日記」の解説

であるが、後者については9月25日脱稿となっている（「叢書」第3巻参照）ので、この記事の時にはまだ書き上げられていなかったのであろう。一方前者の解説を伊波普猷が伊豆吉奈温泉で書いたのは、その解説末尾に月日と共に記されているので判っていたが、それが2週間というわりと長期の時間、しかも全く専念する形でかかれたという事実が判って面白い記事である。また取材は単独で伊波普猷におこなったものらしく、中野区塔の山の自宅にて取材した旨の事が記されている。ところで彼が伊豆で2週間かけて書いた解説は、現在由来記の本文と共に読む事が出来る（「叢書」第2巻参照）。

ところで、繰り返すようだが、名取書店発行のもの、それから東京美術社の本及びいくつかの復刻本でも判るように、『琉球史料叢書』は5巻である。横山重氏の「後記」（「叢書」第5巻参照）の中にも、20巻の計画の事は記されていない。むしろ当初から5巻として準備したかのような記述に占められている。しかし、収集史料の中に「球陽」や「碑文記」等があること、刊本にはなかったものの原稿作成した「球陽」があり、そのうつしを戦後球陽研究グループへ提供した事などが記されていることや、さらに東恩納寛惇の解題も新聞に「第二巻は『中山世譜』で東恩納寛惇氏が当たる事になっている」という説明と比べて、彼の解題が「球陽」等も含めた幅広いものになっている。横山氏の「後記」には和昭和11年（1936）から5巻として準備されている様に記されているけれど、計画の段階では20巻という計画もあったのであろうかという事を推測させる。5巻の刊行の時も既に日支事変（日中戦争）の膠着状態にあり、印刷用紙も制限されていた時代である。新聞社がそうであったように、出版書店も統合され、名取書店も岩波書店へと吸収されている。以後統制の中で戦争へ、そして昭和20年（1945）の敗戦をむかえる。このような時代のためになくなった計画であったのであれば、いかにも残念といわざるを得ない。

〈小野まさ子〉

初の琉球史料叢書

『琉球國由來記』

伊波氏の解説で出版



『東洋にて高名記』著・伊波普猷氏の数年の日子を費した精選が刊行された。この『琉球國由來記』が出版のはこびにやつた同書は東京名取書店から出版される『琉球史料叢書』の第一巻

として編まれたものだが、この『琉球史料叢書』は全部で約二十巻に及び、昭和十一年、横山重氏、東郷晴寛氏、に伊波普猷氏を加へた三編成が解説執筆に當るものでその中一巻たる『琉球國

由來記』の解説には伊波氏、第二巻は、中川世譜一で申恩納寛厚氏が當ることになつてゐる。伊波氏は、『琉球神皇記』の著者として断界の學究である、伊波氏は、の浩翰な『琉球國由來記』の解説を執筆するため伊豆吉奈温泉にももゐて二週間びたすら、稿製作に没頭、この程、早く脱稿して歸した。伊波氏は中野區塔の山の自宅で語る、一琉球史料叢書の出版はきことに、歴史的なものであり、その第一巻『琉球國由來記』の如きは初の出版であるので琉球研究に大きな貢獻をするものと考へられる、この解説に當つては「日

本文の申漸」と（沖繩考一の諸論文を参照し更に慎重な態度で臨んだのであるが、いやくも琉球史を研究するものにとつて坐石の書といふべく本書を讀くことなくして沖繩を語る勿れといつても過言でないと思ふ、大分浩翰な書物なので他が羅み約十五箇位になるかもしれない琉球國由來記は清の康熙十二年（我が正徳三年）琉球國王尚敬の命によつて編纂され、琉球の「延喜式」ともいふべきものである、刊行に當つては尙家所蔵の御律物一本を台とし、沖繩書院（元西郷縣殿の琉球史料のものと）校合する等の一方ならぬ努力が拂はれ、冊数すべて二一冊（前後に分れる）は巻一「王城之大事」、巻二「官爵列品」、巻三「開始乾卷四事略坤」巻五「時中御親白里中御親年中祭祀」巻六「國廟」巻七「泊村由來記」巻八「那覇由來記」巻九「市藥番記主集」巻十一「諸寺由記」巻十一「密門諸寺略記」以下十二巻に及んでゐる

「沖繩日報」昭和15（1940）年4月27日より

沖縄学研究室寄贈受付図書資料一覧

【1994年度後半～95年度前半】

※但し、雑誌・要覧・宣伝小冊子などは除外した。

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
1994. 10. 1	ロックとコザ〈沖縄市史資料集・4〉	沖縄市企画部市史編集担当
〃	中国語図書目録 総記・哲学・歴史 1972～1990	東京都中央図書館
〃	歴博 66	国立歴史民俗博物館
〃	insula April 1994 Year 3 No1	アマンダ・ステインカム（米国）
〃	沖縄芸術の科学 第7号〈沖縄県立芸術大学付属研究所紀要〉	沖縄県立芸術大学付属研究所
〃	アイルランド断章〈おきなわ文庫69〉	ひるぎ社
〃	ボルネオ・サラワク王国の沖縄移民〈おきなわ文庫70〉	〃
〃	蔓草庵資料 第1号～3号	金城 功（那覇市）
〃	近世の諸問題シリーズ第V弾・近世の産業	浦添市教育委員会文化課
〃	第3回先島文化交流会議 テーマ：人頭税廃止請願100年記念シンポ	平良 勝保（那覇市）
〃	諸家文書目録3〈収蔵文書目録第6集〉	千葉県文書館
〃	立花親賢家文書目録〈柳川古文書館史料目録第7集〉1994	九州歴史史料館分館柳川古文書館
〃	柳河藩の近世干拓―史料と解説	〃
〃	知念村史 第3巻・戦争体験記	知念村役場
10月4日	八潮市史研究 第8号	八潮市立資料館
〃	八潮市史研究 第9号	〃
〃	八潮市史研究 第10号	〃
〃	八潮市史研究 第11号	〃
〃	八潮市史研究 第12号	〃
〃	八潮市史研究 第13号	〃
〃	八潮市史研究 第14号	〃
〃	八潮市史研究 第15号	〃
〃	広島県立文書館紀要 第3号 1994	広島県立文書館
〃	広島県立文書館だより 第4号 1994	〃
〃	敬天愛人 第12号	財団法人西郷南洲顕彰会
11月15日	仲田上遺跡 新発見遺跡の概要	伊是名村教育委員会
〃	沖大経済論叢 第17巻第2号・通巻43号	沖縄大学経済学会
〃	子ども文化学研究 第2号 1993	中京女子大学子ども文化研究所
〃	サンゴ礁をわたる碧の風―南西諸島の中の弥生文化―	安里 進（那覇市）
〃	東南アジアの漆工芸―タイ・ラオス―	宮里 正子（那覇市）
〃	久米島紙幣と切手〈緑の笛豆本第313集〉	川出 博章（愛知県）
〃	基家・慶家文書〈改訂名瀬市誌編纂委員会・資料集2〉	改訂名瀬市誌編纂委員会
〃	奄美郷土研究会報 第34号	奄美郷土研究会

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
11月15日	沖縄大学地域研究所所報 No. 9	沖縄大学地域研究所
〃	すくみち 第31号	今帰仁村教育委員会歴史文化センター準備室
〃	宮城真治民俗調査ノート〈宮城真治資料8〉	名護市史編さん室
〃	お母さんはアダン林でねむっている	国頭 正伸（浦添市）
〃	阿佐ヶ谷貧乏物語	〃
〃	沖縄関係文献目録 1972年 1月31日	金城 功（那覇市）
〃	沖縄文化 第29巻 1・2（79・80号）合併号 沖縄文化協会創設45周年記念	沖縄文化協会
〃	仲里村史 第3巻資料編 2 近世・近代仲里の文献資料	仲里村教育委員会
〃	史料編集室紀要 第19号	沖縄県立図書館史料編集室
〃	沖縄県史料 近代6・移民名簿Ⅱ（自明治40年至明治44年）	〃
〃	議員の議会活動の記録・祖国復帰後編、〈那覇市議会史関係資料1〉	那覇市議会史編さん室
12月16日	「松本大本営」の事実—隠された巨大地下壕〈講談社現代新書1209〉	浦添市立図書館資料係
〃	墓と葬送の社会史〈講談社現代新書1152〉	〃
〃	台湾文献書目解題 第2種・地図類 2	国立中央図書館台湾分館
〃	台湾文献書目解題 第2種・地図類 3	〃
〃	なは女性史証言集—生命のあかし	那覇市総務部女性室
〃	宇検村内のノロ遺品	先田 光演（奄美）
〃	郷土浪漫 AMAMI	鹿児島県宇検村役場
〃	「平安名常亀人形展」図録	沖縄市立郷土博物館
〃	沖縄県立図書館所蔵「昭和前期資料展示目録」	沖縄県立図書館
〃	南西地域研究資料センター報告 No.53	鹿児島大学南西地域研究資料センター
〃	法政大学沖縄文化研究所所報 第42号	法政大学沖縄文化研究所
〃	那覇市議会史編さんだより 第2号	那覇市議会事務局
〃	資料館だより 第10号 1994・9・23	ひめゆり平和祈念資料館
〃	南島研究 第35号	南島研究会
〃	文書館紀要 第7号	埼玉県立文書館
〃	埼玉県関係行政文書件名目録 戦中戦後期Ⅰ	〃
〃	埼玉県関係行政文書件名目録 戦中戦後期Ⅱ	〃
〃	斎藤（英）家・老川家・田口新吉氏収集文書目録	〃
〃	あやみや 第2号	沖縄市立郷土博物館
〃	沖縄市立郷土博物館「館報」 創刊号	〃
〃	こども博物館集録〈平成5年度〉	〃
〃	年報 No.3〈沖縄市立郷土博物館〉	〃
〃	年報 No.4〈沖縄市立郷土博物館〉	〃
〃	年報 No.7〈沖縄市立郷土博物館〉	〃
〃	年報 No.8〈沖縄市立郷土博物館〉	〃
〃	企画展「沖縄のチョウ」（図録）	〃

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
12月16日	企画展「沖縄の帰化植物」(図録)	沖縄市立博物館
〃	企画展「沖縄のシダ標本展」(図録)	〃
〃	企画展「イタジイの森と川と生きものたちが語る嶺山原」(図録)	〃
〃	沖縄市緑地帯の小動物	〃
〃	沖縄市の自然－身近な動植物	〃
〃	続・日本の意匠－文様の歳時記9・秋Ⅲ	京都書院
12月20日	放送余聞－草創期のラジオ・テレビ	安里慶之助(那覇市)
〃	八重山大浜村の郷土誌	浦添市立図書館資料係
〃	沖縄県農業教育史	〃
〃	沖縄キリスト教短期大学紀要 第20号	沖縄キリスト教短期大学
〃	ヤチムン会誌 1971年第2号	ヤチムン会
〃	竹富島古謡誌－古代文化の源流を訪ねて	本庄 正佳(南風原町)
〃	中国・沖縄空手古武道の源流	仲本 政博(那覇市)
〃	本部町の文化財・第8集 本部町の聖地	本部町教育委員会
〃	石垣市史のひろば 第19号	石垣市総務部市史編集室
〃	石垣市史 各論編 民俗・上	〃
〃	環境問題からみた沖縄振興の課題〈沖縄問題研究シリーズ第125号〉	財団法人沖縄協会
〃	EM技術と沖縄の未来〈沖縄問題研究シリーズ第126号〉	〃
〃	ハブ毒の活用と沖縄の医療問題〈沖縄問題研究シリーズ第127号〉	〃
〃	東アジアにおける沖縄の可能性〈沖縄問題研究シリーズ第128号〉	〃
12月21日	やちむん 第4号 特集＝壺屋	やちむん会
〃	沖縄県の民俗芸能	
	－沖縄県民俗芸能緊急調査報告書－〈沖縄県文化財調査報告書第112集〉	沖縄県教育委員会
〃	「沖縄北部のウンガミ」関連資料	〃
	－記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財	
1995. 1. 4	ふるさとの伝え話(4分冊)〈具志川市史・別巻 民話集〉	具志川市史編集室
〃	第20回記念全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会	全国歴史資料保存利用機関連絡協議会
〃	全史料協研修会テキスト 1994・10	〃
〃	神奈川県立公文書館年報 第1号〈平成5年度〉	神奈川県立公文書館
〃	神奈川県立公文書館だより 創刊号	〃
〃	神奈川県歴史資料取扱機関連絡協議会会報 創刊号	神奈川県歴史資料取扱機関連絡協議会
1月17日	琉球歌劇の周辺〈おきなわ文庫71〉	ひるぎ社
〃	平和の炎 Vol. 7 第7回読谷村平和創造展〈読谷村全戦没者名簿〉	読谷村役場総務部企画課
〃	地域と文化 第64号	ひるぎ社
〃	地域と文化 第81号	〃
〃	地域と文化 第85・86合併号	〃
〃	経済と社会 第11巻	沖縄経済学会
〃	島田寛平(画文集)	寛平先生を語る会

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
1月17日	琉球大学経済研究 第48号〈山城新好教授追悼号〉	琉球大学法文学部
1月21日	福建船政局史稿	高良 倉吉（那覇市）
〃	泉州港与古代海外交通	〃
〃	泉州海交史詩	〃
〃	泉州南音芸術	〃
〃	琉球妙心寺派末寺禅宗史略伝	宮古祥雲寺
〃	龍寶山祥雲寺概要寺庭回顧録	〃
〃	宮城県図書館所蔵「絵図・地図解説目録」	宮城県図書館
〃	本部町史 通史編・上	本部町役場
〃	本部町史 通史編・下	〃
〃	日本の馬の意匠	財団法人馬事文化財団
1月22日	清代中琉関係档案続編	おきぎんふるさと振興基金
2月7日	横内家と近代沖縄－横内家寄贈資料展	那覇市文化局歴史資料室
〃	岡崎宿・伝馬	鈴木 雅美（愛知県）
〃	多良間島調査報告書（2）〈地域研究シリーズNo.20〉	沖縄国際大学南島文化研究所
〃	南島文化 第15号	〃
〃	南島文化 第16号	〃
2月16日	石垣市史のひろば 第20号	石垣市総務部市史編集室
〃	浦添市美術館紀要 第3号	浦添市美術館
〃	第21回企画展「地図展・古地図からコンピュータ地図まで」	沖縄市立郷土博物館
〃	シルクロードと茶の道（開館記念特別展）	入間市博物館
〃	入間市博物館常設展示図録	〃
〃	島袋俊一先生顕彰記念誌	伊江村教育委員会
〃	上代日本文学講座 特殊研究篇上	岸 秋正（東京都）
3月14日	川内市歴史資料館資料目録（8）・歴史資料Ⅰ	川内市歴史資料館
〃	民俗文化 第374号	滋賀民俗学会
〃	民俗文化 第375号	〃
〃	民俗文化 第376号	〃
〃	沖縄の呪符木簡について	玉木 順彦（北谷町）
〃	沖縄教育研究 第2号	沖縄教育学会
〃	浦添市美術館開館5周年記念「輪島漆芸展」	浦添市美術館
〃	歴代寶案 校訂本第七冊（第2集巻75～85）	沖縄県立図書館史料編集室
〃	見学の手びき	沖縄県立平和祈念資料館
〃	資料館だより 第22号〈沖縄県立平和祈念資料館〉	〃
〃	資料館だより 第23号〈沖縄県立平和祈念資料館〉	〃
〃	資料館だより 号外 2月4日〈沖縄県立平和祈念資料館〉	〃
〃	資料館だより 号外 3月1日〈沖縄県立平和祈念資料館〉	〃
〃	城辺町史だより 創刊号	城辺町史編纂事務局

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
3月14日	さつまいも 伝統と文化 くかごしま文庫19)	栗国 恭子(浦添市)
〃	平成七(乙亥)年かごしま暦	〃
〃	ハルおばあ <比嘉ハルさん85歳生年祝記念写真集>	渡具知 伸(名護市)
〃	わがふるさとと愛媛学(平成5年度愛媛学セミナー集録)	愛媛県生涯学習センター
〃	愛媛学のすすめ 解説・対談	〃
〃	リカレント学習システムの整備について(平成3年度)	〃
〃	リカレント学習関連調査報告書(平成3年度)	〃
〃	リカレント学習のすすめ	〃
〃	生涯学習ハンドブック	〃
〃	生涯学習ボランティア養成ハンドブック(平成4年度)	〃
〃	あなたも参加してみませんか <生涯学習ボランティア活動のすすめ>	〃
〃	生涯学習における公民館のあり方と学習プログラムに関する研究	〃
〃	企業と生涯学習	〃
〃	市町村生涯学習実態調査	〃
〃	民間カルチャー事業所及び専修学校・各種学校における生涯学習	〃
〃	沖大経済論叢 第18巻第1号・通巻44号	沖縄大学経済学会
〃	沖縄文化研究 21 <法政大学沖縄文化研究所紀要>	法政大学沖縄文化研究所
〃	琉球の方言 18・19合併号 中本正智博士追悼号	〃
〃	鹿児島県史料 旧記録拾遺・家わけ5	鹿児島県歴史資料センター黎明館
3月15日	琉球史料 第1集・政治編1(復刻)	金城 功(那覇市)
〃	琉球史料 第2集・政治編2(復刻)	〃
〃	琉球史料 第3集・教育編(復刻)	〃
〃	琉球史料 第4集・社会編1(復刻)	〃
〃	琉球史料 第5集・社会編2(復刻)	〃
〃	琉球史料 第6集・経済編1(復刻)	〃
〃	琉球史料 第7集・経済編2(復刻)	〃
〃	琉球史料 第8集・経済編3(復刻)	〃
〃	琉球史料 第9集・文化編1(復刻)	〃
〃	琉球史料 第10集・文化編2(復刻)	〃
3月30日	鹿児島県史料 玉里島津家・史料4	鹿児島県歴史資料センター黎明館
〃	新聞集成大正編年史 <大正2年度版>	明治大正昭和新聞研究会
〃	資料館だより 第11号 1995・12・3	ひめゆり平和祈念資料館
〃	台湾地区現存碑碣図誌 台南県篇	国立中央図書館台湾分館
〃	八重山の民俗芸能(3) <沖縄県文化財調査報告書第36集>	金城 功(那覇市)
〃	宜野湾市史 第1巻・通史編	宜野湾市教育委員会
〃	中城村史 第1巻・通史編	中城村役場企画課
〃	中城村史 第1巻・通史編 別冊資料	〃
〃	日本歴史 創刊号 <昭和21年6月>	岸 秋正(東京都)

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
3月30日	収蔵品目録「絵が語る明治の八重山」	石垣市立八重山博物館
4月16日	地域と文化 第87号	ひるぎ社
〃	季刊自然と文化 1994・46 秋季号 特集：笹森儀助の探検と発見	東 喜望（東京都）
〃	シマと島の歴史と民俗	先田 光演（奄美）
〃	久米島の旅情 歌と史跡と名勝の島	浦添市立図書館資料係
〃	街道をゆく13 壱岐・対馬の道〈朝日文庫〉	朝日新聞社
〃	街道をゆく25 中国・閩のみち〈朝日文庫〉	〃
〃	モンゴル入門〈三省堂選書175〉	三省堂
〃	モンゴルという国	読売新聞社
〃	多才に多彩それぞれの自分史	久茂地公民館
〃	日本の国旗・国歌「日の丸・君が代」の歴史と意義〈国民会館叢書13〉	社団法人国民会館
〃	キリスト教文化研究所研究年報 民族と宗教 第28号	宮城学院女子大学
〃	土着の人 平良幸市小伝	平良幸市回想録刊行委員会
〃	金武町移民企画展報告書	金武町教育委員会
〃	平和の礎 シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦Ⅴ	平和祈念事業特別基金
〃	平和の礎 軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦Ⅴ	〃
〃	平和の礎 海外引揚者が語り継ぐ労苦Ⅴ	〃
〃	戦争の記憶 日本人とドイツ人	TBSプリタニカ
〃	異なる悲劇 日本とドイツ	文芸春秋
〃	内里八丁遺跡発掘調査概報〈八幡市埋蔵文化財発掘調査概報第13集〉	八幡市教育委員会
〃	八幡市埋蔵文化財発掘調査概報第14集	〃
〃	上奈良遺跡発掘調査概報〈八幡市埋蔵文化財発掘調査概報第16集〉	〃
〃	沖縄大学地域研究所紀要 年報 1994年度 No. 6	沖縄大学地域研究所
〃	沖縄大学地域研究所 所報 No.10	〃
〃	環境問題からみた沖縄振興の課題〈沖縄問題研究シリーズ第125号〉	財団法人沖縄協会
〃	漆の貌—中国・朝鮮・日本	浦添市美術館
〃	東村の生き物たち	東村教育委員会
〃	浦添市土地開発公社 20年のあゆみ	浦添市土地開発公社
4月19日	沖縄県議会史関係資料目録 昭和56年4月1日現在	金城 功（那覇市）
〃	沖縄県議会史関係資料目録 昭和57年12月1日現在	〃
〃	御冠船夜話	〃
〃	平成七年八月十五日まで〈国民会館叢書12〉	〃
〃	自然科学と博物館 第37巻・第3～4号	〃
〃	野鳥 第40巻第7号・通巻346号	〃
〃	野鳥 第40巻第8号・通巻347号	〃
〃	野鳥 第40巻第9号・通巻348号	〃
〃	野鳥 第40巻第11号・通巻350号	〃
〃	野鳥 第40巻第12号・通巻351号	〃

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
4月19日	野鳥 第41巻第3号・通巻354号	金城 功（那覇市）
〃	高校生のための博物館学習ノート	〃
〃	新修旧鹿児島藩領国・郡・村・浦・町附 上巻〈鹿児島県史料集23〉	〃
〃	琉政文書がうったえるもの	〃
4月20日	ドラゴンブックレット No.1	ドラゴンブックレット刊行会
〃	那覇市議会史関係略年表（稿）	那覇市議会事務局
〃	那覇市議会史編さんだより 第3号	〃
〃	ジュニア版 写真で見る日本の侵略	大月書店
5月9日	大中誌	大中誌編集委員会
〃	小湾字誌 沖縄戦・米占領下で失われた集落の復元	小湾自治会
〃	浦添小湾方言辞典	〃
〃	小湾集落復元図	〃
〃	新川が語る沖縄戦〈南風原町沖縄戦戦災調査10〉	南風原町史編集委員会
〃	南西地域研究資料センター報告 No.54	鹿児島大学南西地域資料センター
〃	ハワイ大学宝玲文庫複製資料目録	金城 功（那覇市）
〃	海響 渡口雅人遺稿・回想集	渡口 和子（那覇市）
〃	牧港字誌	牧港自治会
〃	宮城真治民俗調査ノート（増補改訂版）〈宮城真治資料6〉	名護市史編さん室
〃	新沖縄県史だより 第3号	沖縄県立図書館史料編集室
〃	新沖縄県史だより 第4号	〃
〃	歴史資料室だより 第45号	那覇市文化局歴史資料室
〃	具志川市史だより 第8・9合併号	具志川市史編さん室
〃	金良宗邦文書一易・擇日・風水〈北谷町中間報告書〉	北谷町教育委員会
〃	宮古島保良の土俗信仰	松川 寛良（浦添市）
〃	ぎのわんの針灸〈口承民俗文化記録保存調査報告書〉	宜野湾市教育委員会
〃	Southern Review No.9	沖縄外国文学会
〃	琉清後援会報 第7号	琉清後援会
〃	島びとの硝煙記録 多良間村人の戦時・戦後体験記	多良間村教育委員会
〃	読谷村立歴史民俗資料館紀要 第19号	読谷村立歴史民俗資料館
〃	上地・親志・都屋の民話〈読谷村民話資料集12〉	〃
6月9日	文書による郷土的なレファレンス質問に対する回答事例	仙台市民図書館
〃	劉寒吉文庫目録	北九州市立図書館
〃	沖縄県立芸術大学紀要 No.3 1995	沖縄県立芸術大学
〃	沖縄研究ノート 4 共同研究〈南島における民族と宗教〉	宮城学院女子大学キリスト教文化研究所
〃	古代の沖縄市〈沖縄市文化財啓発資料第3集〉	沖縄市立郷土博物館
〃	胡屋・仲宗根のわらべ歌〈沖縄市文化財調査報告書第19集〉	〃
〃	外交史料館報 第9号	外務省外交史料館
〃	広島県立文書館だより 第5号	広島県立文書館

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
6月9日	子ども文化学研究 第3号	中京女子大学子ども文化研究所
〃	沖縄関係学研究会論集 創刊号	津田塾大学国際関係研究所
〃	沖縄法学 第24号	沖縄国際大学法学会
〃	商経論集 第23巻・第1号	沖縄国際大学商経学部
〃	竹富町史だより 第7号	竹富町史編集室
〃	琉球問題と清国ジャーナリズム(資料篇Ⅵ)	西里 喜行(宜野湾市)
〃	生活文化研究所紀要 第6輯	ノートルダム清心女子大学生活文化研究所
〃	生活文化研究所紀要 第8輯	〃
〃	なぎ物語 焼内湾・奄美大島	鹿児島県宇検村振興育英財団
〃	日本の近代—地域と文化—	紙屋 敦之(埼玉県)
〃	「チベット曼荼羅と仏たち」展図録	ミュージアム知覧
〃	なきじん研究 1995 Vol.5 〈今帰仁の歴史と文化〉	今帰仁村歴史文化センター
〃	沖縄女性史研究 第8号〈祭祀(トートメー)継承と女性〉	下地恵美子(宜野湾市)
〃	地域文化研究 10〈地域文化研究紀要〉	梅光女学院大学地域文化研究所
〃	梅光女学院大学地域文化研究所通信 No20	〃
〃	なは浪漫 創刊号 特集:街角コレクション「この街が大好き」	那覇市企画部広報課
〃	なは浪漫 Vol.2 特集:やっぱり音楽は生の方がいい	〃
〃	なは浪漫 Vol.3 特集:街角コレクションⅡ「普段着の那覇」	〃
〃	なは浪漫 Vol.4 特集:スポーツ熱中時代	〃
〃	なは浪漫 Vol.5 特集:手仕事の粋	〃
〃	なは浪漫 Vol.6 特集:那覇のマーサムン	〃
〃	なは浪漫 Vol.7 特集:沖縄芝居の一世紀	〃
〃	なは浪漫 Vol.8 特集:那覇慕情	〃
〃	沖縄森永乳業40年史「牛乳と共に40年」	(株)沖縄森永
6月27日	移動展・特別展実施報告書(平成5年)	沖縄県平和祈念資料館
〃	沖縄県平和祈念資料館々報 No.8	〃
〃	資料館だより 第18号〈沖縄県平和祈念資料館〉	〃
〃	資料館だより 第19号〈沖縄県平和祈念資料館〉	〃
〃	資料館だより 第20号〈沖縄県平和祈念資料館〉	〃
〃	資料館だより 第21号〈沖縄県平和祈念資料館〉	〃
〃	ひめゆり平和祈念資料館々報 第6号	ひめゆり平和祈念資料館
〃	ひめゆり平和祈念資料館だより 第12号	〃
〃	感想文集 ひめゆり 第6号	〃
〃	会誌「いずみ」 第13号	浦添市文化協会
〃	沖縄県行政資料目録 平成6年12月1日現在	沖縄県総務部文書学事課
〃	法律家のみた日本古代千五百年史—古代天皇制誕生までの過程	図書刊行会
〃	琉球大学経済研究 第49号	琉球大学法文学部
〃	歴史の道 国頭方西海道〈保存整備事業報告書〉	恩納村教育委員会

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
6月27日	史料編集室紀要 第20号	沖縄県立図書館史料編集室
〃	沖縄県史研究紀要 創刊号	〃
〃	第二屆琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集	〃
〃	歴代宝案研究 第5号	〃
〃	沖縄県史料 前近代8 芸能I	〃
〃	移住研究 No.32	国際協力事業団企画部
〃	REVERSIBLE 6 特集:「島島上陸人の安否如何」志賀重昂と南大東島	鈴木 雅美(愛知県)
7月11日	地域と文化 第88号	ひるぎ社
〃	ひめゆりの塔をめぐる人々の手記	浦添市立図書館資料係
〃	宮本愚翁日記抜粋・恩ほうし〈広島県立文書館資料集2〉	広島県立文書館
〃	黄金の都・シカン発掘展〈琉球放送創立40周年記念企画〉	浦添市美術館
〃	〔館蔵〕琉球漆器	〃
〃	首里城研究 No.1	首里城研究会
〃	竹富町史 第11巻資料編 新聞集成II	竹富町史編集室
〃	沖縄県・宮古史料の旅	仲宗根将二(平良市)
〃	沖縄短大論叢 第9巻第1号・通巻10号	沖縄大学短期大学部
〃	沖大法学 第16号	沖縄大学法学会
〃	沖縄大学紀要 第12号・通巻32号	沖縄大学教養部
7月13日	多良間村史 第4巻資料編3 民俗 付録:多良間村民俗地図・多良間島の屋号	多良間村
〃	多良間村史 第6巻資料編5 多良間の系図並びに勤書・古文書・御嶽・古謡	〃
〃	瀬底誌	瀬底誌編集委員会
〃	瀬底誌 資料編	〃
〃	沖縄女子短期大学紀要 第11号	沖縄女子短期大学
8月8日	沖縄県体育協会史	財団法人沖縄県体育協会
〃	ミュージアム知覧館報 第1号	ミュージアム知覧
〃	中世日本列島の地域性—中世考古学及び隣接諸学—資料集	豊見山和行(那覇市)
〃	琉歌古典歌詞集(川平親雲上朝彬編著)	川平 朝申(那覇市)
〃	やさしくまとめた沖縄の歴史	浦添市立図書館資料係
〃	沖縄建築 Vol.27	社団法人沖縄県建築士会
〃	清代中国・琉球関係档案史料展目録〈沖縄県公文書館開館記念特別展〉	沖縄県公文書館
〃	蘇る沖縄 戦災文化財と戦後生活資料展	沖縄県立博物館
〃	十島村誌	十島村教育委員会
〃	宇宿貝塚発掘写真集	笠利町教育委員会
〃	用安湊城—主要地方道竜郷・奄美空港線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告	〃
9月12日	月刊歴史手帖 第23巻6号 小特集:近世の琉球と情報	真栄平房昭(兵庫県)
〃	万国津梁の国〈公文書の旅〉VHS/25分	シネマ沖縄
〃	琉球辞令書の一覧表と収集現況	高良 倉吉(那覇市)
〃	聖なる島への国家的視覚の形成—琉球王国御新下り儀式に見る久高島の意味	伊従 勉(京都府)

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
9月12日	祭場の赤い天蓋と白い天幕 －沖縄久高島の年中祭祀祭場にみる琉球王国祭祀祭場舗設の影	伊従 勉（京都府）
〃	沖縄経済開発の基本と展望	浦添市立図書館資料係
〃	琉政文書と十七年	渡口 善明（浦添市）
〃	台湾地区現存碑碣図誌 高雄市・高雄県篇	国立中央図書館台湾分館
〃	大湾と渡具知の関係を考える	字大湾誌編集委員会
〃	神奈川大学評論 21・1995	神奈川大学広報課
〃	「うらおそいのおもろ」の散歩道（浦添市「おもろの碑」めぐりガイドブック）	浦添市教育委員会文化課
〃	奄美・沖縄民間文芸研究 第16号	末次 智（京都府）
〃	地域文化と沖縄音楽の役割（沖縄問題研究シリーズ第131号）	財団法人沖縄協会
〃	ドイツ商船R.J.ロベルトソン号宮古島漂着記	上野村役場
〃	読谷まつり20周年記念誌（読谷文化の継承／創造から発展・開花へ）	泉川 良彦（読谷村）
〃	文書館だより 第7号	徳島県立文書館
〃	古文書の保存と補修（第11回所蔵資料紹介展）	〃
〃	入間地方の文書（平成7年度第1回収蔵文書展）	埼玉県立文書館
〃	ひろば（名桜大学附属図書館報・第2号）	名桜大学附属図書館
〃	びぶりお Vol.28 No.4	琉球大学附属図書館
〃	沖縄の歴史情報 No.5 Summer.1995	豊見山和行（那覇市）
〃	無限大 No.97 特集：東西文化の出会い	山本 弘文（東京都）
〃	蔚山倭城・兵営城址（古跡調査報告書第12冊）	東亜大学校博物館
〃	蔚州華山里城址（古跡調査報告書第16冊）	〃
〃	巨済古鼎城址（古跡調査報告書第18冊）	〃
〃	巨済烏壤城址（古跡調査報告書第22冊）	〃

◆1995年度刊行分の紹介

『琉球王国評定所文書』第12巻 1996年 3月発刊

※口絵 8P、本文470P、総501P。 ※市販定価 4,120円（消費税込み）

☐発刊のあいさつ 浦添市教育委員会教育長 福山朝秀

☐目次 ☐凡例

〔巻頭論考〕琉球の海外情報からみた東アジア 真栄平房昭

1 年中各月日記〔帳当座〕（咸豊6年）

※1541号 ※解題：金城 功

2 案書（咸豊6年）

※1542号 ※解題：徳元 剛

3 異国御用掛日記（咸豊6年）

※1547号 ※解題：恩河 尚

4 亜船来着ニ付守衛方江御届申上候写（咸豊6年）

※1548号 ※解題：西里喜行

5 標題のみ（5件）

☐編集委員名等

◆1996年度刊行予定分の紹介

『琉球王国評定所文書』第13巻 1997年 3月発刊予定

☐発刊のあいさつ 浦添市教育委員会教育長 福山朝秀

☐目次 ☐凡例

〔巻頭論考〕歴史と説明の間―語られる歴史 池宮正治

1 仏船来着并仏人逗留ニ付泊ニ而之日記（咸豊5～6年）

※1550号 ※解題：仲地哲夫

2 仏人逗留ニ付那覇ニ而之日記（咸豊6年）

※1551号 ※解題：田名真之

3 仏蘭西船来着那覇ニ而之日記（咸豊6年）

※1552号 ※解題：田里 修

4 仏船来着ニ付守衛方江御届申上候扣（咸豊6年）

※1553号 ※解題：豊見山和行

5 鳥島より送来候漂着朝鮮人介抱日記（咸豊6年）

※1554号 ※解題：高良倉吉

6 従大和下状（咸豊6～7年）

※1557号 ※解題：里井洋一

7 標題のみ（4件）

☐編集委員名等

〔 本号執筆者 〕 掲載順

栗 国 恭 子 AGUNI, Kyouko

沖縄学研究室嘱託員

資料係 (五十音順)

伊波民子 (IHA, Tamiko・資料係嘱託員)、伊良波裕子 (IRAHA, Youko・臨時職員)

我謝薫 (GAJYA, Kaoru・臨時職員)、崎原弥佳 (SAKIHARA, Mika・臨時職員)

遠山満 (TOUYAMA, Mituru・資料係係長)、友利幸子 (TOMORI, Sachiko・資料係嘱託員)

森田牧子 (MORITA, Makiko・主事)、米盛恭子 (YONEMORI, Kyouko・臨時職員)

奉仕係・児童サービス

慶田城朝子 (KEDASHIRO, Tomoko・奉仕係嘱託員)

石川あきの (ISHIKAWA, Akino・臨時職員)

畠山しのぶ (HATAKEYAMA, Shinobu・臨時職員)

与 座 文 子 YOZA, Fumiko

浦添市立図書館館長

又 吉 栄 喜 MATAYOSHI, Eiki

沖縄学研究室主査

長 間 安 彦 NAGAMA, Yasuhiko

沖縄学研究室嘱託員

上 間 尚 二 UEMA, Shouji

浦添市立図書館主事

金 城 功 KINJYO, Isao

琉球王国評定所文書編集嘱託員

徳 元 剛 TOKUMOTO, Tuyoshi

琉球王国評定所文書編集嘱託員

高 良 倉 吉 TAKARA, Kurayoshi

琉球大学法文学部教授

屋嘉比 収 YAKABI, Osamu

九州大学大学院生

岸 秋 正 KISHI, Akimasa

資料蒐集家 (故人)

小 野 まさ子 ONO, Masako

沖縄県立公文書館職員

1997年 3 月24日 印刷

1997年 3 月28日 発行

浦添市立図書館紀要

No. 8

編 集 浦添市立図書館

沖縄県浦添市安波茶151番地

PHONE (098) - 876 - 4946

FAX (098) - 875 - 1772

発 行 浦添市教育委員会

印 刷 株式会社 太 陽

沖縄県浦添市安波茶265-1

PHONE (098) - 876 - 4188



埔城市立圖書館